
転生者の生き様と在り方

蒼朱翠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生者の生き様と在り方

【NNコード】

N1814N

【作者名】

蒼朱翠

【あらすじ】

「少し、休むとするか……」

ありとあらゆる世界へ転生し、生死を繰り返す転生者。彼が疲弊し、平穀を求めて転生するところから、この物語が始まります。そんな彼と、周囲の人物達との遭り取りや、出来事の一部始終をご覧下さいませ。

*主人公はチート転生者ですが、最近のチート物にありがちな安っ

ぽい展開、スカスカな文章、描写不足などは作者が嫌つて いる為、
『ラノベっぽく』なる上、亀更新となります。

当作品は、主流である本編と、主流から外れた支流である番外編により構成されていますので、番外編である【間章】、【短章】、【断章】などは、本編の進展には『全く関係有りません』。

何故ならば、主流たる本編に“有り得る”または“そうであった”展開を、番外編として本編の合間に挿入しているだけだからです。よって当作品では、『番外編は本編の一次創作である』と考えて下さい。ですので、番外編は本編には影響しませんし、読み跳ばしても本編は理解出来る様になつております、何の問題も御座いません。

もし、番外編を不快に感じる方がいれば、読み跳ばして頂いても構いません。ですが本編にチート無双やハーレム、アンチや勸善懲罰といった要素を極端に『所望の方は申し訳御座いませんが、他作品をお読み下さいませ。作者としては、サイト繋がりで『にじファン』行きをオススメしております。

また自己紹介でも書いておりますが、念の為、此処でも記述しておきます。作者は基本的に、改善点や疑問点、矛盾点への指摘や追究、誤字・脱字や改行ミスの報告以外では、感想を一切受け付けません。アンケートを実施する場合のみ例外で、レビューを書く場合は常識に沿つた上で、好きに書いて頂いて結構です。

以上を踏まえた上で、当作品をお楽しみ下さいませ。

プロローグ（前書き）

よくある転生物で、オリ主人公が最初から最後までチート無双してハーレムを築く。……そんなありきたりに飽きてしまった人へ、この作品を奉げます。前述の通り、序盤から俺tueeee!!な展開はそれほど出ません。むしろ、この作品の主人公は自重します。が、終盤からは已む無くチートを使うかもしれません。ご了承下さいませ。

なお、全力全開のチート無双を期待していた人は、今の内にお戻り下さいませ。

追記：PCから見ることを前提としていますので、携帯から見ることをお勧めしません。

プロローグ

転生者に求められるのは、繰り返される生死に耐えられるだけの精神力と、周囲の環境への柔軟な適応力、そして前世で得た経験や知識を活かす応用力である。

「精神力、適応力、応用力。基本はサバイバルと似ていますわね」
「体力が然程重要でないだけ、まだマシと言えるがな」
「あら、体力も重要でしてよ？ もやしつ子では、満足に動けなくて退屈ですわ～…」
「経験者は語る か」
「まあ、今となつては良い経験ですけれどね」

プロローグ：覚醒前の回想

生きて生きて生き抜いて、そして同じ数だけ自分は死んで来た。

平穏な時代を。戦乱の時代を。変革の時代を生きては死んだ。

繰り返される生、繰り返す死。

これが同一世界の同一人物として繰り返されていれば、

回数を重ねる毎に狂つていき、絶望していた事だろう。

だが、そんな事は無かつた。

世界は様々な分岐点から平行世界を無限に作り出し、またその世界の分岐点から平行世界を といった具合に無限に続けており、まさに無尽無窮の様相を呈していた。

今度転生する先の世界もまた、その内の一つ。

自分が初めて死んだ世界の平行世界の中でも、最も分岐した先にある平行世界。

其処へ、今から転生するのである。

「さて、どんな世界が待つてゐ事やう……？」

プロローグ（後書き）

改訂しました。と言うか、全体的に書き直しました。見る影は冒頭部の小話（で良いんでしょうか？）の部分くらいです。正直、作者は詩形式が苦手ですので、次は無いと思います。

オーバー。

第1話（前書き）

しばらく連続投稿が続きますが、ストック分ですので更新速度が速いという訳ではありません。あしからず。なお、ルビ振りは最小限に留め、人物名などは各話ごとに最初のヤツだけやります。また、この作品では如何・何処・何時・何故・～の事・有る・無い、の様な語句を文の流れ（とでも言うんでしょうか？）に応じて使いますので、決して変換忘れとかではありません。オーバー。

人は生を謳歌し、死を忌避する。転生者は終わらぬ生を持て余し、一時の死に生を感じる。そしてまた、彼等は覚醒するのである。新たな知性体に、転生することによつて。

「まるで、尻尾を咥えてぐるぐる転がる蛇みたいだね？」

「ウロヴォロスと言え。ウロヴォロスと」

「そう言えば、蛇の化け物でコカトリスって居たよね？」

「それはバジリスクだ。コカトリスはでかい鶏みたいな化け物を指す」

「……そうだつたっけ？」

「ああ。そうだ」

「何度目かの覚醒 / 家族未満、他人以上」

思考が何処までも冴え渡つていてことを確認しつつ、周囲を確認する。どうやら、記憶によると此処は自室らしい。体調と身体能力を把握した上で起き上がり、腕に刺さっていた点滴を引き抜き、心拍測定機を停止させた上で指先を挟んでいた測定機を外した。

「取り敢えず、歩いてみるか」

ついでに聲音を確認しつつ、ドアを引き開けて、廊下へと出る。それから各部屋を覗いてみたが、どうやら家族は全員外出中らしいへ、現在家に居るのは自分だけのようだ。

それを確認すると2階から自室に戻り、衣装棚の中から適当な衣服を漁つて着替え、置き書きを残して外へと出た。無論、玄関の鍵はちゃんと閉めたので、防犯に関しては心配無い。

「しかし、何處へ行くべきか…」

外出する前に時計で確認した時刻では、午後4時を過ぎていた。今の時間帯は道が人で混む時間帯なので、街中を歩くのはあまり気が進まない。　とすると、市立図書館に向かうのが最善か？
平日だから人も少なく、利用しやすいだらう。

「じぱりくは飽きずには済みそうだ」

そして案の定、問題無く利用することが出来た。作ったばかりの貸し出しカードと借りた本を片手に、下校中の学生に混じつて何事も無く帰宅した。

玄関ドアを開けて中に入ると、既に家族の誰かが帰宅しているらしく、靴が一足分増えていることに気付いた。奇麗に揃えて置いてある事と、靴の趣向から察するに、長女の靴だと思われる。結局、ドアの開閉音が聞こえたのか長女が居間から出て来た為、推測する

までもなかつたが。

「あ、お母さん。今日は理貴くんと病院に行つた……」

「ただいま」

「え……あれ？ はえ……あのつ……えーとお……」

長女は状況に思考が追い着いていないらしく、その場で硬直していた。いちいち説明するのも面倒だつたので、その隙に横を通り抜けて自室に

「ちよ、ちよっと待つたああああああ……！」

入ろうとしたところで、腕を掴まえられた。仕方が無いので、しばらく相手することにした。

「何の用だ？」

「えつと……、取り敢えずおかえり……」

「ああ、ただいま。それで、何の用だ？」

挨拶も出来ない馬鹿かと思っていたが、意外に賢いようだ。少しだけ、長女への評価を上方修正する。

「その……もつ大丈夫なの？」

「正確には、大丈夫になつた。それだけだ」「あ、そなうなんだ。……お、おめでとう?」

疑問形で聞かれても困るのだが？

「 そへ(さ)、 俺は一へで

「あのっ！」

「今度は何だ？」

「あのね、久し振りにお話しそう……」
　　駄目、か

覚醒前の記憶を辿ると、この家庭はかなり歪なことが分かる。父親が今の母親と再婚し、父子家庭だつた俺に3人の姉妹が出来た。それから同居生活を始めて僅か1ヶ月足らずで、俺は事故に遭つて重傷を負つたのであつた。

しかも記憶によれば、道路の真ん中で立ち竦んでいた女子学生を突き飛ばした代わりに、暴走トラックに撥ねられたようだ。お人好しで死に掛けるとは、なかなか滑稽な話である。

「居間で話そつか」

「そ、そうだね。此処で立ち話も何なんだし……」

「いらっしゃりとしては、空白の記憶 事故直後から覚醒するまでに
あつた出来事 に關することだけを聞ければ良いのだが、妙に

押しの強いこの長女が一方的な会話で満足するはずが無いだらう。
長期戦を覚悟するべきだな……。

「えつと……何から話そうかな？ つづん……」

「出来れば、俺が寝ていた間の話をして欲しい」

「あ、それもそうだね。理貴くんが事故に遭つて病院に搬送された

後
「

どうやら長女の話によると、俺は緊急手術を受けたものの昏睡状態が続き、例え目が覚めても腰から下は動かせないだらうと宣告されていたらしい。そんな俺を父親が伝手を頼つて、退職した医師を専属医師として雇い、俺を自宅療養出来るようにしてくれたのだそうだ。

どうも、「白一色の病室よりも、自室の方が落ち着くだらう」と配慮してくれたようだ。記憶の中の疎遠がちな父親からは想像出来ないが、これでも気にかけてくれた方だらう。

「あとね、理貴くんが助けた人が何度か来たんだよ？ その度に、
青い薔薇を一輪だけ持つて来るの。最後に来たのは、1週間ぐらいい
前……だつたかな？」

「黒の長髪で、奇麗な人なんだけど……少しあつれていて、元気
ブルーローズ
青い薔薇、か……。確か、自室の花瓶に飾られていた様な気がする。

が無さそうだった。多分、罪悪感で食事が喉を通りらないんだと思つ

…」

愚かだな。

「愚かだな」

「……何で、そつ思つの？」

「罪悪感を抱いたところで、そいつに出来ることは祈りと見舞いの

2つだけだ。食事を摂らない必要性は全く無い」

「んと……現実的には、そつなんだけどね……」

むしろ、罪悪感を使命感に替えて医者を田指すなど、前向きに生きて欲しいものだ。

「あ、そろそろ帰つて来るかな？」

「誰が？」

「お母さん。いつもなら私と入れ違いで買い物に行くんだけど、今日は用事で私が遅れちゃつたから……」

「道理で居なかつた訳か…」

「「めんなさい」

「謝るくらこなう、お粥の1つでも作つて欲しいのだが？」

点滴のお陰で活動には支障が無いものの、腹の中に何か収まつてないといふ氣がすまない。要するに、質はあっても量が足りないと言つたところだ。お粥を選んだ理由は、病人食でもあり、作るのに然

程時間が掛からないからである。

「それじゃあ、何かリクエストはある?」

「何がある?」

「卵粥（あいがつあい）に梅鰹（あいがつあい）粥（あいの）に茸粥（きのの）に塩粥（しおの）くらいかな?」

4 抹か……。おそらく、卵粥ならハズレは無いはずだ。……多分。

「卵粥で頼む」

「分かった。作るまでの間、少し待つていてね?」

「ああ」

そして數十分後。想像以上の卵粥が、俺の目の前にあった。

「何だこれは?」

「卵粥だよ?」

「お前、料理を嘗めているだろ?」

普通、卵粥と聞けば溶き卵がお粥に入っているモノを想像するが、この長女が作った卵粥は、お粥の中に卵を3個入れただけの卵粥である。既にお粥の熱で、半熟卵のようになっている。

「あ、それにお酒と砂糖も少し入れていいんだよ?」

「……何時から卵酒をお粥に入れて、卵粥と称するよつになつたんだこの国は？」

「ブランティーじゃないから卵酒じゃないもん！」

そこで何処ぞの突撃魔女ストライクウイッチみたいな台詞せつふを吐かれても困る。

「むしろ、それ以前の問題だ。これはおおよそ万人が考え得る卵粥ではない。普通の卵粥は、お粥の中で溶き卵が攪拌かくはんされており、無理なく少量で、高力口リーを摂取出来る様になつてゐる」

ちなみに正しい卵酒の作り方は、溶き卵に砂糖と酒を混ぜて作る。酒は、出来れば温めたものが好ましい。

「うう……冷めない内に食べてね？」

……話を戻したか。

「まあ良い。作ってくれと頼んだのは他でもない自分だ。責任を持つて食べるにしよう」

「あのー……無理そうだったら、残しても良いからね？」

「無理そうだったらそうする。頂きます」

だが予想に反して、見た目や材料はともかく味は至つて普通だつ

た。酒のアルコール分は熱でほとんど飛んでいるし、卵と砂糖も甘いオムレツがお粥の中に入っていると思えば、食べられないこともない。

しかも、卵殻の破片が一切入っていないのだ。少なくとも、基本技術に関しては問題無い。有るとすれば、それは料理に関する知識の方だろう。

「（）馳走様。もう少し、料理の腕を磨くと良い」

「む……。精進します」

「ああ、精々頑張れ」

しかし歴代の姉と比べてみれば、比較的に食えた方だと言わざるを得ない。何を思ったのか米を磨り潰してスープにした姉や、マムシやスッポンの血を入れた真っ赤な粥を作った姉がいたりした。それと比べればこれくらいは

「…………今日の理貴くん、なんだか変だね？」

「何処がだ？」

「優しい…………？ いや、格好良いのかな？」

「……そのまま呆けていろ、駄目姉」

「ひどいっ？！」

泣き崩れるふりをする長女を無視して自室へ戻り、図書館から借りた本を読むことにした。正直、これ以上他人と話すのは疲れるからだ。特に、覚醒前の自分を知っている人と話すのが疲れる。何故なら、向こうは覚醒前の自分に話し掛けているつもりなのだ

が、中身は覚醒後の自分なのだ。つまり、一番身近な存在でありながら他人という、若干居心地の悪い状況が出来上がる。

よつて、まずは状況の改善が優先となる。家族に始まり、親友や学友と徐々に範囲を広げる必要がある。しかし、この家族は自分を含め6人家族。仕事の都合で年中不在気味な父親を除けば、実に4人も相手に対処しなくてはならない。

「……面倒だな」

少しだけ、再婚した父親を恨んだ。

第1話（後書き）

主人公の名前は『理貴』^{りき}と判明しました。駄目姉こと長女の名前は、もうしばらく後になつてから判明します。ところで、文の長さはこれで適当でしょうか？一応、空白を含めて作文用紙10枚分くらいはあるんですけどね…。

引き続き、当作品お楽しみ下さい。オーバー。

第2話（前書き）

「連續投稿3回目。かと書いて別段、執筆速度が速いという訳で」
(r y)

* 当作品はよく改訂しますが、行間の調整や表現の変更がほとんどなので、あまり見直す必要は無いと思われます。必要な場合は皆知しますので、ご心配なさらず。ちなみに文中の「俺」「俺」や「自分」といった一人称は雰囲気に応じて使っていますので、統一されていません。そこは「ご」承下さい。

考察とは、経験や知識を活かし、それまでに得た情報を元手に納得のいく答えを導き出す行為である。その為、納得するのが最大の目的であり、理解するのはただの手段でしかあらず、必ずしも理解する必要は無い。なぜ何故ならば、理解することが常に正しいとは限らないからだ。

「理解しているが納得出来ない。納得しているが理解出来ない。君は、どっちが良いと思うかい？」

「後者だ。割り切った方が、思考を停滞させなくて済むからな」「なるほど…。しかし、意外だったなあ。君はてっきり前者かと思っていたよ」

「迷いは隙を生むからな。なるべく、理解も納得も出来る様に努力はしているさ……」

「まあ、その…………」愁傷様。いや、『頑張つて』…かな？「フツ、女性に理想像は抱かない様にしていたんだがな…………」

「こんだて 献立考察 / 世界考察」

「ンンン……ガチャ

「何の用だ？」

「今、何しているのかなあ～？ つて見に来たの」

「見ての通り読書だ。分かったのなら静かにするか部屋から出でてくれ。俺としては後者をお勧めする」

「む。私のこと、嫌い？」

ふん。その切り返しの仕方は既に経験済みだ。故に、対処可能だ。

「無断入室して嫌われないとでも？」

「……」めんなさい

さて、馬鹿姉は鎮圧した。これで心置きなく読書を

「ただいま～。霞凜かりん、帰つている？」

「あ、お母さんお帰りなさ～い！ ほり、理貴くんもお出迎えに行

こつよ～！」

「待て。腕を引っ張るな

「早く早く～」

決めた。これから自室に居る間は内鍵を掛けるとしようつ。主に馬鹿姉対策として。

「お帰り。母さん」

覚醒後初めて見た母親は、記憶の中と違つて少し疲れている様に見えた。目元に薄い隈が出来ており、皮膚も髪も艶を失っている様な気がした。

「え…………？ あつ…………」

「お母さんっ？！ お母さん…！」

急に意識を失つて倒れ込む母親を長女が支えるも、よろめいてその場に座り込んでしまつた。やはり、脱力した人を支えるには筋力が足りなかつたようだ。

「極度の疲労だな。静養すればすぐに治るだろ？」

疲労の原因は、おそらく俺への介護での疲労または心労だろ。そして起きている俺を見て、緊張の糸が切れたと言つたところか。氣絶した母親の顔をよくよく見れば、目元の隈は化粧で上手く誤魔化しており、実際はもつと濃いことが予想出来る。女性の忍耐強さには度々感心させられるが、限度を過ぎたりすることまでは感心出来ない。

「そつなの…………？」

「そうだ。ベッドに運ぶぞ」

「えつと…、どっちを持てば良い？」

「いや、先行してドアを開けるだけで良い。出来れば、俺の専属医師に連絡を入れてくれると助かる」

「うん、分かったーー！」

母親の靴を脱がしてから仰向けにし、脇の下から腕を入れ、胸の下で腕を組む。そしてそのまま持ち上げ、後ろ向きに引き摺つて運ぶ。本当なら背負つて運びたいのだが、完全に脱力した人間を背負うには、今の体躯たいくでは少々怪しまれかねないと判断した為、このようないい運び方を採用した。

そして運び終わつてから数分後、長女が俺の専属医師らしき人を引き連れ、部屋に入つて來た。医師は俺を見て驚いたようだつたが、すぐに母親の脈や心音を診察し始めた。それからカルテを書き上げ、ついでとばかりに俺も診察してから帰つて行つた。ちなみに、どちらも「要静養」の診断結果を貰つた。

「取り敢えず、これで一安心だね？」

「いや、重大な問題が一つ残つてゐる。…………夕食は誰が作るんだ？」

「あー…………うーんと…………」

今更だが覚醒前の記憶を振り返つてみると、長女の料理スキルは微妙であり、次女は料理出来るものの甘味系限定で、三女は本を読むこと以外に興味が無いらしい。父親は完璧超人だが、仕事が忙しいので家事を任せる訳にも行かない。

だからと言って家政婦を雇うのも、防犯上の点であまり好ましくない。

よつて、消去法で自分が残ると言つて、転生者という特性上、

家事に関しては常人の域を既に超越している。しかし、今まで昏睡状態だった自分がいきなりプロ顔負けの料理を作れば、確実に怪しまれることは間違いない。

おまけに、下半身不随と診断されたにも関わらず回復しているので、これ以上疑いの目を向けられたくないのが心情だ。

そこで、料理スキルが微妙な長女をつことで不審の目を誤魔化そうと思う。インスタントや出前は、最終手段として封印しておく。我が家が富裕層とはいえ、金が掛かり過ぎるのは余り好ましくない。

「仕方が無い。俺達で料理を作るとしちゃ」

「ええっ！？ 理貴くん料理出来るの！？」

「…………それ、自分で言つていて悲しくないのか？」

「ひひひひ…………どーせ、私は駄目姉ですよ～」

勝手に自爆した馬鹿姉は無視し、取り敢えず先程母親が買つて来た食材から、今日の夕食の献立を推測してみることにする。

玉ねぎ

ポークの缶詰

人参

ジャガイモ

カレールウ（中辛）

ブロッコリー

ビターチョコレート

ホイップクリーム

何だ、この作意を感じる食材選びは？

「理貴くん？　如何かしたの？」

カレーを作るべきかカレースープを作るべきか…。それにもし、カレーを作るにしても、ジターチョコレートとホイップクリームはどうするべきか？ 前者はカレーにコクを『』え、後者はカレーの辛味を抑えてまるやかさを『』える。

だがしかし、これらは何れもお菓子作りの材料としても使え、母親が次女のお菓子作り用の材料として買って来たとすれば、迂闊にカレーの材料には使えない。

……まあ、また買えば済むだらう。多分。

「いや、何でもない。さつさとカレーを作りうか」

まず最初に、玉ねぎの皮を剥いて適当に刻む。そして長女が大鍋で玉ねぎを炒めている間に人参、ジャガイモの皮を剥いて乱切りにする。ブロッコリーは房を切り落とし、ポークは拍子切りにして準備しておく。

やがて玉ねぎが飴色に変わった頃を見計らって、残りの野菜とポ

ークを順次投入。此処で、長女が音を上げ始める。

「理貴くん、材料が多過ぎて上手く混ぜられないよお~~~~~」

「ふん。料理に貢献出来るだけ、まだ有り難いと思え」

「ううう~~~~~」

長女は卵粥で見せた駄目っぷりを挽回しようと思ったのか、最初こそは頑張ろうとしていた。しかし、包丁の扱いにおいては圧倒的な経験と技量の差があり、なおかつ今回は時間が無いので辞退して貰つた。

そんな彼女に残された仕事と言えば、炒め役か味見役程度だった。炒め役を任せることにしたのだった。野菜は水分が抜けるまで時間が掛かる上にかさばるので、混ぜづらいのは仕方が無いことである。

「…………そろそろ頃合だな」

水と一緒に、調味棚にあつたコンソメを3袋くらい投入し、大鍋の中身を搔き混ぜる。ちなみに馬鹿姉は先程腕をつったらしく、床の上で悶絶している。力任せに搔き混ぜれば、そうなつて当然である。

「そしてルウを入れる」

カレールウが水に溶け、野菜と混じってとろみが出て来たところで、チョコとクリームで味を調整してから、コンロの火を消した。

「出来たの？」

「ああ、完成した」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……味見するか？」

「もちろんっ！」

小皿にカレーを少量入れ、スプーンを添えて長女に手渡す。長女は右手で皿を受け取ろうとしたが、びくつと震わせた後、左手を出して皿を受け取つた。……如何やら、つた利き手がまだ痛むらしい。

そして皿を机に置き、左手でスプーンの柄^えを握つてカレーをすくい、口の中へと運ぶ。

「あっ、これ美味しいっ！！？」

「有り合わせにしては…、だがな」

本当ならルウの元であるスパイスの調合からしたいのだが、それでは時間が掛かるし、何より自分好みのカレーしか作れない。今回のような場合、大衆向けのカレールウがとても役に立つ。

「それは謙遜のし過ぎだよ～」

「事実だ。……ところで、次女と二女は何時ぐらいで帰つて来る?」

「今日は7時ぐらい、かな?」

壁に掛かっている時計を見てみると、現在時刻は6時23分。今から急いで風呂に入れば帰宅までには間に合つだらうが、最悪脱衣所で鉢呑わせといつ展開になりかねないので、今は諦めることにする。

「読書でもするか…」

キッチンから浴室へ戻り、しつかりと内鍵を掛けてから椅子に腰掛ける。そして本を取り、袴を挟んでいた所から再び読み始める。

「しかし、本の世界は妙だ…」

金髪や茶髪はまだ良い。だが、青髪は如何か? それに緑髪は? 目が赤と青のオッドアイ(虹彩異色症)は如何だらうか?

この世界は明らかに、色素を無視していると言わざるを得ない。今の自分の容姿でさえ、黒髪に紫よりの青目なのだ。普通なら何らかの目の障害が出てもオカシク無いはずなのだが、不思議なことにまったく問題が無い。だからこそ、妙なのだ。

大抵、髪や目の色が特異な世界はファンタジー系統（容姿によつて種族差別を発生させ、対立させる為）なのだが、かといってこの世界に剣や魔法が常識的に存在する訳でもなく、亜人が存在こそすれ、戦争が起こっている訳でもない。むしろ亜人共々、仲良く暮らしている。

そう、『仲良く暮らしている。』 とすると、大変認めたくないがこの世界はつまり、あの系統に含まれている可能性が高く、大変遺憾ながらそれを念頭に動かなければならない。何故ならば、一步間違えば取り返しのつかない方へ行きかねないからだ。

おそれらぐこの世界は

「異種族交流型恋愛系統の世界、……」

正直、そうだとするとかなり面倒臭いことになる。何故なら、恋愛系統特有の以下のシチュエーションが、極めて高確率で起こり得るからだ。

曲がり角で女性とぶつかる。
空から女性が降つて来る。
外国から交換留学生が来る。
義理姉妹が恋愛感情を抱く。
生徒会長がやたらとパシリに使いたがる。
先生が合法口り。
電波系の女性が絡んで来る。
靴箱にラブレターが入っている。
目の前でスカートがめくれる。
突然、恋人の振りを要求される。

⋮ etc ⋮

「尤も、自分がその傍観者である可能性も否めないが、……」

じつらにせよ、身構えておけばそつ大事には至らないだろ？。.
……多分、おやじく。

「読破。……やはり、どの世界でも本は便利だな」

ちなみに本の題名は、『亜人の特徴及び注意事項』。内容は題名の通りで、亜人の特徴と対応する際の注意事項が書かれている。覚醒前の記憶にはそういう細かい知識が無かつたので、この際きちんと学ぶことにしたのだった。

知らずに下手な対応をするよりは、知つて下手に対応する方がよっぽど良い。

「さて、そろそろ時間か？」

時計を見ると、あと数分で7時になりそつだつた。馬鹿姉の言つ通りなら、もう少しで次女と三女が帰つて来るはずだ。

「面倒なことにならなければ良いが……」

先程出した考察結果を考慮しつつ、居間に向かつのであつた。

第2話（後書き）

「これ、何てエロゲ?」と言つて頂ければ幸いです。しかし、主人公は文中で述べている様に、もしそうだつたら面倒だと思つてします。それに、フラグやイベントばかりという展開も作者は若干苦手としておつまますので、それほど露骨には出て来ません。

どちらかと言つて、R15止まりのグロ描写の方が得意です。（キリッ）

追記：駄目姉の名前は『霞凜』かりんと判明。母親は出すか不明。次女と三女は次回に出す。

第3話（前書き）

当作品では、同じ語句のルビ振りが面倒臭くなつて、振られてい
ない場合があります。それと、たまにネタが混じります。
そこは寛容な心でスルーしてくれるとありがたいです。

ところで今更ですが、当作品には作者による独自解釈などが多数
含まれます。冒頭部分などが特にそうなのですが、あくまで“なぜ”独自
”解釈”です。それに対しても意見はしないで下さい。何故なら
ば、解釈に「正しい」や「間違い」は無いと思っていますので。

家族。それは特別な団体であり、団員の種族を問わない稀有な構成である。それが例え人と獸であろうが、天使と悪魔だろうが、人と物であろうが問題無い。互いに協力し、信頼し続ける限り、その構成を家族と呼ぶことが出来る。

「家族……………きやつ／＼／＼」

「……………少しさ桃色思考を自重しろ。この変態娘が」

「はえ？ やだなあ、私のはただの純愛ですよおー。じゅ・ん・あ・い」

「お前の主張は、狂愛すら正当化する様な気がして如何も認めたくない」

「絶対依存は純粋な支配欲から来る愛なのです。歪みなど、1つたりとしてありませんよお？」

「それ以前に、お前の判断基準が常人のそれとズレている時点で、その理論は成立しないと思うのだが如何に？」

「形骸的な家族未満／無関係な他人以上」

「ただいま」

「た、ただいま…」

「お帰り～」

「お帰り」

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

「何故、駄目姉まで黙る？」

「うううううううう…………優しさを下せこ」

駄目姉を無視して、再び手元のルービックキューブを弄る。何故か自室にあつたので何気なく持つて来てやっていたのだが、意外と時間が潰せた。この玩具の単純さが故に、無心になれたのだろう。

「…………お前、もう治つたの？」

「見ての通り、健康体そのものだ」

「そう。…………良かつたわね」

「ああ」

片手でルービックキューブの面を変えつつ、次女にそう答える。ちなみに今は色を揃えるのではなく、同じ模様パターンを全部違う色で揃えることに挑戦している。これが結構難しく、未来位置を予想しながらやらないと何時まで経つても完成しない。

「本当に、大丈夫なんですか……？」

次女の次に、戸惑いがちに話しつけて来たのは三女だった。まあ、

怪我人がいきなり回復すれば戸惑うのは当然の反応だな。長女も數時間前までは、そんな感じだつた。

「その心配は、母親にしてやるんだな」

「え..?」

「まさか、倒れたの?」

次女が、強い口調で訊ねて来る。口に口に出さないが、次女は「お前の所為だ」と言いたいげであつた。確かに母親は、俺の介護をしてああなつたのか、それとも心労でああなつたのかかもしれない。

しかし、敢えて言いたい。「俺が何をしたのか?」と。

仮に、俺の事故が疲労の間接的な原因であつたとしても、直接的原因では無い。母親が要らぬ責任を感じ、そうあるべきという常識に捕らわれた結果が、今回の倒れた原因ではないのだろうか?

無論、心配してくれた事には感謝する。だが、倒れた事とは別だ。

「要静養だそうだ。今はベッドに寝かせている
「そつ.....」

そのまま次女は静かに部屋を出て行つた。二女も、慌ててその後

に続く。後に残つたのは、俺と空氣な長女だけであった。

「ねえ……、何か失礼なことを考えなかつた?」

「……さて、カレーを食べるとしよう?」

「絶対考えていたよね?」

「ところで、空氣姉も食べるか?」

「無視された上に、さり気無く名前が増えていくつ?!!」

からかいはそこそこに、予め炊飯器で炊いていた御飯を皿に盛り、良い感じに冷めたカレーを上からかける。人によつては皿の中央から左に御飯、右にカレーといった感じに盛る人も居るらしいが、自分はそこまで拘る方ではない。

それに対して、空氣姉もとい駄目姉はと云つと

「ふんふんふ、ふん」

「何も言つまい……」

「理貴くん、今何か言つた?」

「…………」

「ううう……、如何してそんな可哀相な子を見る様な目付きなの?」

「事実だからだ。とうとう幻聴が聞こえるまで駄目になるとは……」

「わ、私つ、駄目姉じゃないもんつ!!」

「人、それを自爆と言つ」

「あ……」

円形に御飯を盛つて、その中央にカレーを入れるという奇抜な入れ方をしている。普通は逆の様な気もするが、御飯とカレーをぐちやぐちやに混ぜて食べる人よりは、よっぽどマシなのかもしない。

それからしばらくして、カレーの匂いに釣られたのか次女と三女
が戻つて来た。次女は険悪な表情で、三女は困惑した表情を浮かべ
ながら、そして次女は開口一番、こう言った。

「お母さんが倒れたのに、如何してそんなに平然としているのが
気に食わないらしい。」

「どうやら次女は、倒れた母親をそっちのけで食事をしているのが
倒れたからこそ、平然としているんだ」
「私もほほ同じ理由…かな？」

次女は、さも美味しそうにカレーを咀嚼する長女に非難の視線を
送つた後、更に語気を荒上げて俺に問い合わせる。

「だから、如何してっ！？」
「それでは、お前は母親に何をしてやれる？ 医者の代わりが出来
るのか？ 看護士の代わりが出来るのか？ それを今すぐ言ってみ
ろ」

感情で動いて最善手が打てるほど、現実は易しくない。医療の知
識も、看護の心得も知らない一般人がしてやれる事など、付き添う
か祈るだけしかない。

「それは…………」

「何も言えない。つまりは何も出来ないと呟つ事だ」「でも……、傍に居る」とぐりいは出来ます！」

押された次女に代わって、三女が強く前に出て来る。性格的に三女は最後まで黙っているかと思っていたが、意外に肝はしつかりしているようだ。

「それも一理ある。だが、結局はそれだけという事だ。それに母親が倒れた今、俺は“日常を維持する義務”が母親から俺達に委譲されたと思っている。だからこそ、俺は“母親の欠けた日常”を維持している。カレーを作ったのも、その義務の一環だ」

2人が沈黙したのを見計らって、長女に「お前も何か話せ」と曰配せする。長女はその意図を正しく理解したらしく、口を開いた。

「私は、理貴くんの様に深くは考えていないけど、私達はお母さんの有り難さを考え直すべきだと思うな。今日ね、理貴くんとカレーを作ったんだけど、すっごく大変だったの。でもそれだと、何時もカレーを1人で作っていたお母さんは如何だったのかな？」

「…………」

「だからね、私達はそんなお母さんを少しでも支えられる様に、しつかりしなくちゃいけないとと思うの。食事を摂ることも、睡眠を取

る」とも含めてね。じゃないと、今度は私達まで倒れる番になっちゃうから……」

妙にしんみりして来た頃を見計らつて、話を打ち切る為に話題転換を試みることにした。これ以上長々と話したところで、解決案など出るはずが無いのだから。もし有るとすれば、精々が対応案くらいのモノだろう。

「……………と訳で、お前らもカレーを食べたら如何だ？ 我ながら普通に美味しいと思うのだが？」

「……………それには、隠し味にビターチョココーネートとホイップクリームも入つていいんだよ？ 変に思つかもしないけど、これがまた美味しいのっ！」

美味しさを音で伝えたいのか、衝動的に机をパンパンと叩き出す駄目姉を物理的に黙らせる（主に暴力的な意味合いで）間、次女が長女の発言に絶句し、三女がやや引いていた。

「え……………？」

「それって、カレーとしては如何かと…………」

次女と三女の反応を見る限り、やはりビターチョコとホイップはお菓子の材料だったようだ。確か、あと半分ずつくらいは残つてたはずだが、それでもお菓子作りには足りないかと思われる。

「これだから無知は困る。前者は「クを」とえ、後者は辛味を抑えてまろやかさをとえる。そもそも、チョコレートの原材料であるカカオは香辛料の一つだぞ？」

「無知…………」

何故かえらくへこまれた。後で長女に確認して知った事だが、三女はかなりの読書家であるが故に、雑学にはある程度の自信があつたらしい。二つにとつては、至極如何でも良いことだが。

そして次女は、言わずもがな。

「私のケーキ…………」

「悪かつたとは思つてゐる。……だが、後悔はしていない」

「カレーに失礼だからな」と思いつつ、次女と三女の前にカレーを入れた皿を置き、席に着いて食事を再開する。

「…………美味しくなかつたら、許さないわよ？」

「不味くはない。それだけは確實に言える」

元々、日本のカレーは美味しく出来る様に作られている。水の分量を間違えたり、食材が傷んでいたり、カレーを煮る際に焦がした

りしない限り、絶対に不味くはならないのだ。ただし、食べる人の口に合うか如何かまでは保証出来ないが…。

「感想は？」

「不味くは無いわ……………」これで満足？」

「ああ、ますますだ」

如何やら満足して頂けたようだ。三女は特に何も言わなかつたが、しつかり食べていたので不満は無いと思われる。それから食後に交替で風呂に入つた後、俺は自室で1人、くつろいでいた。勿論、内鍵は掛けている。

「今日は、色々あり過ぎた……」

当然のことながら、転生後は大抵慌しい。環境を把握し、情報を収集し、環境を作り変え、情報を纏める必要がある。ここ数ヶ月間は、同じ様な作業の繰り返しとなるだろうが、初日からこれでは、如何しても先が思いやられてしまつ。

そもそも、今回は出だしが悪かつた様に思える。転生前のこの身体は2ヶ月前から昏睡状態であり、かつ下半身不随だつた。それにこの身体の父親が外交官という職業柄、年中不在気味で、今の母親と姉妹は、再婚してからほんの1ヶ月を過ぎた仲にしか過ぎない。

つまり何が言いたいのかと言つと、転生者と言えども此処は多少居心地が悪いのだ。お互いの関係も未だ手探り状態で、特に次女とい

三女との関係は有つて無きに等しい。それに男が1人だけという状況が、更に肩身を狭くしている。

よつて、此処を拠点として行動するには、どつとも気が進まないのである。

「だがそれも、しづらへんとじよつ」

昔の人も、『住めば都』と言う言葉を残していくへりいだ。今回もまた、その言葉に倣つてみよつかと思う。

「さて、方針は決まった。……わざと寝るか

無駄な時間は寝て過ごす。それが、繰り返される転生の中で身に付けた、彼なりの時間潰しであった。

第3話（後書き）

今日の迷言「シリアルスは続かない。それが俺ジナルクオリティー」

俺+オリジナルクオリティー=俺ジナルクオリティー
オレ

まずは謝罪を。すみません。次女と三女の名前出て来ませんでし
た。何時かは出します。……多分。

次回は間章となります。長女こと霞凜が主人公です。

【聞章】 第1話（前書き）

何時もより、短ツ！！？ すみません。主人公以外の視点を
しかも長女視点から書くのは、意外とレベルが高過ぎました。作
者の的にはさばさばとしたキャラの方が書き易いので、どうも長女と
は波長（？）が合いません…。が、そこは『愛』で克服していきた
いと思います。

長女的には、作文用紙8枚弱です。

【聞章】 第1話

事故に遭つまでの理貴くんは何処か自信なさげで、会話も一言や二言で終わる事がほとんどでした。でも最近の理貴くんは、急に大人びた表情や発言をする様になつてかつてかっこ良いのですが、何故か私に対しては意地悪です。なので、姉の尊厳を取り戻す為、今田もお母さんと料理を作つて理貴くんに試食して貰つています。

「そのサラダ、私が作つたんだよ～？」如何、かな……？
「包丁をよく研ぐ様に。トマトが切り潰されて見栄えが悪い」
「うなあ～……」

「それと、茹で卵の輪切り。黄身の外側が黒くなつてているだろ？
これは茹で過ぎの証拠だ。コンロの火力を落とすか、茹で時間を短くしてみると良い」

「にこや～……」
「……猫かお前は？」

間章第1話：「私の空白期間 / 私が頑張る3つのこと」

「はあー……。何時になつたら、理貴くんに認めてもらひえるのかな～～？」

最近、理貴くんと話せて嬉しいのですが、それに反比例するかの如くブルーな気持ちです。何故ならば

名前で呼んでくれないからです。

「はあ……」

主に、「駄目姉」とか「馬鹿姉」とか…。無論、妹達に対しても例外ではありませんが、「次女」や「三女」と呼ばれるだけまだマシの様な気がします。

「むう、如何したら名前で呼んでくれるのかな…？」

「駄目姉」や「馬鹿姉」ではない所を認めて貰えれば、少なくとも「長女」とは呼んでくれるはず…。現に、理貴くんは私達の前ではお母さんの事を「母親」と言いますが、お母さんの前では「母さん」と言つていました。

それはつまり、お母さんをある程度は認めていると言つこと。…でも、何を如何やつたら理貴くんは認めてくれるんだろう…。

「うーん……。身体を動かしてから考えよつ……うん」

もう2ヶ月前になりますが、私は女子バスケ部の部長を務める程の運動好きでした。でも理貴くんが事故に遭つてからは、理貴くんに何かしてあげられればと思い、休部届けを顧問の先生に出して以来、それっきり部活をしていませんでした。

「たん、たん、たん、た、たん、たん……」

久々に自宅の屋上でやるドリブルの練習は、以前よつぎこちなくなつてている様な気がしました。授業の体育でバスケをする時間があつたとはいえ、やはり部活の練習時間と比べると圧倒的に短いです。それに長時間身体を動かす部活とは違い、短時間で試合を回す授業では、如何しても体力や筋力が落ちてしまいます。現に、身体が想像通りに付いて来ず、時間が経てば経つほど小さなミスが増えていきました。そして

「たたん、た、たん……あつ」

とうとう、地面から跳ね返つて来たボールが手を擦り抜けてしましました。それも、開きっぱなしの屋上出入口ドアの方へと……。

「ああああああつーーー?」

叫び声も虚むなしく、ボールはドアの奥へと吸い込まれる様に消えて行きました。それからしばらく、ボールが階段を跳ね落ちる音が聞こえ、やがて静かになりました。

「うあ～……誰かに当たつていないと良いけど……」

万年外出気味なお父さんと私以外の家族は、休日でも比較的家中で過ごしており、理貴くんも図書館を利用する時以外は、家の中に居る様になりました。それはつまり、ボールに当たる確率が高くなるという事に

「エエエエエ如何しようつへーーー！」

「…まずは、回収しに行くべきだつたな馬鹿姉」

「あつ、理貴くん」

階下から、理貴くんが不機嫌そうにボールを持って上がつて來た。

「で、ボールの落下実験でもしていたのか？」

「えーとー……」「めんなさい。あれは事故です」

「事件に成り掛けたがな……」

「あはははは……」本当にめんなさい

理貴くんは皮肉を言いながらもボールを器用に足で操り、膝や爪先で交互に軽く蹴り上げ、時折頭に乗せたりしていた。素人目から見ても上手いとは思うのだけれど、それをバスケットボールでやられると何だか複雑な気分です。

「それで、何をしていた?」

「ドリブルの練習。最近、ずっとやつて無かつたから……」

「なるほど。俺が原因か……」

そう言つと、理貴くんはボールを地面に落とし、跳ね返つて来た反動を手で受け流しながら素早くドリブルをし始めた。これは玄人目から見ても、なかなか上手いと思つ。

「俺からボールを奪つてみる」

「良いの? 私、女バスの部長さんだつたんだよ?」

「ただの気紛れだ。気にするな」

これつてもしかして、理貴くんなりに気遣つてくれたの……かな?
? だったら、断るのも失礼だよね?

「うん。 それじゃ、行くよ?」

「来い」

理貴くんのドリブルが急に深くなり、半歩後ろに引いたことによ

つてボールが最も遠い位置で保持される。確かにこれでは盗り辛い。
でも、盗れないボールではない。

すぐさま踏み込んで、理貴くんに覆い被さる様にボールを奪いに行く。左右に搖さぶりを掛けてみるけど、理貴くんは背中を向けたり、ドリブルに緩急を付けながらスイッチ（ドリブルする手を替えること）をすることで、上手くかわしている。

そればかりか、今度は自分から踏み込んで防衛を抜けようとしていた。右に左に振りの広いドリブルでこちらを惑わすと共に、前傾姿勢でこちらと意図的に距離を作っていた。

「（思つていたより、結構上手い！？）

そのことに驚きつつも、左手から右手にボールが移る瞬間に手を差し込み、ボールを奪おうと試みるも、それを読んでいたのか左手でボールを弾いて自分の股下を通し、後ろに回していた右手でボールを受け取つて、私の左側をドリブルでやや強引に突破していった。

「速いつ！…？」

思わず自分が抜かれたことよりも、理貴くんの凄まじい瞬発力に驚いてしまつた。もしかしたら、陸上の短距離走選手と良い勝負をするかもしれない。

「……なるほど。駄目姉にも取り得はあつたという事が」

「凄いよ理貴くん！ まるで『リィーア・イリーネフ』選手みたいだつたよ！」

私が敬愛する『リィーア・イリーネフ』選手は、獣人ながらも卓^{たく}えつした技量で攻める選手として知られており、獣人特有の体力と俊^{しゆ}敏^{くんびん}さも兼ね備えている世界最高の女子バスケットボール選手である。

「誰だそれは？ …… といひで、まだ続けるか？」

「もちろん！」

それから日が暮れて暗くなるまでやつたけれども、理貴くんからボールを奪えたのはたつたの2回で、理貴くんは私から何十回もボールを奪つていました。理貴くん曰く、「流れが読み易い」との事。そして「清流と濁流^{だくりゅう}を併せ持つ奔流^{ほんりゅう}こそ、最も読み辛い」とも言いました。多分、「正攻法に奇策を混ぜろ」という意味で間違つていな……と思ひ。

「ねえ、理貴くん」

「何だ？」

「今日はありがとつ。私、頑張るからーー！」

バスケも料理も。勿論、名前で呼んで貰^うつ」とも。

「？ まあ、精々頑張れ」

そして、翌日。

「理貴くん。そのサラダ」

「ジャガイモの漬し過ぎだ。もつ少し形が残つていれば食感が出るだろう。それと、水氣が多くて口内がべと付く。これは蒸^ふかし過ぎが原因だな」

「あう……」

「……狐かお前は？」

「うはは、料理の道は限り無く険しいみたいですね。…………といひで、狐の鳴き声は「コン」「じゃなかつたつけ？」

【闇章】 第1話（後書き）

此処で補足をば。主人公は別に美食家という訳ではありません。ただ、作るのなら最良を目指すという思考の下で、長女に厳しくしているだけです。：まあ、ある意味『愛』です。

ちなみに作者は、バスケは苦手です。身長差は勿論、そこまで技量はありませんでしたし。バスケに関しての知識は、wikiから。当作品を構成する柱の一つとしても、過言ではありませんw
w w

【断章】 第1章 第1話（前書き）

「そろそろストックが……！」

今回は長めです。作文用紙11枚以上。それと、投稿が遅くなつて済みません。既に書き上げていたのですが、気に入らなかつたので一部書き直していました。

ところで、これつてR18なんですかね？ 作者としては余裕でセーフだと思うのですが…。アウトだと思うのなら感想下さい。R18タグ付けますので。

オーバー。

私の声が聞こえますか？ 聞こえるならば、返事をしないで下さい。
…………告白します。私は今、とても苦しく辛く、悲しいのです。
騎士や兵士達が皆、私の為に強大な王国に立ち向かう事が。そして、
この戦争が、到底勝ち得る戦争では無い事が。そして、こんな状況
で「頑張って下さい」と他人事の様な声しか掛けられない私の無力
さが。…………如何して？…………一体、何処からこうなつてしま
つたんでしょうか？

「……それで、お前は如何したいんだ？」

「えつ……？」

「ただ身の上の不幸を嘆きたいのか？ それとも、神とやらに救
いを求めたいのか？」

「…………だつたら、…………だつたら私は、一体如何すれば良いんです
か？！？」

「ふん、子供らしく寝ている。……『状況を開始せよ』」

（）
「無情の緋桜 / 匿名参謀」

小高い丘の上で、1人の少女が帝国と王国の両軍を一望出来る丘
に立っていた。春の微風に美しい桜色の長髪をたなびかせ、無機質
の様な冷たい瞳で両軍を静かに観察していた。やがて、少女が虚空

に首肯をし、小さく口を動かす。

「状況開始。砲撃部隊、撃ち方用意」

右手を軽く上に上げ

「撃ち方始め」

合図と同時に、腕を振り下ろした。たったそれだけで、少女を中心に戦闘音が連續して響き渡り、その作用で発生した烈風によつて、丘に咲く花々は次々と散つていった。

そんな、少女の周囲から撃ち出された視認速度を遥かに超えた“何か”的第一射は、然程間を置かずに王国軍へと着弾し、兵士達を片つ端から血と肉の雨へと変えていく。

胴体が“何か”で吹き飛び、骨肉が“何か”で生じた烈風で切り刻まれ、血で地が赤く染まる最中、ようやく事態を飲み込めた王国軍が撤退をし始めた。しかし既に全軍の7割方が死傷し、隊列もままならない今となつては、最早撤退ではなく壊走と言つべきだろう。

「砲撃部隊、三重火線を形成。機動部隊、追撃開始」

しかし、その壊走は三重に敷かれた火線によつて阻まれ、無理に進めば先の様に“何か”で肉片へと成り果て、迂回しようとするべ

小さい“何か”が大量に撃ち込まれて絶命したり、重い“何か”に弾き飛ばされて殺される。

王国軍はそうやって翻弄されている内に続々と死傷者を増やしていく、やがて1人として立っている者は居なくなつた。

「白兵部隊、死亡確認」

そして無慈悲にも、辛うじて生き残つていた重傷者が“何か”で心臓と頭を貫かれ、全滅した。それは戦争というには余りにも短過ぎて、余りにも一方的過ぎる暴力。だが少女はそれで終わるどころか、地平線に霞んで見える王都を見据え、またしても小さく呟いた。

「【悲槍】、投下」

ただその一言だけで、地平線に霞んで見た王都が突如搔き消え、しばらくして凄まじい強風と重低音が少女を“避けて”通り過ぎる。しかし少女はその現象を気にも留めず、その後も【悲槍】を次々と投下していく。時計が針を刻むかの如く、淡々と。

「【悲槍】、投下」

そして、万単位の人々を都市ごと消滅させている事実を自覚しながらも、平然と。

某年某月某日、王国を含む主要国が相次いで地図上から姿を消した。その数、実に8カ国。丁度、【悲槍】を投下した数と同じであった。これにより経済基盤が崩壊し、各国は未曾有の大混乱に陥る事となる。

幸いにも帝国は資源に恵まれており、先代皇帝の時代より第一次産業を中心とした富国掌握政策（国を富ませ、多くの人心を間接的に掌握する政策）と、交流阻害政策（関税を高くしたり、国内滞在者に対する制限を厳しくしたりして、自然と自国を鎖国状態へ誘導して行く。諜報対策が目的）を続けて来た為、国益の損失は比較的軽微で済んだ。

しかし貿易国や工業国はそうはいかず、とりわけ主要国からの多額の寄付金“だけ”で国営していた宗教国『セイント・クロス』は、『神の国』とも言われる程の豪華な生活から一変し、世界終末日が来たかの様な絶望感が国中に渦巻いていた。

そんな『セイント・クロス』はともかく、他国は懸命に公共事業政策や零金利政策などの政策を打ち出し、状況の打開を試みたがなかなか経済は回復せず、日を追うごとに犯罪行為が激増し、治安は悪化の一途を辿った。

こうして人心が荒んでいく最中、宗教国である『セイント・クロス』が、狂信者達による“最狂”の軍『聖十字軍』セイント・クロスを用いて侵略戦

争を開始。それに煽られるかの様に各国も次々と侵略戦争を開始し、歴史上類を見ない世界戦争へと発展していったのであつた。

一方、その頃の帝国はと言つと、消滅した王国を除けば各国から離れているという地理的因素や、鎖国状態にあつて他国に情報が流れなかつたこともあり、それほど戦火の影響を受けずにいた。あるとすれば、この辺境まで流れて來た盜賊の討伐や、『聖十字軍』の迎撃くらいであつた。

どちらも遠路遙々來ている為、栄養不足や食料不足でほとんどが飢えて死兵と化していたが、王国無き今の帝国軍にとつて、その程度の事など脅威にすら成り得なかつた。

やがて、各国が侵略戦争と防衛戦争に疲弊していく中、兵数と士気だけは無駄に多く高い『聖十字軍』が次第に勢力を増していき、これを脅威と見た各国は一時休戦協定を結び、連合軍を設立した。ちなみに帝国は、地理的に遠いという理由で参加を辞退。傍観することを決め込んだ。

そして連合軍設立から4ヶ月目に、ディザスタ大平原にて連合軍と『聖十字軍』が集結し、過去最大の戦いの火蓋が切つて落とされた。両軍が激突し、拮抗する最中、帝国では少女と青年が印を付けた数枚の地図を見ながら、紅茶で喉を潤していた。

その地図をよくよく見ると、等高線が描かれた地図や水脈地図、果てには採掘資源分布図まで揃つっていた。

「連合軍38万と、『聖十字軍』43万。合計して81万人……多いな」

かつて大国だった王国でも、推定人口500万人。その内、80万人が軍関係者だとされ、実際に前線で戦うのは30万人程だったそうだ。 とすれば連合はともかく、『セイント・クロス』だけ43万人とは些^{こすれ}か狂氣染みてていると言つてもいい。

「【悲槍】で包囲殲滅したいところだが、地下水脈に影響を与えるかねないか…」

【悲槍】とは、見えない“何か”である事には変わりないが、対象へ当てるだけの【砲撃】とは違い、その攻撃方法はかなり複雑だ。まず、計算尽くで広域に“何か”を立体的に降らせ、爆縮（内側へ均等に爆発させる事）で押し込まれる空気の圧力によつて対象を圧壊させる方法を探つてゐる。

元々爆縮は、爆発の圧力を外部ではなく、内部へ解放することでき、内部圧力を上昇させ、通常では得難い物理現象を発生させる為に使われる技術だが、その爆発で得られる莫大な運動量を大型目標の破壊に応用しているという訳だ。

その破壊力は凄まじく、爆心地の物体はほとんどが圧縮熱で蒸発し、その蒸発した分の体積が周囲の空気を押しやり、100km先からでも風速20m毎秒を観測出来るほどである。

無論、その破壊力は地上だけでなく地中にも影響があり、地盤が沈下して水の流れが変わったり、地中に眠っている化石燃料が発火

ないし流出したり、溶岩流が地上へと噴出してしまつ恐れがある為、
そつそつ安易には使えない。

今回の場合、ディザスタ大平原の僅か地下60m付近に広大な水脈が流れている為、使用を取り止めざるを得ない。そもそも、【悲槍】は対人にも使える対物攻撃手段であり、対人攻撃手段は【砲撃】以外にも多数ある。

例えば、【射撃】。これは人間を殺せる必要最低限の威力を有しており、貫通力は軽装甲を撃ち抜く程度しかなく、周囲への被害も最小限で済むのが特徴だ。他にも【投擲】や【警】など、實に様々だ。

「では、【轟雨】の使用を推奨します」

【轟雨】は、【砲撃】の爆発規模を小さくした代わりに弾幕密度を上げたもので、対象の直上に降りして近接発動させることで、上半身に致命的な損傷を負わせることが出来、地面や地中への被害はほぼ皆無という広域対人攻撃手段である。

しかしその有能性の反面、戦場に下半身だけがごろりひと転がる惨状が出来てしまうので、可能ならば火計と併用して使いたいところである。

「そつだな。そつするとしょつ」

「……最新観測情報を元に有効攻撃地点及び範囲を修正。攻撃準備、

完了しました』

「ついでに、並行して『セイント・クロス』への爆撃も行え。跡形も残すな」

『了解。遠隔攻撃、開始します』

こうして、81万人もの死者を出し、一つの国が滅ぶことで、戦争は終わらざるを得なかつた。被害が大き過ぎる事は勿論、連合の最終攻略目標『セイント・クロス』の首都が物理的に消滅した上に、周辺の農村や街まで消滅しているという不可解な出来事があつた為、攻略する必要性が無くなつたからである。

連合に参加した各国の国力が著しく衰退している最中、帝国は勝手に王国の領土を取り込んで国有地とし、【悲槍】の爆風で荒れてしまつた農地を耕す一方、王家の聖域である『賢王の森』を木材資源確保用と位置付け、国有林化してしまつた。

その際、元王国領の端にあつた屋敷にて『舞闘姫』の異名で知られる第三王女『イストディア・バルト・アイゼ・リオ・ブランディシュ』と、第四王女『アイゼリア・リオ・ブランディシュ』が、数人の使用者と共に保護された。

第三王女の話によると、帝国を攻める際に従軍するつもりだったが暇を出され、妹である第四王女を誘つて屋敷を訪れている間に、王国が物理的に滅んだとのこと。

幸いにも屋敷には果樹園や養鶏施設があり、また屋敷の周囲には野草や野生生物の宝庫でもあつた為、食べる分には困らなかつたらしい。あるとすれば、主食であるパンを作る小麦粉が底を尽いたことぐらいであった。

なお、彼女達の処遇については宮中軟禁及び帶剣の禁止、そして戦略参謀『アノーム』と参謀補佐『オウカ』の両名による観察処分を受けることで決定した。この事について帝国皇女『クーゼアリスティア・イコネ・アフィリ・クラスタッフ』は、

「納得出来ません！！ アノームは“私”的参謀（思い人）ですっ！！！」

と顔を赤らめながらも激しく主張していたが、重臣達は「（何時もの惚氣話か…）」と主張を軽く受け流し、アノーム自身による「短期観察だ。それぐらい我慢しろ（偶には振り回されない日があつても良いと思うんだが？）」といつ説得を支持しながらも、「（ああ、今日も擦れ違っているな…）」と思つのであった。

しかし、平穏に一日は過ぎて「行く。賑やかに。そして、様々な思惑を秘めながら

次の段階へと。

【断章】 第1章 第1話（後書き）

自分なりのチートを練習がてら書いてみましたが、お楽しみ頂けたでしょうか？ それと前書きでも述べましたが、そろそろストックが切れそうです。次回からは本編に戻りますが、ある程度ストックを溜めてから投稿したいので、次の投稿は8月の第4週辺りを予定しております。

オーバー。

第4話（前書き）

予定通り、投稿。時間帯は無視してくれると有り難いです。この話から、ようやく物語が本格始動します。……多分。

ちなみに、現在は第5話まで書き終わっていますが、書きかけの第6話と前編・後編と繋がっていますので、上げる時は第6話と同時投稿となります。しかしその前に『短章』を上げたいと思っていますので、今しばらくお待ち下さいませ。それでは、本編をどうぞ。

中学校という閉鎖空間は、時として危険な火薬庫と成り得る。闘争心をやたらと煽る様な順位付け、制服による衣服統一、厳格な校則による自由の拘束、そして二次成長に伴う精神の不安定化。小学校ではほとんど無かつた要素がこれだけ揃えば、何かしら問題の1つや2つ、起きたとしても不思議では無いだろうか？

「君も、そう思わないかね？」

「個々人の適応力と性格次第だな。話はそれからだ」

「ほう。敢えて不確定要素を置いて発言を回避するとは…。なるほど、実に賢い方法だ」

「いや、ただ答えるのが面倒なだけだ。」（うつた議論は延々（えんえん）と続く傾向にあるからな）

「くつくつくつ、確かに」

「藤魅家の朝の一幕 / 再会と再開」

「起きろ駄目姉」
「ふうん……」
「起きる」

「ひやうん…………」

「…………」

強制執行（布団剥がし）開始。ついでにカーテンも開けて、外から朝日を取り入れる。如何やら駄目姉は寝相ではなく、寝起きが駄目らしい。尤も前者だらうが両方だらうが、どちらにせよ駄目であることは変わりない。

「ううううう…………あえ？…………何で、理貴くんが此処に？」

「！」

それは時計を見てから言つて欲しい。

「あれつ、もう７時になつてる？！　い、急がないと遅刻しちやうよおおおおお！……！」

どつたんぱつたんと、パジャマを脱ぎ捨て、衣装棚から下着を取り出したり制服を着込む様を音から想像しつつ、階下へと降りて行つた。…………駄目姉の着替え？　覗く興味も趣味も無い。

「起にして来た」

「あら、早いわねえ。これからは理貴に起にして貰おうかしりつ。」

料理を机に並べながらにこにこと笑っているのは、完全復活した母親である。あれから2日程静養していたが、それ以降は家事が出来る程に回復していたので家事権を返還し、空いた時間を情報収集に当たられる様になった。

やはり、家事を代行してくれる人物が居ると、何かと便利である。

「仮に家族とはいえ、起こす度に無断入室るのは如何だか？」

「あら、やっぱり気になる？」

「お前つ……！」

「……」

「にやにやと意味あり氣に微笑する母親に、敵意を剥き出しにする次女、そして疑惑の視線を向けて来る三女だが、その邪推をきつちりと否定させてもうつ。

何故なら、曖昧に答えてしまつと邪推に憶測を重ね、余計な発展をしかねないからだ。以前、妹馬鹿の兄や娘馬鹿の父親、そして弟馬鹿の姉を相手にした経験が、現状に警告を放つているのだから間違ひ無い。

「世間一般常識的に考えたが故の配慮だ。他意は無い」

「そうなの」

「……本当にしちゃうね？」

「……」

母親と三女はそれで納得したようだったが、姉馬鹿の次女が尚も食い下がる。どうせ、こちらが誠実さを訴えたところで結果は既に

なお

見えていた。なので敢えて眞面目に返答せず、こちらの不快感を全
面的に押し出す事で会話を打ち切る方法を採択する。

「お前の発言は非常に不愉快で心外だ。これ以上不毛な会話を続けるよりなら席を外す」

「…………疑つて悪かったわよ」

……なるほど。感情を理性で押さえ付けたか。次女が何と葛藤して
いたのかは知らないが、彼女の前での言動や行動は、慎重に選択し
た方が良いのかも知れないな……。

「何、こちらも言い過ぎた。すまない」

後腐れが無い様に、取り敢えずこちらも謝つておく。一応、覚醒
前の自分が残してくれた家族である。大事にする義務くらいはある
だろう。

「おはよう……」

やつと来たか、空氣姉。出来ればもう少し早く来て欲しかった。

「遅い」

「ううう……。これでも急いだ方なんだよ?」

「なら、次からは急いで起きるべきだよな？」
「うぐつ……い、いただきまーす」

……朝食に逃げたか。

「2人共、仲が良いわね～」

そしてまたしても、母親が生温かい視線を送つて來たので、少々予定を早めて家を出ることにした。正直面倒な話なのだが、今日からまた中学校へ登校する事にしたのだ。

何故なら、覚醒前の自分が中学3年生の段階であった事は勿論、早くこの世界に慣れるには、人が集まる場所に居た方が何かと楽だからである。特に、亜人などの異種族が存在する様な世界では尚更だ。

それにも、転生を始めて幾星霜。^{いくせいそう}未だに勉学をしているとは不思議な感じもある。『生涯学習』という言葉も、あながち嘘では無いという事なのだろう。

「お、おいつーー！」
「？」

学校まであと少しあつた所で、後ろから声がしたので何気なく振り返つて見てみると、そこには覚醒前の自分の親友であった『立風康』と、幼馴染であつた『遥音姫乃』が呆然とした感じで立ちつくしていた。

前者と言い、後者と言い、何かしらのフラグが立つてゐる様な気がしてならない。

「お前、もう大丈夫なのか……？」

「『幽人』…………じゃないよね？」

姫乃が言つ『幽人』とは、知性生物の思念が半物質化したモノであるらしく、思念が強ければ強いほど現実に近くなり、物にも干渉出来る様になるのだとか。物質透過は勿論、念力で物体の非接触操作も出来るそうだ。

なお、これはこの世界の書物から得た情報である。現物を見た事は無いが、書かれているからには現実に存在しているのだろう。一度、現物を見てみたいものだ。

「無論、全治していいる上に物質透過も出来ない。まさしく本人だ」

少なくとも“外見に関しては”本人であるから、あながち嘘ではない。

「……そ、そりやなつ！ 大丈夫だから登校していりんだよな？」

「…も、もつつ、水臭いな。連絡してくれれば迎えにも行ったのになあ……はあ」

姫乃がわざと聞こえる様に言ったコレモ、フリグ、…なのだろうか？ 取り敢えず、回避するに越したことは無いか。

「少し急いでも良いか？ 一応、職員室に顔を出してもおきたいんだが…」

「おっ、それもそうだな。 つて、如何した姫のん？」

「康くん、理貴くんが私を放置プレイするよおー…」

「おー、よしよし。アイツは天性の鬼畜じだからな。俺が慰めてやるう」

「ありがとう、康くん。その気持ちだけで結構だよつ！」「

「十分じゃなくて結構なのかよつ？！ お前も随分と鬼畜じやねー

が、オイ…！」

「（漫才なら離れてやつてくれ。まつたく、騒々しい…）」

いつして転生後の初登校は、随分と喧しい登校となつたのであつた。

（）

「（そして案の定、か……）」

元々、覚醒前の自分の交友範囲が広かつた所為か、教室に入るなり男女問わず大勢に囲まれた。大抵は「大丈夫だったのか!?」とか「良かつたね」などの祝言だったが、残りは「休んだ間のノート、見せてやるよ」とか「テストが近いけど、大丈夫なの?」と勉学を案じるものであった。

正直言つて、技術の課目以外は如何とでもなる。数学と科学は公式を押さえれば理解出来るし、体育は身体能力が高ければ大抵の問題は解決する。音楽は、全世界共通であることを体感しているので心配は無い。社会に関しては、全て暗記すればそれで済む。国語などの言語学もまた、暗記で対処出来る。

「（それにしても、学友が多いのもなかなか面倒だな。……減らすべきか?）」

多ければ、個人行動を制限される。少なければ、収集出来る情報が制限される。とは言え、学生から得られる情報などたかが知れている。そこまで拘る必要も無いか……?

「（まあ、これは保留にしておくとしよう。ナヒメで焦る用件でも無いしな……）」

むしろ焦るべき用件は、この世界で脅威となる相手が居るか如何かの把握である。これまでの世界には、神や天使、魔王や創造主といった脅威が実在した場合があった。何れも味方にしたり、滅ぼしたりとやって来たが、これから先もそう上手く行くと思える程、楽

観的な思考はしていない。

一度だけだが、他の転生者が神々との戦闘の末、勝利を目前にして氣を抜いた瞬間に、『転生阻止』、『絶対絶命』、『永久封印』からなる【究極神技】アルティメット・アーツに魂を貫かれるまでの一部始終を見て以来、樂観的な思考は捨て去る事にしたのである。

「（まずは、校内における仮想敵の情報収集。それから校外へと範囲を広げるべきか…）」

校内は生徒指導室の指導記録を、校外は警察の犯罪者一 名簿 リストを見れば良い訳だが、前者はともかく後者は難しい。方法としては、電子化された犯罪者名簿を外部から警視庁の電子書庫に不正侵入するか、警察署内部に侵入して正規の方法で閲覧するかの2択である。

しかしそれらは、何れも危険度が高過ぎる方法だ。……やはり、情報屋から情報を仕入れる方が、安全かつ確実な方法だろう。

「（到底居るとは思えないが……、仮にも恋愛系統の世界だ。駄目元で探してみるとしよう…）」

大抵、どんな系統の世界であろうと『“ありえない”』という事が“ありえない”』という不文律が存在するものの、恋愛系統は殊更その傾向が強い。それも異種間交流型となると、その傾向はかなり強くなる。

つまり、校内に天才ハッカーが居る可能性も天文学的な確率では

無く、万に一つの可能性として“あつれぬ”へひこむた、“あつれ
る”のである。

「（しかし……、如何見つけたものか…）」

「結局、この事件も後回しにせざるを得なかつた事は、いつまでも想
い。

第4話（後書き）

「まさに、出オチ」

転生者と言えども、最初の頃はなかなか思つ様には行かないといふ事ですwww ちなみに予告しておきますが、9月から11月は諸事情で更新速度が一気に落ちます。それでも偶に更新しておきますので、心配しないで下さい。流石に、3ヶ月放置なんてことはしませんのでwww

オーバー。

【短章】 第1話（前書き）

主人公である転生者が、『フラグ』といったゲーム用語を使う様になつた経緯を書いてみました。登場するゲームタイトルや内容が明らかにパクリですが、気にしたら負けですwww

*このお話は『短章』ですので、何時もの半分以下の長さでお送りします。

【短章】 第1話

『フラグ』。和訳すると『旗』だが、物語において後に特定の展開・状況を引き出す事柄や伏線という意味も持つている。「フラグを立てる」、「フラグを回収する」、「フラグを折る」といった使い方をし、『導入フラグ』、『分岐フラグ』、『敵対フラグ』など様々な種類に分けることが出来る。

「隊長。俺、この戦争が終わったら彼女に」

「止める。それは『死亡フラグ』だぞ？」

「何すかそれ？」

「□にすると、後に何らかの要因で望み叶わぬことになる台詞のことだ。事後の約束・願望などが特に『死亡フラグ』として扱われる

「それって、隊長の迷信ジンクスつすか？」

「ああ。ちなみに『死亡フラグ』の逆で、『生存フラグ』というのがあつてだな」

（）

短章第1話：「転生者とノベルゲーム」

「それ、何てエロゲ？」
「は？」

その日、通学途中に曲がり角から走つて来た女生徒とぶつかった

出来事を親友に話すと、親友が突然、その様な事を言い出した。

「お前、ギャルゲーだとエロゲーとか、とにかくノベルゲームをやつた事はあるか？」

「無いな。それが何か役に立つか？」

戦略シミュレーションゲームやアクションゲーム、格闘ゲームや射撃ゲームは、これから転生する世界でも何かと応用出来そうなので積極的にやつてているが、文章が主体のノベルゲームは、小説に絵と音楽が付いた様なものだと聞いていたので、まったく手を出さなかつた種類である。

「お前、人生の大半は損している様なものだぞ…？」

「それでは、何かお勧めはあるか？ 出来ればファンタジーやSF、転生要素が入つており、戦闘や戦略、または政略が中心のものが好ましい」

「本当に堅い奴だなお前は…。男子たる者、抜きゲーに興味は無いかつ…？」

抜きゲー。ゲームの内容が『性交』する事を目的としており、言ってみればアニメ絵と音が付いている官能小説だ。

「そういう事に関しては淡白でな。仮に抜くとしても、エロゲーという物で十分だろ？」

そもそも『性交』など、度重なる転生の旅路で幾度と無くやつて
おり、親友風に言つならば『賢者』の領域に達している為、然程性
欲には飢えていないのである。

「……まあ、まあ、ともかくだ。今日、帰りに俺の家に寄つて来い。
幾つか適当に貸してやるからさ」

「恩に着る」

そして学校からの帰りに親友の家に寄り、幾つかゲームを借りて
から帰宅した。

「さて、どちらにするべきか…」

親友の説明によると『真愛』^{マジック}という作品は、『特別』・『無限』・

『代案』の3部作となつており、その番外編に『皆既日食』が位置
しているらしい。親友曰く、「『無限』からは“どうあがいても絶
望”タグの付く鬱ゲーだが、神作でもある。救済が欲しいのなら2
次創作小説を探してみることだ」との事。

もう一つは『愛姫十無双』という作品だ。何と三国志の登場人物
がほとんど“女性”という世界へ転移した主人公が、自分の世界の
知識を用いて奮闘するというもので、この作品を再構成した物が次
作の『真・愛姫十無双』なのだと云つ。

親友曰く、「登場人物が格段に増えているが、キャラ1人辺りの話が薄くなってしまっている。そして何より、^{たいきょう}大橋と小橋が居ないという致命的な変更点が残念な作品だつ……」これは、2次創作小説を見た方が面白いかもな」との事。

なお、後日談である『真・愛姫十無双～恋将伝～』は完全に工口ゲーとの事なので、借りて来なかつた。

そして最後に借りて来たのが、『運命』シリーズである。時系列順に並べると『零』・『滞在夜』・『空虚平穏』とこれも3部作になつており、番外編も幾つかあるらしい。親友曰く、「厨二病が確実に発症する作品だ。同じブランドの『ムーン・プリンセス』シリーズ、『空のマージナル』、『ヴァルブルギス・ナハト』もお勧めだ」との事。

「まあ、どのみちだ。片つ端からするとじょう

そして、『^{マジラヴ}真恋』を手に取つたのであつた。

1カ月後。

「他にお勧めは無いか？」

「あ、ああ、そうだな…。それじゃあ、『ケイオス・ヘッド』とかは如何だ？ 想像が現実になるってヤツなんだが」

こうして、これから転生先で何物にも替え難い知識を、この世界で多く得たのであった。

【短章】 第1話（後書き）

転生者が洗脳された件。ある意味、親友グッジョブと言えるでしょうwww。近況報告ですが、そろそろリアルが忙しくなるので、本編第5・6話の投稿は9月半ばになりそうです。

設定なども上げますので、興味がある方は是非見ていい下さい。ちなみに、この短章を書くのに合計9時間以上掛かっております。やはり遅筆ですね。

オーバー。

第1紙片（前書き）

兼ねてから予告していた設定やら何やらを投稿。第6話の執筆は終わりましたが、投稿は第7話の執筆がもう少し進んでからにしたいと思います。次の投稿は9月の第4週辺りを予定しております。そろそろリアル頑張らないとな…。

本編第4話までの登場人物紹介。（* 本編に出て来た人物のみ）

『藤魅 理貴』
ふじみ りき

【紹介】

転生者兼主人公。本編では、覚醒前の自分（*1）の名前である『藤魅 理貴』を名乗っている。今の家族との関係が浅い事や、事故や事故による2ヶ月間の空白がある事を良い事に、覚醒前の自分を演じず、素の自分のままでいる。如何やら回復能力が異常の様だが……（*2）。

（*1）：覚醒前の自分＝事故に遭う前の『藤魅 理貴』。

（*2）：本編第1話を参照。

『藤魅 霞凜』
かりん

【紹介】

理貴より数ヶ月分年上の義姉。よく理貴に「駄目姉」や「馬鹿姉」、「空気姉」と言われ、苛め（？）られている。理貴が事故に遭うまでは、女子バスケ部の部長を務めていた。現在は部活復帰を目指しつつ、同時に料理の腕も磨いているようだ（*3）。

（*3）：間章第1話を参照。

『藤魅次女・三女』

【紹介】

【紹介】

【紹介】

まだ名前が出て来ていらない為、こう表記されている。あまりにも不遇過ぎるので、如何にかしたいと（作者自体）思っている。

『母親・父親』

【紹介】

母親は専業主婦で、父親は外交官として世界中を飛び回っている。「何処かで似た様な設定があつた様な…」と思つてはいるが、ライトノベル『灼眼のシャナ』の坂井夫妻（妻・専業主婦、夫・海外を股に掛ける商社マン）などの先行者が結構居た件。これもある意味、テンプレ的なかもしない。ちなみに主人公は、母親の前では『母さん』。それ以外では『母親』と呼び分けている。

『立風 康』

【紹介】

理貴が事故に遭う以前から繋がりのある人物。細かい気遣いとツツ『ミミ』の早さが特徴。今後の活躍に期待。

『遙音 姫乃』

【紹介】

理貴が事故に遭う以前から繋がりのある人物。ぐいぐいと自分をアピールする健気さと、爽やかに吐く毒が特徴。今後の活躍に期待。

勝手にQ&Aコーナー。作者が質問を予想して答えるだけのバー

（）

ナ一。単なるネタ晒しとも言つ。本編や断章なども含まれてゐる。

Q：「転生じやなくて憑依では？」

A：「見解の相違です（キリツ）

補足：そもそも転生とは「次の世で別の形に生まれ変わる事」です
ので、“別の形が既存の物であつても構わない”と作者は解釈して
います。

Q：「回復が早過ぎるだろ？」

A：「理由は後の本編で判明します。かなり長くお待ち下さ」

Q：「主人公の行動方針は？」

A：「まだ秘密ですが、追々（おいおい）分かるかと」

Q：「『亜人』って何ぞ？」

A：「人型である事、または成れる事が前提で、なおかつ知能が『
人間』と同等か、それ以上であるモノを『亜人』と定義しています」

Q：「『^{ギア・レーシング}転生阻止』、『^{クーデ・グラス}絶対絶命』、『^{アイオン・リング}永久封印』、【^{アルティメット・アーツ}究極神技】
のルビの意味が知りたい」

A：「以下参照」

1番目：英語で『gear racing』。意味は『歯車が空転

する』 = 『転生が出来ない』

2番田・仏語で『coup de grace』。意味は『見事な

一撃』 = 『致命傷』

3番田・英語で『action ring』。意味は『無限の輪』 = 『環状的終始』

4番田・英語で『ultimate arts』。意味は『究極武術』 = 『究極奥義』

（）

その他的重要（？）語句とか文章とか。

間章第1話：「あう……」「……狐かお前は？」

通称『鍵』こと『Key』が発売したPCゲーム『Kanon』の
人外ヒロイン『沢渡真琴』の口癖が「あう」。泣きゲーだが、転
生者も一応はやっていたらしい。この頃から変な口癖のあるヒロイ
ンが出来始め、「はう」「うにゅ」「くう」「はわわ」など多岐に渡
る謎の発展を遂げた。そんな彼女に関する名言がある。

「『Kanon』の真琴は生きろ。『School Days』の
誠は死ね」

実に的を射ている名言だと思つ。後者の所業は筆舌に表べし難い

ので、此処では割愛させて頂く。

以下、短章第1話

『賢者』の領域

達観しており、欲望に飢えていない冷めた状態。理性を保ち、自律することが出来る。転生者は知識も経験も豊富なので、『賢者』と名乗つても然程問題無いだろう。

『真愛（マジ＝ラヴ）』の『特別』・『無限』・『代案』・『既日食』

元ネタのPCゲームである『Muuv-Luv（マブ＝ラヴ）』を誤表記+当て字し、サブタイの『EXTRA』・『ANLIMITE D』・『Alternative』・『トータル・イクリプス』を和訳したもの。2次創作小説は良作が多いので、探してみる価値あり。

『愛姫十無双』と『真・愛姫十無双』と『真・愛姫十無双』恋将伝

』

真ん中のダガー記号（+ これ）でお分かりの通り、元ネタは『恋姫†無双』と『真・恋姫†無双』と『真・恋姫†無双』萌将伝』。最後のは後日談^{アンディスク}で、「ハーレム、カモーン！！」な人ならプレイするべきか？ これも2次創作小説に良作が多い。

『運命』シリーズ、『零』・『滞在夜』・『空虚平穏』

『ムーン・プリンセス』シリーズ

『空のマージナル』

『ヴァルブルギス・ナハト』

元ネタは『TYPE-MOON』、通称『型月』から出されたP Cゲー『Fate』を和訳し、サブタイの『zero』・『sta y night』・『holi low ataraxia』を和訳したもの。『来訪夜』にしようか『滞在夜』にしようかで悩んだ記憶がある。後のは『月姫』、『空の境界』、『魔法使いの夜』の英訳やら独訳。ちなみに投稿時点では、まだ『魔法使いの夜』は発売していなかつた。何れも世界観を共有している。ところで、『月姫2』の開発はまだだらうか？

『ケイオス・ヘッド』

『CHAOS-HEAD』、『カオス・ヘッド』の『カオス』を英語読みの『ケイオス』に変えた物。実際の内容は「妄想が現実になる」という厨二病患者御用達の作品。オリ主チート物作品でも、この設定がたまに出て来る様になつて來た。『想像』じゃ駄目なんだろうか？

厨一病ちゅういつびょう

ネットスラング。中学2年生くらいで掛かる病気みたいなモノ。『中一』の『中』はわざと誤変換している。「チート」、「魔王」、「勇者」、「不老不死」、「最強」、「ハーレム」といった言葉のどれか一つにでも惹かれたら、発症している可能性あり。

第1紙片（後書き）

断章の登場人物は、もう少し先になつてから。短章の方は名前が出ていませんので、敢えて書きませんでした。間章も同じく。基本的に何話か進んだら、こういった形で設定などを投稿しようと思います。

前書きでも言いましたが、次の投稿は9月の第4週辺りを予定。不意打ち投稿は致しませんので、時々チェックしなくても大丈夫です。

第5話（前書き）

リアルの用事が片付きましたので、予告通り投稿します。とはい
え、あまり執筆が進んでいないんですね。……何故かつて？
それは『とある魔術の禁書目録』^{インデックス}の2次創作小説を書いていたから
なのさつ…！

「はい、すみません。○ユニ」

何故だか急にストーリーが重厚なチート物を書きたくなつたんで
す。一応、本編第7話は執筆 添削 执筆……と試行錯誤しながら
書いております。ええ、遅筆ですとも。ついでに浮氣（他作品の
執筆）もしますよ。

ちなみに、『第1紙片』に色々と追加しましたので、改めて見る
のも良いかもしれません。では、以下の本編をどうぞ。

「仮面。それは素顔を隠し、他人になりきる道具である」この文の“素顔”を“本性”、“道具”を“方法”と言い換えても不思議と通用するのだから、人が如何に『理想の自分』を追い求めているかが良く分かるだろう。現実と理想がかけ離れていればいる程、その差異（歪み）はとても重く感じてしまう。やがて仮面の重さに心が耐えかねた時、人は一体如何するのだろうか？

「お前なら如何する？」
「相変わらず唐突だね君は…。僕はそだね、作り直していると思つよ？」

「理想の再確認と再修正か。相変わらず模範的だなお前は」「それじゃ、そう言つ君は如何するのか聞かせておくれよ?」
「俺か？俺なら…」
「軽量化しても、再び被つているだろうな」

「『初日』のジンクス / 『第5虚区』の罠』～前編～」

朝のS.H.R（留意事項を連絡する短い時間）を終え、1時限目の授業　体育に間に合う様に、体育館へと向かう。前日、担任に連絡して時間割を訊いていた為、忘れ物は無かつた。
しかも偶然にも、授業内容はバスケの試合だそうだ。数日前、駄目姉と1対1形式でやつただけに作意を感じてしまうのは、単に自

分の考え方なのだらうか？

「よう、理貴。朝方振りだな。その……、動いても大丈夫なのか？」
「医者のお墨付きだ。これと言つて問題は無い」

「そ、そつか……」

なお、体育の授業は奇数クラス同士（1・3・5・7組）の合同なので、必然的に3組の康や、未だに見えない1組の姫乃とまた、顔を合わせることになる。ちなみに、自分は7組である。

「あっ、そう言えば……。お前が休んでいる間に、勝手に俺らのチームメンバーとして入れたんだけど、それで良かつたか？」

「ああ。別に構わない」

正直、気晴らしになれば何処のチームでも良い。たかが遊戯の勝敗など一の次、二の次である。

「そつか……。それじゃ、期待しているからな！」

遠くから、「りい——きく——ん」と言いながらやつて来る毒ど娘（姫乃）を横目で見遣りながら、「ほびほびに頼む……」と返事をした。康は俺の視線の先に気付いたのか、苦笑しながら颯爽と立ち去つて行つた。それを逃げたと言い換えても、然程違いは無いくらいの去りつぶりだった。

「何用だ？」

「もう動いても大丈夫なの？」

「医者のお墨付きだ。これと書いて問題は無い」

先程、康に言つた台詞をそのまま流用して使つた。

「ふうん…。とにかく、私に対しても何か言つ事は無いのかなあ～？」

そう言つて、腕を組んでCカットはありそうな胸を強調したり、後ろに手を組んで前傾姿勢からこちらの顔を覗き込んだりする等、様々な姿勢ポーズを取つていぐ。どうも本人的には、官能的な姿勢ポーズを取つているつもりらしい。

確かに、他校では絶滅しているはずのブルマと体操着の組み合わせを、着こなす姫乃の体形や容姿は美しく素晴らしいと言える。

が、正直に言わせてもらつと、性欲を掻き立てられる程でも無い。精々、大人ぶつて可愛いという程度の認識だ。

別に性欲が枯れている訳では無い。ただ達観しており、相手がその気でないところからもその気にはならないだけである。

「…………まあ、無理はするな」

無難に、そつと置いておいた。

「うう……。理貴くんが鬼畜過ぎるよ……」

およよと泣き崩れるフリをする毒娘^{じくじょ}改め痛娘^{いたいじょ}を放置し、康が居るチームに合流した。その後、何事も無かつたかの様に授業が開始され、何事も無く授業が終わった。敢えて特筆するならば、痛娘がコート上を半ば自棄氣味に暴走し、12分の試合で10本ものシュートを決めていたことぐらいである。

流石に後半では、スタミナが切れてへばつていたが。

それから2時間目、3時間目、4時間目と過ぎて行き、あつと言いう間に昼食時間になつた。生徒達が我先にと食堂へ殺到するのを後^しに、鞄の中から弁当箱を取り出し、包みを広げた。

朝から母親が、登校再開記念と称してやたらと氣合^{いきあ}の入った手料理を詰めてくれたお陰で、今日は一段と豪華であった。

「悪くは無いな……」

一口食べ、そう評価する。流石に転生者たる自分には遠く及ばないものの、普通に美味しいと言わざるを得ない。そのまま黙々と食べ続け、20分後には完食していた。

「さて、残り30分を如何過ぐべきか……？」

昼食時間には休み時間も含まれており、50分の時間が与えられている。仮眠を取るのも良し、図書館で読書に勤しむのも良し、運動場で汗を流すのも良しである。

「（選択肢2、だな）」

そうと決まれば行動は早く、その3分後には図書館に着いていた。
流石に蔵書数は市立図書館に劣るもの、本のジャンルはかなり多岐に渡っていた。

「（いや、正しくは偏っている、か…？）」

ある棚はライトノベルで、ある棚は魔導書や魔術書で、ある棚は哲学や心理学の本で、ある棚は料理のレシピ本で、ある棚は医学書や技術書で埋め尽くされていた。

明らかに異常、明らかに不自然過ぎる光景の片隅に、唯一“自然に見える”棚が存在していた。それは、図書館の最奥に位置している貸出禁止書籍が置かれている棚であった。他の棚が趣味ないし専門分野に走っているにも関わらず、その棚だけは平然と卒業アルバムや文集が収められていた。

しかしそくよく見てみると、一見“自然に見える”その棚も、他の棚同様に不自然さに満ち溢れていた。

「（並びが違う。同じアルバムや文集が存在している。何年分かが不足している。…………）これは、謎掛けか？ 暗号か？ それともただの偶然か？）」

謎掛けならば、一定の法則に従つていれば何時かは解明出来るが、もし暗号ならば、ヒントとなる対応表がなければ解読することは難しいだろう。偶然だつた場合は、無駄な徒労に終わつてしまつだけである。

「（……良し。見なかつた事にしよう）」

下手に書籍を動かして氣付かれるよりは、何もせずに立ち去つた方が得策である。が

「まあ、そう都合良くはないか…」

何故か振り返つた先に、影が立体化した様な『何か』がこちらと対峙していた。正確に言うならばその影は自分の姿に酷似しており、図書館からは何時の間にか、人気がまったくしなくなつていた。おそらく、人払い的なモノでもされたのだろう。

そしてこの影は、形状や特徴、経験からして『ドッペルゲンカー』だと推定。これが単に足止め用なのか、それとも制圧用なのかは不明だが、不意打ちをしなかつた事から鑑みると、おそらく前者の可能性が高い。

「（色々と展開が唐突過ぎるが……、此処は突破させてもいい）」

主に、田々の平穏（面倒事を回避する）の為に。

取り敢えず、最初は情報収集から始める。手近な本棚から本を取り出すと、向こうも同じ動作をしたもの。その手に本は無く、ただ動作を左右対称に模しただけであった。

「（ほひ…。では、これは如何だ？）」

今度は手にした本を投げ付けると、向こうも同じ動作をするが、その手に元々本は無く、かと言つて空中で本と何かがぶつかつたりする事も無く、ドッペルゲンガーの身体を擦り抜けて地面に落ちた。

「（実体が無いのか？ それとも単に無効化しただけか？）」

次に、右足を一步踏み出してみる。するとやはり向こうも、左足を前に踏み出していた。そして不意打ち気味に急接近しながら右ス

トレードを繰り出すと、向こうも急接近しながら左ストレートを繰り出し、

「は……？」

お互の拳が擦り抜けた。念の為、今度は肘辺りまで入れてみたが、結果は同じであった。自分の肘辺りから、ドッペルゲンガーの拳が突き出しており、ドッペルゲンガーの肘辺りから、自分の拳が突き出していた。

「（単なる幻影か？ それとも、正しく効果が発揮されなかつただけなのか…？）」

疑問もそこに前へと歩き、ドッペルゲンガーを擦り抜け、向こう側へと出た。一応、後ろを振り返つて見てみたが、やはりドッペルゲンガーがこちらを振り返つて見ているだけで、何ら変化も起きてはいなかつた。

このまま睨み合つても仕方が無いので、ドッペルゲンガーの事は頭から追いやり、次に起こすべき行動を思考する事にした。

「（さて、次は…）」

次は、図書館からの脱出である。ドッペルゲンガーの様な足止めがあるからには、それを仕掛けた人物も居るのが常だ。よつて、此

処から速やかに脱出する必要がある。

此処の図書館は通常の出入り口が一つしか無いが、ベランダへの出入り口が一つある。待ち伏せされている可能性も無きにしも有らずだが、通常の出入り口から出るよりは余程安全のはずだ。

幸い図書館は1階に設置されているので、ベランダの壆^{へい}を乗り越えれば、内履きではあるが一先ず外に出られる。 そう思い、「出入り禁止」と張り紙がされているドアのドアノブを回して押し開いたところ、ピンツ^{ペーピー・トラップ}と何かが弾ける音[。]がした。

その瞬間、脳裏に『簡易罠[。]』の三文字が浮かんだ。

「（まことに…）」

すぐに身を翻^{ひるがえ}して後方へと飛び込むと同時に、開いたドアの隙間から煙がもくもくと流れ込んで来た。これがただの煙幕なのか、吸引性催眠ガスなのかは不明だが、ベランダからの脱出は諦めた方が良さそうだ。

「（なりばは…）」

そう思つて見渡すも、何故か窓全てに鉄格子が設置されており、突破するにしても時間がかかりそうであつた。

まさに、万事休す。

「（ちい、じうなつたら
）」

第5話（後書き）

「まさかの急・展・開！！」

……まあ、今更の事ですが。ようやく、恋愛系統の世界らしい一面が出て来たかなあ、と思います。今作で転生者（理貴）がぼやいた通り、色々と展開が唐突です。空から落ちて来る系のヒロインだなんて、まさにその例です。

これから後編へと繋がるのですが、展開が唐突ですので ぐだぐだになつていいく可能性も無きにしも有らずなのですが、第8話ぐらいには日常パートに戻れるかと。……とは言え、まだ第7話すら書き終わつていませんので、あくまで予定です。

此処で、呟言（＝迷言）を2つ程言つて締めたいと思います。

「予定は未定」

「有言が実行に移されるという保証は“信用”といつ不確かなモノで保証される」

オーバー。

第6話（前書き）

「連続投稿ターンつ……！」

といつ訳で、第6話日です。こつ番号ナンバーリング付けしているとよく分かりますが、全然本編が進んでいない事に気付きます。遅筆乙。第7話は1週間以内には投稿出来ますので、しばしお待ちを。では、以下の本編をお楽しみ下せ。

最善手を見出し、それを実行に移し、確実に成功させる。この3つをたつた1人で行うのは難しい。だが、それを集団で行えば如何だろうか？頭脳集団が議論し尽くして出した最善手を、裏方が調整や準備をする事で実行可能な段階まで持つて行き、表方が実際に実行して成功させる。このように、集団には計り知れない長所^{メリット}が存在するのである。

「逆に、計り知れない短所^{デメリット}も存在する訳だがな……」

「即決即断が出来なかつたり、不手際があつたり、裏切りが生じたり、ですよね？」

「そうだ。そして最高の集団を形成するには、求心力のある指導者、優秀な部下、そして何より金が必要だ。金さえあれば、如何に指導者が肩だろうが、部下が最低だろうが、集団として纏める事は“一応”可能だ」

「でもその場合、部下が指導者を裏切つて全部自分の金にしそうと思わないんですか？」

「少し頭の良い奴なら、裏切るよりも徹底的に利用しようと考えるだろう。その理由は、自分なりに考えてみろ。これを次の授業までの宿題とする。以上、授業終わり」

「そんなん？！　良い所で終わらないで下さいよ先生！！　せんせ～～いつ！！！」

「『第5虚区』の罠」(後編) / 侵入者(?) + の対応

「ところで、第5虚区への侵入者の件は如何なりましたか?」「それがその……。取り逃がして、しまいました……」「へえ……?」

つい1時間程前に、第5虚区 図書館への侵入者が報告され、それ以降何の報告も無かつたので、ふと気になつて警備担当者を呼び出してみれば、何とその侵入者を取り逃がしたと言つ。

「どんな状況だったのか、詳しく説明なさい」

警備担当者の話によると、侵入者は罠にかかつたものの何らかの方法で脱出し、ベランダ側の出入り口から出ようとして『軍曹』^{サージャント}が仕掛けた吸引性催眠ガス弾(ガス増量版)を作動させた。

その数十秒後、配置についた教官と候補生からなる部隊^{チーム}が突入した瞬間、ベランダ側に配置していた部隊が次々と気絶させられ、結果としてベランダからの逃走を許してしまつたそうだ。しかもその侵入者は

「魔力反応が無かつた? 改良型の検出妨害魔術の可能性は?」

「いえ、その可能性は低いと……。そもそも、侵入者のものと思われる残留魔力すら存在しない始末でして……」

「…………それでは、如何やつてアレから脱け出したと云つのですか？」

「田下、全力で調査中 との事です」

残留魔力すら観測させない高位の魔術士となると、非常に厄介な事になるわね。しかも部隊を魔術でなく体術で氣絶せている辺り、余裕すら窺える。

「それで、侵入者の足取りは追えたのかしら?」

「いえ、それが……」

「如何かしましたか?」

「……外周部結界に異常は無く、氣絶させられた隊員の田撃情報も含わせますと、一般男子生徒に紛れて潜伏している可能性が高いとの事です」

逃げるどころか堂々と潜伏するとは…………無礼^なるのも大概にしてもらいたいわね。

「緊急事態宣言を発令し、生徒を全て体育館に隔離。校内搜索と並行して全生徒の記憶遡行調査を行ひなさい」

「ほ、本気ですか校長つ?!」

「きりきり動きなさい。そもそもくば

「

得物を抜くわよ?

「は、はいいいつ……」

警備担当者が慌てふためいて出て行つたところで、すっかり冷めて不味くなつた紅茶を啜り、深く溜め息を吐く。

「はあー……。これだから『破魔』関係の仕事は嫌なのよ……」

『破魔』。それは『鬼人』や『魔人』といった、人類にとつて悪害となる者達を狩る血族を指す言葉だ。かく言う私も『破魔』だが、分家の中でも端っこの方の末女なので、宗家と比べれば血はかなり薄い。

此處最近は『破魔』の派閥間の空気が最悪で、色々ときな臭い動きや、事件などが多発している為、赤羽派閥の実働部隊育成所を兼ねたこの学校では、独断で準警戒態勢を敷いていたところ、とうとう事件が起きてしまつた、という訳である。

そもそも私は現場向きの人間で、こいつはた見えない敵への対処などは、周りが思うほど得意ではないのだ。

「一般生徒に被害が及んだら……、如何してくれようかしら?」

そして胃が痛むと共に、やり場の無い怒氣を持て余すのであつた。

「（緊急事態宣言だと？俺を炙り出す為の口実か…？）」

緊急事態宣言。それは出現法則の無い『魔人』が出現する予兆『ウィル・オーライフ』が発見された時に出される避難警報であり、大型結界などが敷設されている体育館に一般生徒を一時的に避難させて、事態が收拾するまで籠城するのだそうだ。

「（此処で逃げ出そうが、あの時に逃げ出そうが、怪しまれる事には変わりないか…）」

あの時　　図書館から脱出する時、案の定、特殊部隊が2箇所の出入り口から突入して来た為、近かつたベランダ側の特殊部隊を全員伸してから脱出し、その後何食わぬ顔で教室へと戻り、午後の授業を受けていた。

そこへ、緊急事態宣言が発令され、現在に至るという訳だ。

「（しかし、此処から先は如何やつて炙り出すつもりだ？）」

図書館に仕掛けられていた対侵入者用罠から鑑みるに、この学校には幾つか仕掛けがあるようだが、探知用の仕掛けはあっても監視用の仕掛けはほとんど無いようだ。現に、個人指定の呼び出しを受けていないのがその証拠だ。

おそらく、^{プライバシー}私生活権などの詰まらない事情に配慮しているのだろう。バレなければ、やつたところで何の問題も無いというのに…。

「（……まさかだと思うが、1人1人学生名簿と照合するつもりか？）」

その方法だと、非常事態宣言で逃げ出した相手を特定することは出来るだろう。だが、自分の様に堂々と紛れている者に対しては、あまり効果的では無い。

「（何か裏があるな…）」

そう思い、しばらく観察していくと、ふとある事に気付いた。

「（教師がやけに拳動不審だな……。何をしている？）」

その拳動を注意深く見ていると、体育館に整列して座り込んでいる生徒の間を行き来し、時折立ち止まつては名簿に指を走らせる振りをしながら、素早く印を切つている事が分かつた。ああやつて、生徒を何らかの方法で調べているのだろう。

「（さて、如何対処したものか…？）」

手段を講じながらも、関係者だと思われる教師や生徒を全て記憶していく。意外と数が多くたものの、覚えられない数でも無かつた。後は個々人の名前を調べれば、暫定的ではあるが謎の組織の脳内名簿が出来るという訳だ。

「先生」

「如何した理貴？」

「トイレに行つて来ても良いでしょうか？」

「おう、さっさと済ませて来いよ」

適当に動く口実を得て床から立ち上がり、出来るだけ自然に見える様に、ゆっくりとトイレに向かつて歩き出した。

「（出入り口は6箇所。だが、その何れにも関係者らしき人物が3、4人立っている。奇襲を仕掛けるにしても、かなりの高難易度だ）」

図書館の場合は、ガス弾の煙幕が視界を遮^{さえぎ}っていた為、上手く成功したが、この体育館にそういう物があるとは到底思えない。一瞬でも視線や意識を奪うないし誘導するならば、火災報知器を鳴らすか、はたまたは

「（良し。個室には誰も居ないな？）」

トイレ洗浄に使う漂白剤と酸性の洗浄液を混ぜ合わせ、かつて化学兵器として扱われた『塩素ガス』を発生させるかである。『塩素ガス』は化学兵器で言えば窒息剤に分類され、呼吸器や目の粘膜を刺激し、咳や嘔吐を催させ、重度になると呼吸不全で死に至る場合もある尤も身近で、手軽に作れる毒ガスだ。たまに掃除中で死亡事故が発生するのは、主にこれが原因だ。

「（やはり置いてあつたか。なら、後はこれを混ぜるだけ…）」

ジギギギギギギ、ギャリリリリイッ！…バチンッ…！

「（つ？！…何の音だ？）」

突如異音が鳴り響いたかと思えば、それは唐突に途切れた。

「（まさか感付かれたか？）」

異常事態につき作業を中断し、状況把握の為にトイレから静かに抜け出す。壁沿いに玄関側へ歩いていると、体育館の中央辺りから言い争う様な怒声が聞こえて来た。

「その生徒から手を放せつ……」

「それ以上近付くなつ……こいつが如何なつても良いのか?!」

「くそつ、卑怯な……」

「（…………何だこの三文芝居は?）」

しゃがんだ状態で壁の縁から体育館の中央を少し覗き込むと、男生徒の制服を着ている何者かが女生徒の首筋にナイフを突き付けており、その何者かを関係者が遠巻きに包围している光景が見えた。状況から察するに、自分以外の侵入者 少なくとも後ろめたい奴が何らかの目的で、女生徒を人質に取っているのだろう。

「（だが、それは悪手だ）」

逃走するのが目的なのか、陽動するのが目的なのは不明だが、どちらにせよ悪手である。逃走するならば人質が足手纏いに成りかねないし、陽動するならば態々（わざわざ）人員を動員せずとも可能なハズだ。

「（それにしても、先程から他の生徒達が騒がないな……。結界でも張られているのか?）」

ある条件を満たした者だけを空間の内部に取り込むという神祕は、これまでの世界にも割とあった。主に、部外者を巻き込まない為だ

とか、目撃者を少なくさせるのが目的で、高度なモノとなると時間の概念すら切り取り、内部で経過した時間を外部では無かつた事にする事も可能である。

何故、自分が結界に取り込まれたのかはさて置き、人質の方はおそらく巻き込まれただけだらう。よくよく周囲を見渡せば、薄紫色の結界らしきモノが見えた。

「さつさと道を開けて、舞台の方へ行けッ！…」

「（さて、自分は如何動くべきか…？）」

正直、無視するのも良い。そうすれば、この侵入者（仮定）が図書館への侵入者として処理され、自分は平穏な学生生活に戻れるだろ。…………尤も、こいつが逃げ切る、または口を割らなければの話だが。

「（悪手を打つ様な奴だ。あまり当てにしない方が良いな…。それよりも、現状打開の為にも協力した方が良いのか？）」

無論、侵入者（仮定）を捕まえる方である。態々脱出の方を手伝つて、無理に別ルートへ行く必要もあるまい。

「よつし、誰も動くなよ？」
「くつ……」

侵入者（仮定）は玄関側に背を向けてゆっくりと後退しており、こちらに気付いている素振りは無い。図書館の様な障害物もなく、相手が人質を取っている事を考慮しても、非常に奇襲を仕掛け易い状況だ。

後は、奇襲に最適な距離に入るのを待つのみ……。

「……………今だ！…！」

侵入者（仮定）との彼我の距離が5mを切ったところで、しゃがんだ状態からクラウチングスタートで飛び出す。そして3歩もいかない内に侵入者の左後方へと走り寄る。

「なっ！？」

間近に迫った自分に気付き、反射的に振られたナイフの軌跡を頭を下げることで交わしながら、切り返しが来る前に伸びた左腕を右手で掴み、そして左手で頭部を掴むと、足を掛けて転ばせつつ頭部を地面へと押し付けた。

「ゴッ！！」

鈍い音と共に、侵入者（仮定）の頭が床に打ち当たつて身悶えるが、それでもナイフは手放さなかつた為、小指の骨を圧し折り、握力が弱まつた隙に奪い取つた。ちなみに、人質は巻き添えで一緒に倒れていたものの、すでに安全圏へと離脱していた。逃がす手間が省けて、何よりである。

「協力には感謝する。…だが、規則に則り、お前を一時的に拘束させて貰つ」

先程、舞台側に遠ざけられていた関係者らが、未だに身悶える侵入者（仮定）を取り押さえ、身体検査をするその脇で、今度は自分が関係者らに包囲されていた。『明日は我が身』、という言葉を改めて実感した瞬間であった。

「そちらの規則に従おひ。…とひりで、このナイフは如何すれば良い？」

手の中にあるナイフは、刀身に奇怪めいた紋様が這つており、これまでの世界の神秘を参考にすると、おそらく刀身に何らかの効果をもたらす類型^{タイプ}で間違いないだろう。流石に、効果までは不明だが。

「その場に置いて、手を上げながら30程ゆつくじと下がれ。余計な行動はするなよ？」

「分かった」

……さて、現状打開の為に『ルート分岐選択肢』をあつさりと決めてしまつた訳だが、これから如何なることやら…。よくある展開としては記憶を消されるか、協力させられるかのどちらかになるだろうが、この世界の系統を考慮すれば後者の確率が遥かに高い。

「（思えば今日は、覚醒後初の登校日だったな……）」

今後の展開を思つと、軽く鬱になつた。

「もう心配せぬとも良い。悪い様には扱わない」

「……もう願おひ」

侵入者（仮定）の身体検査をしていた男性関係者が、何故か女性関係者らにボロられていの光景から目を逸らしつつ、そう答えた。経緯は如何であれ、同じ男として連續急所蹴りは見るに耐えない。

「？……ああ、あれは気にするな。ただの制裁だ」

「だがしかし、流石に一対八では生死（精子）に関わるぞ？」

既に、手遅れ感は否めないがな……。

「……意外と上手いな。下ネタだが」

「……女性が気付くな。はしたない」

そういう言つてゐる内に、自分の身体検査も制裁も、どちらも終わっていたのであつた。

第6話（後書き）

「転生者だつて下ネタくらいは言ひ回」とか言つてみる。

今回、伏線ばつかです。そして前回は導入編。実は、今回と次回（第7話）は前編・後編みたいな形になつていますが、区切りが良いので敢えて表記していません。ちなみに、塩素ガスは非常に危険ですでの、作らない様に。本気で死人が出ますから。^{マジ}

オーバー。

第7話（前書き）

まずは謝罪を。今週中どころか、2日遅れで投稿している件について。

作者「いやね、添削とか見直しどか、投稿分の尺を調整したり（「」

結論・遅筆などによる作者の力量不足。

では、以下の本編をどうぞ。

田で得られる情報は、全体の7～8割を占める程に重要だ。その為、真偽を判断する時において『見抜く』といつ言葉が使われている。特に『本質を見抜く』といつ行為は、間違えたり騙されやすいものの、かなり重要な行為である。何故ならその人物の本質を見抜けば、行動を読んだり、思考を誘導させる事が可能となるからだ。

「だが、道具や魔法では観測出来ない事象を捉えるには、かなりの時間をする上、確証出来ないという致命的な部分がある」「推理、とか？」

「そうだ。しかし、これから起こす行動や言動の参考にはなる。お前が修めようとしている『心理学』と言つ物は、そんな“参考になるかもしれない”程度の物だ」

「理解している」

「なら良い。授業は対話や説明方式で行う。疑問などがあれば何時でも訊く様に。無論、授業時間外でもだ」「分かった」

（）

「穏やかな監視の一時／見抜く者、見誤る者、流される者」

「お前の身元が無事証明された。拘束して悪かつたな」

「なに、規則なら仕方あるまい」

あれから体育館の倉庫で一時隔離されていたものの、10分も経たない内に、外に出れた。既に緊急事態宣言は解除されており、体育館に残っているのは自分と先の女性関係者だけであった。

「……だが、お前が結界に入り込んだ事とは別だ。その調査が終わるまで、私の監視下に入つて貰つ事になる」

つまり、図書館への侵入をますます知られる訳にはいかなくなつた、という事か。これで知られれば、更に面倒事になる事ぐらいは予想が付く。

「調査はどれくらいで終わるのか？」

「数時間は掛かるだろうな。…他に聞く事は？」

「特に無いな」

出来れば今後の処遇に関する事を訊きたいが、おそらく訊くだけ無駄だろつ。そういうた情報は、まず本人には知らされないからな。

「……ところで、お前は如何してあそこに居た？」
「トイレに行つた帰りに不審者が居たのでな。無謀にも飛び掛かり、今に至る」

かなり簡略化しているが、嘘では無い。

「なるほど。実に分かり易い説明だ。

時に、お前の親族に『

破魔』は居るか?」

「さてな…。そもそも、自分の産みの親すら不明だ」

覚醒前の自分の記憶をかなり遡れば、産みの親と一緒に過ごした記憶はあるものの、輪郭がぼやけ、かなり不鮮明に記憶されている。と言うのも、その記憶は生後数ヶ月頃の記憶なので、視覚が未発達で不鮮明なのは如何しようも無い事である。

「済まない。失礼な事を聞いてしまったな……」

「産みの親より育ての親だ。気にする事は無い」

尤も、転生者として答えるならば、前言とは真逆の「育ての親より産みの親」となる。何故なら、親の種族や階級によつては差別や偏見、義務や権利が付き纏う事になり、行動に制限が掛かつたり、そもそも行動が起こせなかつたりするなど、不利な状況が発生する恐れがある。

……まあ、出自や容姿を偽れば如何とでもなるが。

「お詫びと言つては何なんだが……私の話を少しよつ
「……好きにしや」

一瞬、このフラグを折るべきか情報を取るべきかで悩んだものの、やはり後者を取る事にした。他人の過去話はあまり聞ける様なモノでも無いし、交友関係は広げておくに越した事は無い、と判断したからである。

「私は、小さい頃からある場所へ修行に出されてな。3歳の頃から退魔士に関する基本知識を始め、色々と教え込まれた」

まるで、何処かの武僧の様だな。

「6歳からは小学校に通いつつ、修行を続けた。無論、中学校に通つていてる今でも修行は続いている」

「成る程。…………それで、話は終わりりか？」

「ああ、これで終わりだ。最初に言つただろう?『私の話を“少
し”しよつ』、とな」

意地の悪い笑みを浮かべ、「してやつたり」と言いたげなその表情に対し、何故だか言い様の無い“哀れみ”を覚えた。

「如何かしたのか？」

「……いや、暗くなる前に帰りたいと思つただけだ。夕方8時以降は補導の対象だからな」

適当に誑かしておいた。

「ああ、なるほど。しばし待て……」

そして数十秒後、「7時までには終わらすそつだ」と告げられた。如何やら、念話の類で何処かと通信をしていた様だ。

「それと何故だか分からぬが……、校長がお前に会いたいそuds
「何だ。校長も関係者だったのか？」

「と言づか、教職者のほとんどはこちら側だな」

「……一体、この学校は如何なつてゐるんだ？」

一見、種族を問わない解放的な中学校といきや、その実『破魔』の関係者達の拠点であると、誰が思つだらうか？否、誰も思つまい。

「ちなみに日本限定だが、他校もほぼ同様だ。ちなみに『破魔』の教職者も居るぞ？」

「最早、流石としか言いようが無いな……」

「そうだな。後は歩きながら話そづ。付いて來い」

彼女の横に並び、体育館の外に出る。校舎と体育館の間には渡り廊下が3本も設けられている為、靴の履き替えをする必要が無く、移動するのに非常に便利である。

「『破魔』の歴史は、ある退魔士の一族から始まった。彼らは『彫り師』と名乗る人物に、『彫り物』と呼ばれる武具・防具・道具を用意してもらい、それらを用いて人害を狩つていった。そのお陰で今日、日本は此処まで発展する事が出来た」

そこで一息入れた後、再び話し始める。

「だが、その一方で問題もあった。発展に伴い人々が住居範囲を広げた結果、手の足りない場所が増えてしまった事は勿論、『彫り物』の数不足や劣化・消耗が、いよいよ深刻になつて來たのだ」

ちなみに2つ目の問題は、『彫り師』が『彫り物』の製法を残さなかつたのが原因だ、と補足説明を挟みつつ、彼女は話を続けた。

「そこで、先の侵入者の目的であらう『彫り物盗り』に繋がるといふ訳だ」

「つまり、無いなら他所から盗む、という事か？」

「そうだ。さて、そろそろ目的地に着くぞ」

それから数十秒後に辿り着いた場所は、校長室の隣にある応接室であった。中に入ると、机を挟んだ向こう側に校長と教頭の2人が、椅子に腰掛けていた。

「2ヶ月振りですね藤魅君。調子は

「それで、話とは？」

校長の挨拶を遮り、やや高圧的に本題へと促した。挨拶で時間を無駄にするよりは、用件に費やした方がよっぽど賢明だ。

「では单刀直入に。貴方、図書館に侵入した事はあるかしら？」
「無いな」

“利用”はしたが、“侵入”をした覚えは無い。

「そう……。ところで貴方、アルバイトをしてみないかしら？」
「中學生のアルバイトは法律上禁止されているからな。断る」

そもそも、目的も無く人の下に就くなど、したくも無いのが心情だ。それに、大抵古くからある組織は内部腐敗し切っているのが常だからな。権力抗争に巻き込まれるのだけは勘弁願いたい。

「……なら、話はこれで終わりね。もつ教室へ戻つて良いわよ」

「わざわざもりおひ」

彼が応接室から離れて行つたのを退魔士見習いの刀佳さんに確認してもらつてから、私は隣に座る教頭の津田さん(「結果」を訊いてみた。

「それで、彼は如何だつたのかしら?」

「…………彼は、非常に危険、…………だと思います」

「思ひ?」

予想外の言葉に、思わず疑問が口を出た。この学校で一番の『読心術』の使い手が、彼の記憶を読んだにも関わらず、そんな抽象的な言葉しか出て来ないと、一体如何いうことなのだろうか?

「つまり、貴方でも読めなかつたといつ事なのかしら?」

「いえ、何と言ひますか……」

津田さんが珍しく動搖しているのを見て、私は彼が落ち着くのを待つた。

「……そう、本当に読めなかつたんです。『読心術』を妨害するには、『抵抗術』を使うか精神を鍛える必要があります」

「そうね」

『読心術』を防ぐ程の『抵抗術』を覚えるには、個人差はあれど1ヶ月もあれば覚えられる。それに対し、『読心術』を防ぐ程の精神を得るには、何十年という鍛錬が必要だ。それ程に、『記憶』というものは読み取られやすいのである。

「そして術を使っている場合は、こちらが弾かれる様な特異な感覚がするのですが、彼らはそういう感覚がしませんでした」

「つまり、彼の精神は鍛えられており、貴方でも読み取れなかつたと？」

「はい……」

もしそうだとすれば、魔術の技量も力量も高位の魔術士に相当するはず……。

「刀佳さんは引き続き彼の近辺で監視を。津田さんは2時間以内に隊員メンバを選出して、彼の校外行動の監視に当たらせなさい。しばらく泳がせて、様子を見るとしましょう」

「了解しました」

「了解です」

さて、竜が出るのか蛇が出るのか…。まったく、胃に悪いわねえ……。

~~ side out

帰りのSHRで部活休止と6時までの完全下校、そして調査の為に翌日が臨時休校になる事が伝えられ、部活生の不平不満の声が飛び交う中、鞄を持って教室を出ようとしたりで康と姫乃がやつて來た。

「おーい、理貴。久し振りに一緒に帰ろうぜー。」

「それで何時もの喫茶店にも行こうよーーー。」

「ああ、そうだな」

やや姫乃に押し切られる形で、何時もの（覚醒後の自分としては初めて）喫茶店『アタラクシア支店』に行く事になった。ちなみに“支店”という言葉が名前に入っているものの、本店は『アタラクシア支店』そのものである。

どうも、「^{アタラクシア}平穏は自分で見つけ、手に入れるモノであり、それまでは仮初の平穏な一時を此処（『アタラクシア支店』）で過ごして欲しい」という思いが込められているらしい。そんな事はさて置き

「……何故、待ち伏せている?」

「今日は理貴くんと一緒に帰つてみよつかな~? つて思ったからだよ?」

にこにことそう答えるのは、駄目姉こと馬鹿姉 ではなく 義姉の霞凜だつた。何故か自分の鞄箱の前で待つており、その所為で他の学生から興味の視線を向けられていた。

よくよく考えてみれば、彼女は2ヶ月前までは強豪バスケットチームを率いる部長だつたのだから、未だに知名度が高くて不思議では無い。おまけに容姿が平均的な中学生から抜きん出でている為、余計に目立つて見える。

「俺はこれから喫茶店に行くんだがな……」
「あ、誘つてくれるの? ありがと~!」
「おい。人の話はちゃんと聞けと」
「理貴、早く行こうぜー……つて、あの『環成』霞凜 さんをナンパしているだとつ? ! 意外とやるなお前! ?」

タイミングくらい読んで欲しいのだがな……、元親友。ちなみに名前で分かるだろうが、霞凜だけでなく他の義妹達も、学校では未だに旧姓を使つてゐる。

何故なら、制服や体育着、その他諸々の名前入りの物を変更する必要が出て来る為、次の学年に上がるまでは旧姓を使う事になつた。その所為か、霞凜達との家族関係は不思議と知られていなかつた。

……まあ、覚醒前まではお互いの関係が複雑だった上、公言する様な性格でもなかつたのが主な原因だろう。それ以前にお互いを家族として認めず、他人同士で居ようとしたからそうなつたとも言える。

「あのな……。義理とは言え、一応の姉をナンパする弟が居ると思
うか？」

「理貴くんつ?！」

「...は？」

れつて本当なマジ

? ! ? ! ?

「黙れ」

驚愕の声を上げた姫乃改めボ工娘の口を手で塞ぎ、喉を軽く締め付ける事で強制的に黙らせた。それから落ち着いた（窒息し掛けた）ところで解放し、素早く外履きに履き替え、有無を言わさず校門の前までボ工娘を連行した。

「少しあ場所を考えて叫べ。迷惑行為だぞ？」

「だって、 “あの” 環成さんと理貴くんが “アレ” って聞いたら、 誰だって驚くよ絶対ッ！！」

「……………環成さんも？」

「ああ」

そう言つと、何故か姫乃はえらく不機嫌になつた。それが部外者

を参加させる事に対してなのか、それとも他の女性を連れて来る事に対してなのかは分からないが、好感度が下がっている事には違いない。

「康、ボ工娘、それと駄目姉、さっさと行くぞ。時間が惜しい」

「ボ工娘つて何さつ？！」

「私、べっしょう蔑称？！」

「ちょっと！？ その発言は男生徒全員を敵に回しかねないぞ！？」

「加えて、一部の女生徒を敵に回すだらうな」

「――誰ツ？！」「

「こちらからは死角となつてている校門の表側から、先程の退魔士見習いの女生徒が音も無く現れた。思えば、これが本日3度目の待ち伏せ（1度目は図書館、2度目は玄関）である。今日は待ち伏せに縁のある日なのだろうか…？」

「私が？ 私は通りすがりの」

「ストーカーだ。しかも7時まで付いて回る制限時間付きの」

「おい」

「さわやかな意趣返しだ。気にするな」

こうして何だかんだで、5人で喫茶店へ行く事になつたのであつた。ちなみに、姫乃の機嫌が更に悪くなつた事は言つまでもない。

第7話（後書き）

誰が見抜き、欺き、流されたのか？ 敢えて明言はしておきません。
“推理”してみて下さい www

ちなみに此処でも謝罪をば。第8話の冒頭すら書いていない件。
……と言う訳で、次の本編投稿は大分先となります。予定としては、
10月の最後辺り。ストックも溜めておきたいし、11月のリアル
の事情に向けて対策をしないといけないので、更に亀更新となりそ
うです。

それまでは、他のお気に入り作品を読むなどの対策をして下さい
ませ。

オーバー。

【聞章】 第2話（前書き）

久々の投稿。執筆具合は如何かつて？ 本編第9話の冒頭あたりまで書いて一時休憩中、つてと/orです。そついや、もづじきハロウインだつたよーな……。

（作者）Q：「的に悪戯いたずらしててくれる可愛い魔女こじつ娘とか、来ませんかね？」

（現実）A：「來ても精々、新聞配達のオバサンくらいだろ。妄想乙」

……だそうです。では、以下の聞章第2話をどうぞ。

理貴くんが事故に遭つた。その訃報は、事故の翌日ふはくじのS H Rで知られた。その酷く現実味の無いお知らせに、私がしばらく放心していると、康くんがやつて来て「姫乃、病院びやうに行くぞ!」と言い、学校を抜け出し、病院へと向かつた。そして集中治療室ちゅうじゅうちりょうしつで見た理貴くんは、様々な管チューブや機械に繋がれ、まるでベッドに拘束されているようだつた。それから2カ月後の今日、理貴くんは何の前触れも無く、私達の前に現れた。

「ああいう時ときつて泣くのが普通なのかもしないけどさ、アイツが普通に現れた所所為せいか、何だか泣けなかつたんだよな~」

「そうそう。私、思わず『幽人ゆうじん』かと疑つちゃつたくらいだもん」
「ははっ、今にして思えば、俺達相当な間抜けまんぬげ面していたに違たがいないぜ?」

「あははっ、康くんは元々からそうでしょ?」

「ひつでえ! ? 最近の毒舌どくぜつの中で一番傷付いたぞオイ……」

「変わつたところ、変わらなかつたところ」

本当に久し振りに会つた理貴くんは、雰囲気がかなり大人びて、えらく落ち着いていた。事故の後遺症も無いらしく、見た限り

では雰囲気以外は特に変わつていなかつた。でも話してみると、実はかなり変わつてゐる事が分かつた。

声に自信が滲み出ていた。へたれっぽさが無くなつていて。何かしらの迷いが無くなつていて。言葉遣いが大人っぽくなつていて。よく思慮する様になつていて。あまり私をからかわなくなつていて。ちよつと意地悪になつていて。即答しなくなつていて。皮肉を言わなくなつていて。私を『はるかね遙音』と呼ばなくなつていて。康くんと一緒に、馬鹿な事をしなくなつていて。

そして、前よりも増して鈍感になつていて。

…………まあそれでも、変わつていなことじろがつた。楽しそ

うに苦笑するところ。話を体よく流すところ。友達が多いところ。
私と康くんと仲が良いところ。体育が得意などころ。周りから意外
と頼りにされているところ。

そして、女の子と仲良くなるのが早いところとか、特に変わつて
いなかつた。

むしろ、早さが増した気がするくらいだ。現に、何時の
間にか刀佳さんという人と仲良くなつていて、3ヶ月前から家族になつ
っていたという霞凜さんも一緒に、何時ものお茶会に向かつてい
るのが良い証拠だ。

「ううう……、これは由々（ゆゆ）しき事態……」

『幼馴染』という不動の地位が、『義理の姉』、『クールな同級生』という新たな地位^{ポジション}によつて脅かされている事は勿論、このペースだと明日や明後日^{あせつて}や、明々後日^{しゃあつて}が如何なつてているかも予想が付かない。

「（）これは計画を早めて、デートにでも誘つてみよつかな～？」

『兵は拙速を聞く』や『疾きことは風の如し』など、昔の人もそう言つてゐるのだから、今週の休日辺りにでも、理貴くんをデートに誘つてみるのも良いかもしない。

「（あ……、でも如何誘おう？）」

まずそこで躊躇^{つまづ}いた姫乃は、あーでも無い、こーでも無いと頭を悩ます内に、何時の間にか喫茶店に着いたのであつた。

「おい、姫乃。早く入らないと外に締め出すぞ？」
「あつ、ごめんね理貴くん……」

扉を開け支えていた理貴くんに促され、店内へと入つた。外と違つて店内は冷房で冷えており、火照^{ほて}った身体が冷えて行くのが良くな分かった。ついでに頭も良くなれた様で、思考も何だか冴えてきた

『気がしなくもない。

「如何かしたのか?」

「うんん。何でも無いよ?」

「? まあ、それなら良いんだが」

…………些くないんだけどなあ…………。あは。

「…………理貴くんのとーへんぼくー」

「何なんだいきなり?」

「何となーく、毒吐いてみただけ~」

「独り事の様に吐かれてもな…………」

「気にしない気にしない~」

【聞章】 第2話（後書き）

今日のタグ：『驚きの白丸』、『聞章にして短章』

間を持たせる為に空白入れまくつたら、やたらと尺が長くなつた件。強調の表現の仕方を変えた方が良いのかも…。ある意味実験作となつてしましましたが、姫乃の内心を感じてくれれば嬉しいです。

ただ……、やはり女性視点は難しい。感情的な場面とか特に。やはり、さばさばしていて、あまり喋らないキャラの方が楽ですね。転生者とか特に。

ちなみに、『マシロ何とか』のやつは、作者によるお知らせを兼ねた“何か”です。最初がアレですが、最後まで見た方が良いかもしません。 つて、自分で言つのも何なんですが…。

オーバー。

マシロ・ホワイト・フランク・ヴァイス01（前書き）

『脳内会議の様子』

作者A「こきなり謝罪文から始まるつじびーよー。」

作者B「良いんじゃね？ 斬新な始まり方で」

作者C「ズコー、にも程があるだる…。ある意味黒歴史にならぬや」
レ?」

作者D「……それでは、以下の本文をどうぞ」

前書きでも述べた様に、本編第5話において、未公開分の設定と食い違う箇所が見つかりましたので、大幅（？）に修正致しました。修正箇所は以下の通り。

（）

本編第5話・ドッペルゲンガー攻略戦の辺りの文章

「（ほう…。では、これは如何だ？）」

今度は手にした本を投げ付けると、向こうも同じ動作をするが、その手に元々本は無く、かと言つて空中で本と何かがぶつかったりする事も無く、ドッペルゲンガーの身体を擦り抜けて地面に落ちた。

「（実体が無いのか？ それとも単に無効化しただけか？）」

のところから、

「（さて、次は……）」

次は、図書館からの脱出である。ドッペルゲンガーの様な足止めがあるからには、それを仕掛けた人物も居るのが常だ。よつて、此処から速やかに脱出する必要がある。

のところまで。展開は変わりませんが、第6話の伏線と共に通していますし、謎も更に深まつたかと思います。ちなみに書き直した際、かなり尺が短くなりましたが気にしないで下さい。この小説は、よく無断で修正や添削、改行やその他が行われますので、色々と気にしたら負けなのです。

修正の例：同じく本編第5話で、姫乃のバストサイズがDカップからCカップへとサイズダウン。

理由^{いいわけ}：「中学3年生でDカップはでかいだろ?」という作者の独断と偏見に基づく修正。日本人女性の平均バストサイズは、この時期だとBカップ程度。海外は不明。

ついでに、修正した箇所の文章も貼り付けて置きます。以下、修正前。

次に、右足を一步踏み出してみる。するとやはり向こうも、左足を前に踏み出していた。そして不意打ち氣味に急接近しながら右ストレートを繰り出すと、向こうも急接近しながら左ストレートを繰り出し、拳回士が衝突した。

「（うー？…………そりゃあかー！）」

衝突した瞬間に感じた、粘性の高い液状物質を打つ様な感覚。おそらく触感などの感覚を誤認させ、ありもしない壁を作り上げることで脱出を阻止し、あわよくば疲弊させ、後で確保しやすくなるのが目的なのだろう。

「（しかし、何時発動したんだ？）」

転生者と言えども、転生する度に全ての能力を持ち越している訳では無い。基本的に持ち越すのは知識と経験、そして精神の3つであり、その他は必要に応じて持つて來るのである。余計な力が余計な事態を引き起こすという事を、嫌と言つほど理解しているが故に。だが、神秘関連の能力を持つていれば現在の“余計な事態”を回避出来たかと思うと、あまり持たな過ぎるのも考え方だと、改めて

認識させられる。

「（……まあ、打破出来ない状況では無いがな）」

よく勘違いされるのだが、転生者の武器とは培われた肉体や、魔法といった神祕でも無い。クーデター知識と経験、その2つである。知識を駆使すれば、産業革命も政権奪取も思いのまま。経験を駆使すれば、人材発掘や事態予測も容易となる。

そんな知識と経験はまさに諸刃の双剣だが、上手く扱えば攻防一体の最強の武器と成り得る。特に既知に対しては、尚更だ。

「（残念だったな。お前の様な相手は、既に“経験済み”だ）」

ドッペルゲンガーと手を重ね合わせ、そのまま前へと進む。すると思惑通り、ほとんど抵抗無くドッペルゲンガーを擦り抜け、その背後へと出た。念の為、振り返つて見てみると、ドッペルゲンガーが背後に立つたまま、こちらを振り返つて見ていた。

「（まさか、壁抜けを経験した人間が居るとは思わなかつただろう？）」

上手くいった事に、思わず笑みが浮かぶ。脳の誤認を逆手に取り、抵抗を柔らかい壁と思い込んで擦り抜けた。種を明かせばたつたそれだけの事なのだが、経験した事が無い人にとっては、その想

像は困難を極めるだろう。

尤も、ドッペルゲンガーが物理的に存在していない事が前提だからこそ、この対処法が通用した訳だが。

「（さて、次は…）」

10

うん。未公開分設定と矛盾しまくつているね。ちなみに、この修正部分に関する未公開分は、本編第10話頃には公開出来ればな、と考えております。まあこの時点では、未だに本編第8話までしか書いていませんが…。どうか気長にお待ち下さいませ。何度も言いますが、作者は遅筆だ（涙）

『おまか「一」』

簡単な容姿設定と追加設定を載せてみる。主人公の容姿は本編第

2話でも少し触れているが、本当に少ししか書いていなかつた件。以下、設定。

「藤魅 理貴」

紫よりの青田をしており、田付きが覚醒前の理貴よりも若干きつくなっている。黒髪のショート。顔は中の上くらいだが、纏っている雰囲気がそれを上の下にまで評価を押し上げている。主人公故にフラグメイカー体質だが、本人が意図的にフラグブレイクする為、あまり意味が無い。覚醒前の理貴の人徳故か、友人が多かつたりする。

「藤魅 霞凜」

目は茶色。髪は枯れ草色でロング。至つて易しいお姉さんのイメージ。胸のサイズ？ おそらくC手前のBカップ。姫乃さんには負けています（笑）。紅茶の知識を得て、少しは賢くなつた模様。旧姓は『環成』。後に期待。

「他の妹達」

まだ名前すら出でていないので、敢えて書いていない。多分、おそらく、本編10話頃には出せるはず。

「立風 康」

目は黒色。髪も黒色で、長さは理貴よりも短め。至つて普通の友人。気配りが出来て、ツツコミも出来る素晴らしい人物（作者的に）理性ある熱血漢。

「**遥音** **姫乃**」

目は茶色。髪はこげ茶色で、ミドル。かなり梳いている為、髪が羽毛の様に浮き易い。メインヒロインの特権なのか、発育がかなり良い（特に胸）。理貴に対しては、かなり積極的な一面を見せる。でもやっぱり初心なので、行動力が伴わなかったり…。今後に期待。

「**刀佳**」

目は青色。髪は黒色でロング（肩甲骨くらいまでの長さ）。髪はボニー・テイルにして纏めている。今のところ、名前以外はほぼ不明な退魔士見習いの少女。理貴達の同級生らしい。胸のサイズ？ 憤まし…おっと、誰か来たようだ…。

タイトルの意味は、全部「白い」または「白の」という単語をくっ付けて、最後に数字を付けただけです。特に深い意味はありません。なお、次の投稿日は11月の第2・3週辺りになると思います。それまでは、他の作者様の作品をお楽しみ下さいませ。

オーバー。

第8話（前書き）

不意を突いてこんな時間に投稿してみる件。……嘘です。投稿前の再推敲に時間がかかり、気が付いたらこんな時間になつていただけです。それと、遅ればせながら予定通り投稿を再開致します。

リアルの用事は当分無いので、思いつきり執筆が出来る様になりました。ちなみに現在は第10話を鋭意執筆中。もつと余裕^{ストック}が欲しいと思つ今日のこの頃です。では、以下の本編をどうぞ。

恋愛系統の世界。そこは“有り得ない”という言葉が“有り得ない”世界。目を覚ませば隣で異性が寝ていたり、道を歩けば異性とぶつかり、訪れる先々で異性と出会い、そしてフラグやイベントがこれでもかと発生する。ある意味、恋愛系統の世界は不安定な世界とも言える。何故なら、あらゆる事態が起こり得る“可能性”に満ち溢れているが故に、例え天文学的確率の事象でさえも、高確率で起こり得るのである。時に不平等に、時に理不眞に。

「（ そう。それはまさしく天災級だ…… ）」

「魔王『ルイン・ノートリアス』！ 貴様の悪行の数々もこれまでだ！ 観念しろッ！！」

「（しかも、勇者組が全員女性だとはな……。何だらうか？ ガイアが俺にハーレムを作れと囁いているのか？ はたまた単に先の戦で、男性が減ったからか？）」

「覚悟するのですっ！」

「我らの恨みを、思い知れ！！」

「某の太刀裁き、見切れますかな？」

「皆さん、怪我など気にせずガンガン行っちゃって下さいー。すぐ治しますからーー！」

「（だが、いちいち相手にするのも面倒だ……。……初期地点に飛ばすとするか。）『転送』

「「「「「なつ？」！」」」

「……誰か紅茶と茶菓子を。砂糖壺も頼む」

「はーい、魔王様。少々お待ちをー」

「2ヶ月振りの午後の紅茶 / 初日のジンクス・続（前編）」

退魔士見習いの女生徒こと刀佳^{とうか}が自己紹介し、互いに自己紹介をした事以外は特に何事も無く、喫茶店『アタラクシア支店』に到着した。

ちなみに、よくあるイベントの1つである『席の取り合い』は、自分が奥側に座り、その隣に康^{こう}が座り、自分の対面に姫乃^{ひめの}が座る事で、不発に終わった。そもそも、普段から定位置が決まっていたので、発生も何も無かつた。

そして、霞凜^{かりん}と刀佳が姫乃側の席に座ることで、奇麗に男女に分かれた。まあ、男女比2対3では、普通にこうなるだろ。

「店主、俺達は何時もので~」
「お願いしま~す」
「ちなみに今日は連れもいるので、もう1セツト追加で~」
「あいよ」

にやにやと笑みを浮かべながら、店主がグラスやティーカップを準備し始める。もしかすると、集団デートとでも思われているのかも知れないが、わざわざ訂正するまでも無いので放置する事にした。もし店主にからかわれても、康が勝手に訂正するだろ。

「ところで、2人とも金は持っているのか？」

以前の記憶によれば、自分達が頼んだ物は600円のティーポットに入った気替わり（店主の気分で茶葉が替わるので、“気替わり”）紅茶と、クッキーが10個付いて1セツトになつている税込み600円の物で、何時もは3人で割り勘して200円ずつ支払い、最後に残つたクッキーをジャンケンで取り合つていたらしい。

それを5人で2セツトを注文した為、今回は割り勘で1人当たり240円の支払いとなる。どうせなら、あと1人ぐらい連れて来れば良かつたのかもしね。

「えつ？ 奢つてくれないの？」
「少しばかりは、な」
「…………あれ？」
「ふむ…………」

本当に奢らせるつもりだつたんだな駄目姉。中学生の小遣いなど、高が知れているだろうに……。

「少しばか佳を見習え、駄目姉」

「だつて、普段寄り道なんてしないから、お金なんて持たないもん！」

「理由にすらなつてないな」

「どうやら、駄目姉の脳内では“寄り道”と“出費”は直結しているらしい。もしや、青春時代をバスケだけで過ごすつもりなのだろうか？ 寄り道も結構面白いものなのだが…。まあ、過ごし方は人それぞれなので、態々横から口を挿むつもりは無い。

「……此処は立て替えてやるから、あとで240円返す様に」

「えー……」

駄目姉が抗議の声を上げるが、無視する事にした。金銭トラブルを起こさない一番の方法は、貸し借りした分を短期間でしつかりと回収または返済する事である。その金額が多かれ少なかれ、基本的には同じ事だ。

「ところで今更何だが、お前の父親が再婚した相手って、環成さんのかんなの母親だつたんだな」

「まあな。なまじ有名だつたし、最初の1ヶ月はぎくしゃくしていつからな。訊かれなかつたのもあるが、かといつて話そうとも思わなかつた」

母親がこの近隣では美人と評判だつたのもあるが、やはり駄目姉の知名度の高さが、覚醒前の自分にとつては決定的だつたようだ。

“我ながら”、適応力が無いにも程があると思つた。

「おいおい…。その話が本当なら、何時そこまで仲良くなつたんだよ？」

「3日くらい前だな。つい先週の金曜日の事だ

此処まで短期間にフラグやイベントが発生する辺り、流石は恋愛系統の世界だと感心し、呆れた覚醒後初日でもあるが。

「なるほど……って、ちょっと待て。お前、何時目を覚ましたんだ？」

「3日前だな」

「リハビリは如何したんだ？」

「必要無かつたな。医者も不思議がつてはいたが、問題無しと診断された」

そもそも、普通の医学知識で解明出来る様なモノでも無いしな。

「……ま、問題無いならそれで良いか
「問題、あるよっ！－！」

ガオーッ！－！－！ という効果音が聞こえて来そうな勢いで、蚊帳の外状態だった姫乃が会話に割り込んで来た。何処ぞの虎かお前は？

「何かあつたつけか姫のん？」

「性格が大人びて、からかい甲斐が無くなっているところつー！」

本人の前でからかい甲斐と言われてもな…。

「頭もかなりぶつけたからな。多少、オカシクなつていても仕方あるまい」

「……やっぱり変だよおー…」

「まあまあ…。別に悪い変化つて訳じゃないし、そこそここれは喜ぶべきだと思うぞ?」

「それもそつか。康くんを止めるストッパーが増えたと思えば喜ぶべきだよね?」

「…………お前が普段から俺を如何思つているか、よく分かつたぜ……」

「お待ちかどりさま~」

康が毒されて落ち込んだ辺りで、店主がタイミング良く紅茶とクッキーを運んで来た。紅茶とクッキーの甘い匂いが、仄かに香る。

「今日の茶葉は、『偶には基本に戻つてみつか?』と言つて、セカンドフラッシュのダージリンを淹れてみたんだが、なーんか物足りん。きっと私の舌が肥えている所為だな、うん。砂糖とレモン水はお好みでどーぞ」

それから、「それでは、『ゆっくりと御寛ぎ下さいませ』、と大仰に一礼した店主に対し、姫乃が無自覚なのか如何かは分からぬが、極めて自然に毒を吐いた。

「店主が店主らしい事しているのって、久し振りに見たよ～」

「塩入れられたいか小娘？」

「『めんなさい！』」

やはり、年季が違うのだろう。流石の毒娘も、店主の爽やかな切り返しには屈した。尤も、店主が大人げ無いだけとも言えるが…。

「ま、普通の味だな…。これはダストか店主？」

「そ。お察しのとーり、ダストだよ。生憎、何時も使つているペコは入荷待ちでね。仕方無くダストを使つたつて訳よ。やつぱり津が入つていた？」

「少しな」

「うーむ…、次からはティーパックを替えるべきか…？」

店主が思案している合間にクッキーを食べていると、駄目姉が「理貴くん、しつもん」と言って來たので、クッキーを皿に落としてから、「何だ?」と問い合わせた。

「『ダスト』とか『ペコ』って、何のこと?」

「茶葉の等級 つまりは、葉っぱの大きさの事だ。『ダスト』が一番小さく、『ペコ』が『オレンジ・ペコ』と『ダスト』の中間ぐらうこと覚えておけば良い」

つまり、『オレンジ・ペコ』へ『ペコ』へ『ダスト』の順である。

「へへ、『茶葉の等級』って、葉っぱの大きさで分けているんだね？」

「大体は、な。例えば『ペコ』に芯芽が多く含まれていると『フワフリー・ペコ』と呼ばれるんだが、そういう細かいところは自分で勉強しろ」

ちなみに、『シルバー・ファイン・ティッピー・ゴールデン・フワフリー・オレンジ・ペコ』という長い等級も有つたりするが、これぐらいになると、最早一般的では無くなる。

「……せつこやよお、理貴。刀佳さんとは如何やつて知り合つたんだ？」

「そんな事を訊いて、如何するつもりだ？」

「いや、後学の為に訊いておひつて思つただけだ」

「だから軽く教えてくれ」と言われたところで、如何返答すれば良いのか判断に困る。「『破魔』のいざいざに巻き込まれて、現在進行形で監視されている」と言つたところで真実味は無いだろうし、嘘を言つたところで刀佳が話を合わせてくれるか如何かも不明だ。

ならば此処は、無難な返答をするしかないな……。

「ちょっとした困り事の解決に、一役買つただけだ。特別な事なんて何も無いぞ？」

嘘ではない。ただ、かなり省略しているだけだ。

「そつか…。やっぱり要是は切欠だよな……」

「……誰と仲良くなりたいのかは知らんが、まあ頑張れ」

一応、元親友としてそう言つておいた。

（

「そんじゃ、また明日学校で つて、明日は臨時休校だつたな…。

んじや、また明日何処かでな

「ばいば~い!!

「またな」

あれから喫茶店で30分程過ごしてから会計を済ませ、姫乃と康は帰路についた。そして残つたのが、自分と駄目姉と刀佳の3人であつた。

「今、何時だ？」

「6時12分を過ぎたところだな。秒まで読み上げるか？」

「結構だ」

つまり、あと48分は刀佳と一緒に居なければいけないのか…。
さて、如何する?

「……」田家に寄つてから送るが、それでも良いか?

「ああ、じゅうじゅうは一向に構わない」

如何やらじゅうじゅうの意を汲んだらしく、刀佳は上手くじゅうじゅうの話に
合わせてきた。近くで監視出来るのなら、どんな状況や面子でも構
わないようだ。

「えっ? そんなに刀佳さんのお家つて遠いの?」

「いや、最近何かと不審者が多いからな…。念の為だ」

「ふうん。そうなんだ…」

単なる口実だが、正直こいつ一人でも大丈夫だと思われる。『破
魔』は『獣人』に匹敵する程の身体能力があると聞くし、何かあつ
ても逃げる分には問題無いだろう。

「すまんな。藤魅を借りさせてもらひついで?」
「あつ、いえつ、別に構いませんよつつ!」
「俺は物じやないんだがな……」

そんなやり取りをしながら歩く」と5分程。何事も無く我が家に到着した。

「しばし待て」

「分かった」

そして自室に入ると、急いで制服から私服へと着替え、玄関の鍵と携帯をポケットに入れ、玄関先へと戻った。

「待たせたな。さっさと行こうか」

「そうだな」

家を出るとすぐに、刀佳は細い路地へと入つて行った。自分もそれに続き、路地へと足を踏み入れた。如何やら刀佳はこの道を知っているらしく、その足取りには迷いが無かつた。

「地理には詳しいのか?」

「通学区内限定だがな。流石に、区外となると大通りくらいしか覚えていない」

「それでも十分だと思うのだがな?」

「いや、まだまだだ」

そこで会話が途切れ、しばらく無言で歩き続けた。刀佳はこちら

と話しかけた。どうだつたが、如何やら振るべき話題が無いらしく、口を開いてはつぐみ、視線を向けては逸らすといった行為がしばらく続いた。

「こちらとしては刀佳の話題の傾向を把握しておきたかったので、敢えて話題を振らず、黙つて歩いていた。そんな静かな時だつたらなのか、小さな異音が、やけにはつきりと聞こえた。

「ボ」
「ボ」
……

その異音は例えるならば、水が湧き出す音に近かつた。しかし、街中で水が湧く様な事態は滅多に無いし、かと言つて排水溝に水が流れ込む音にしては、やけに異質過ぎた。

「ボ」
「ボ」
……
「ボッ」
「ボッ」
……

「（一体何処から聞こえてくる……？）」

音が近くなつて来ているということは、こちら側が向こう側が、近付いているという証拠だ。あるいはその両方だ。それよりも、だ。歯車が軋むような音は結界が展開する音である。ならば、この水が湧くような音は、一体何が始まる音なのだろうか？

「ん？ 如何かしたのか藤魅？」

「今、何か見えた様な気がしてな……。多分、気の所為 何だアレは？」

咄嗟についた『嘘から出た真』と言うべきか、はたまたは、これまでの様に突発的『フラグ』と言うべきか？ それはさておき、黒い炎の様な物体が、路地の先に見える空き地から、次々と湧き出でいた。より精確には、黒い泉の様なモノから湧き出でていた。気にしなかつたらおそらく気付かなかつた。と思えるほど、ソレの存在感は薄かつた。

「なつ！？ 『ウイル・オ・ウィスプ 蔭火』 ツ！！？」

「（しかし、あれが ）」

ソレらの光景を見た刀佳が、かなり貴重だと思われる驚きの声を上げた。常時冷静な態度を崩さない刀佳でも、驚く事はあるらしい。

『魔人』出現の前兆か……。確かに『蔭火』は、死といった『負』に集まる何らかの存在で、そして『魔人』は地獄から這い上がり来る亡者とも、形を持つた悪意とも言われているが、その情報の真偽は定かではない。

何故なら、『蔭火』も『魔人』も、視覚でしか認識及び観測出来

“ない”という特性上、その実態の多くが解明されていないのである。当然、情報の質はかなり低く、信用性は皆無に等しい。

フイヴィイイイイイイイイイイイイイイ

「……何をしているんだ？」

新たな音の発生源である刀佳を見てみると、笛みたいな物を咥え、思いつきり息を吹き込んでいた。かなりの大音量だったが、不思議と耳は痛くなかった。もしかすると、異音は鼓膜を通さずに知覚しているのかもしれないな…。

「報せ笛を吹いている。しばらくすれば、増援が到着する手筈だ」

そう言いながら刀佳は、手にした笛を見せびらかした。大きさは手の小指程で、吹き込み口から鋭角な縁に息を当てて音を出す、エアリード方式の笛であつた。それをスカートのポケットに戻しつつ、刀佳は何時もの様に落ち着いた口調で、忠告してきた。

「藤魅は家に戻つてゐる。此処は危険だぞ？」

「もうだな。もうあんなことない」

「出来るだけ早く避難すると良い。でないとまた、結界に巻き込まれる」

「それは勘弁願いたい……」

1人だけ避難する事に対する僅かな罪悪感と、情報を得られない惜しさもあつたが、現在の身体の仕様^{スペック}では、こちらの方が足手纏いになる事は確実なので、此処は大人しく身を引く事を選択した。

まあ実際のところ足手纏い云々（うんぬん）は嘘で、面倒事に巻き込まれたくないという感情が、主な行動理由であった。

第8話（後書き）

紅茶でマターリした後、まさかの『魔人』戦！？と思わせておいて、主人公撤退。やはり組織としての『破魔』とは、極力関わりたくないようです。刀佳への友好度が高くなれば、話もまた別でしょうが……。

ところで、紅茶についての蘊蓄ですが、ぶっちゃけますとWikιから引用した文章を元に使わせてもらっています。ありがとうございます！

ちなみに第9話の投稿は、今月の第4週を予定しております。多分、23日になるとと思つ。……思います。『ひつじ期待。

オーバー

第9話（前書き）

「Jの作品は、11月23日の26時頃に投稿されました。

作者「…………まさに時間通り！！」

「…………まさに時間通り！！」

明らかに時間超過です。本当に有り難う御座いました。では、以下
の本編をどうぞ。

転生者が、敵にしたくないモノは3つある。1つ目は『女性』、2つ目は『超越体』、そして3つ目が『未知』である。1つ目の『女性』は、転生者が高確率で男性に転生するが故に。次に2つ目である『超越体』とは、一般的には『神』と呼ばれる存在で、降くだそうが消滅させようが、事後処理も含めて面倒な為。そして最後の『未知』は、転生者を殺し得る唯一の可能性であり、転生者の好奇心を満たす得る唯一の可能性でもあるからだ。

「降参しろ。お前が戦女神である事を除いても、此処で失うには惜しい人材だ」

「慈悲など要らぬつー。さつさとその神槍で、この私を突き殺すがいいー！」

「…………参謀長、こいつを説得する何か良い考えは無いか？」「うーん……。お望み通りさくつと殺つて、ぱぱつと生き返らせれば宜しいかとー？そーすれば、どちらの希望も叶いますしねー」

「…………それもそうだな」

「待て。それは如何いう意味……ぐぼつ…………」

「伝令、医務長を呼んで来い。重傷者1名、即死状態。　とな
「はつー！」

「『初日のジンクス・続』（後編）／初日考察。そして長女の
宣戦布告」

（）

「さて、如何したものか……」

「元来た道を戻つたのは良かったが、途中で歯車が軋む様な音と共に結界が発動し、案の定、また内側に閉じ込められてしまった。本日2度目の体験である。

「（先程の場所から500m以上は離れているんだがな……）」

「安全確保の為に、わざと広めに結界を張つたのだろう。『魔人』がどれ程の脅威なのかは知らないが、これだけ用心する必要があるという証拠でもある。……まったく、これ程の大規模になる事が分かつていれば、

「（……まあ、今更後悔したといひで仕方が無い。次善を考えるといじょう）」

さて、この場合の次善は、何とすべきなのだろうか？この状況を利用して、『破魔』に関する情報を集める事か？それとも、面倒事に巻き込まれない様に回避を選択する事か？はたまた、この結界から脱出する方法を模索する事か？

「（…………情報は惜しいが、此処は回避と脱出を念頭に行動する

とじよひ(「

情報を集めようとすれば、刀佳を含む『破魔』の関係者達に気付かれるだろうし、『魔人』に襲われる可能性もある。……それに、また応接室に呼び出される可能性がかなり高い。そうなるぐらいなら、わざと結界から脱出した方がマシだろう。

「（取り敢えず、結界の境界まで近付くとするか…）」「

それから2分ばかり歩き、境界の10m程手前で足を止めた。情報収集のやり方は、図書館でしたやり方と同じく、物を投げ付ける事で反応を見てみる。しかし流石に本は近くに無かったので、道端に落ちていた小石を本の代わりとし、投擲してみる。

すると図書館の時とは違い、石は結界に弾かれ、そのまま地面へと落ちた。出来れば比較検証の為に本も投擲したかったが、やはり無い物は無いので、此処は諦めるとする。

「（斥力が働いているな…。つまりこの結界は、内側のモノを閉じ込める為の檻　　と/or 事か？）」「

結界は基本的に『隠蔽』、『隔離』、『守護』の3つを目的としており、この場合は『隠蔽』と『隔離』を兼ねた複合結界なのだろう。より精確に言ひなれば、『内部隠蔽』と『外部隔離』を兼ねた複合結界と言ひべきか？　試しに手で触れてみたが、やはり結界を擦り抜け、外側へと突き出た。

おそらく今、結界の外側からは手が宙に浮いている様に見えるのかもしれない。

「（……まるで上級ホラーだな。しかも、お粗末過ぎて笑えない類たぐいの）」

“結界の違い”という情報を手に入れただけでも、良しとするべきなのだろう。そう自分を納得させつつ、結界を通り抜けた。すると音や風が戻り、蒸し暑さも戻つて來た。どうやら結界は、人以外も色々と隔離しているらしい。

「さて、帰るか…」

無論、“結界内に”ではなく“家に”だが。

（）

「ただいま」
「…………」
「あ、お帰り～理貴くん。^{りき}早かつたね？」
「まあ、色々とな……」

家に帰宅し居間に入ると、長女と次女と母親が居た。次女は母親が倒れた一件以来、こちらと距離を置いているらしく、和解する気は未だに無さそうである。ちなみに母親は台所で料理をしている為、こちらの挨拶には気付かなかつたようだ。三女は文学少女らしく、自室で読書でもしているのだろう。

「ところで駄目姉、忘れない内に240円を回収しておきたいんだが？」

「うう……。やっぱり、覚えてるよね……」

「今、取つて来るから……」と言い残し、とぼとぼと居間を出て行つた。確かに、自分達のお小遣い（月に2千円）からして240円は全額の1割2分に値するが、それ程落ち込むものなのだろうか？ もしかすると、駄目姉なりに買いたい物があるのかもしれないが……、こちらの知つた事では無い。

「ねえ……」

「何だ？」

実際に3日振りに次女から訊ねて來たので、一体どんな罵倒の言葉を吐き出すのかと、若干心の中で身構えつつ、無愛想に聞き返した。

「別に、240円くらい奢つてあげなさいよ。男でしょ？」
「だから器量を見せると？」

「やつよ

」の時自分は、彼女の存在を半ば無視しつつ、その発言に至った彼女の思考を推測し、その結果を元に対策を練つていた。

彼女との親密度からして、先の発言は自分を家族の1人と認めた上での発言では無いだろつ。 とすると、先の発言はこちらにに対する嫌味であり、同時に排除意識の表れなのかもしれない。

であれば、今後彼女に対する発言及び行動は、他人同士の関係で問題無いと思われる。それでも一応、歩み寄りの選択肢は残しておぐが…。

取り敢えず此処は軽くあしらつて、適当に話を打ち切るといつ。喧嘩腰で会話を続けても非生産的だし、それにもう暫くすれば、駄目姉が戻つて来るはず…。

「そうだな。参考にしておこいつ」
「くつ……それに霞凛姉さんを“駄目姉”呼ばわりとか、あんた何様のつもりなの?!」

「義兄様のつもりだ。それが如何かしたのか?」

「少なくとも、私はあんたを義兄だなんて認めないつ！ それに霞凛姉さんは勉強が出来て、バスケも出来て、裁縫も出来る。少なくとも、あんたよりは駄目じやないわよーー！」

彼女からしてみれば、あんな姉でも怠慢の姉なのだろつ。それを馬鹿にされて怒つてているのだろつが

「（ふん。勘違いも甚だしい……）」

自分は次女が思い込んでいる様に、長女を能力面で馬鹿にしている訳では無い。どちらかと言えば、性格・行動・知識面で馬鹿にしているだけである。尤も、バスケに関しては技量や判断力の点で、こちらが秀でている事は先日で確認済みだ。

「そのまま勘違いしている。少なくとも自分は、」

「理貴くん、240円持つて来たよ~」

好意的に接しているつもりだ。と言おつとしたところで、駄目姉が居間に戻つて來た。朝の登場が出遅れたから、今度は早めに來たつもりなのだろうか？

「うん？ 私が如何かしたの？」

こちらの視線に気付いたのだろう。髪を整えたり、服に埃や塵が付いていないか如何かを確かめながら、駄目姉は不思議そうに訊いて來た。この誤つた反応を見る限り、駄目姉に『空気を読む程度の能力』を期待するのは、仕様的に酷なのかもしない。

「…いや、何でも無い」

そう言つた直後、思わぬ伏兵が現れた。

「みんなー、御飯出来たわよー」

母親だった。

……どうやら、母親には『空氣を読む程度の能力』があるらしい。

とあると、

「なるほど。母親から遺伝しなかったのか…」

「えつ？ 何のこと？..」

「いや、何でも無い」

「むー……。わざわざから一体何なのさ？..」

「…」

「気にするな。ハゲにするぞ」「なるんじゃなくて、するのつ？！」
「ああ。そのつもりだ」「しかも予定済み！？」
「いや、そうなる」「断言しちゃった！？」「

こうして暫く、次女を放置して長女と戯れていると、母親の「乳繰り合」うのは食後にして頂戴」という意図的としか思えない発言により、長女が羞恥心で顔を赤らめ、次女がその様子を見て勘違いし、また激怒。それを軽くいなしていると、三女が2階から降りて来て「つるさい」と一喝し、その場は如何にか収まった。

それから、ギスギスとした（次女が自分に対して一方的に、だが）空気の中で食事を終え、順番に入浴した後、よつやく独りになれる時間が出来た。そして、今日一日を要約し得る言葉を探し、考え方抜いた末に呟いた。

「…………長かった…………」

朝の一悶着に始まり、元親友や元幼馴染を始めクラスメイト達と再会し、図書館や体育館での騒動を経て、放課後のティータイムで一息付いた数十分後には『壠火』と遭遇し、また結界に巻き込まれるも脱出。そしてまた一悶着を経た後に、ようやく開始地点へと戻つて来た訳だ。

「（流石、恋愛系統の世界だ。併ならん……）」

かなり昔の事だが、恋愛系統の世界へ転生した事があった。とは言え、そこは『観測された世界』で、自分は町人Aだつたり学生Aとして転生した訳だが…。そこで情報を集めている内に、分かつた事が一つあった。

それは、観測された人物達が、必ずしも観測された結果通りに動かないという事である。

観測された結果通りに動かないのは、こちらが有り得た結果を観測しただけであつて、必ずしもそうなる事は無い。 という事なのだろう。

尤も、『観測された世界』から派生した『観測した世界』の場合は、ほぼ観測した通り事が進むのだろう。どちらにせよ、主人公として観測された人物は、色々と巻き込まれる宿命にあつたようだが…。

……つまるところ自分もまた、巻き込まれやすい宿命にあるようだつた。今日の様に此処まで露骨だと、第三者による運命操作論をついつい疑つてしまふ。

「（尤も、操作されているのは周囲の人物だけになるだろうが…）」

何故そう思えるのかと言うと、自分には、『神秘的干渉を無効化する能力』が備わっているからである。……いや、「備わっている」と言つよりは、「前世から持ち込んだ」が適当か？ まあ、とにかく、自分にはそういう能力が有るのだ。

神秘的干渉とは、『魔法・呪術・運命・奇跡といった神秘的因素による干渉』を指しており、魔法による攻撃や、呪術による呪殺。そして運命操作による絶対死の運命すら、無効化する事が可能なのである。

ちなみに此処で『干渉とは、『転生者である自分の精神や意志、生命活動に対し、他者が介入する事』を指している。

「（……そんな事よりも、優先対策事項があつたな）」「

今日一日の行動を振り返って反省すべき点は、組織としての『破魔』に目を付けられた事だらう。『破魔』が絡むと、組織抗争ないし事件、または厄介事に巻き込まれるのは、体育館や『魔人』の一件で良く分かつた。

ではこれからこの先、『破魔』が絡まない様に学校生活を送るには、一体如何すれば良いのだらうか？ 一番簡単なのは、何もしない事である。図書館を利用せず、変な場所には近寄らず、以前の様な学校生活を送れば良い。しかしそれでは、あまりにも学校生活がつまらない。そうするべらいなら、まだ町を歩いていた方がマシだらう。

とするとやはり、今まで通り自然体で過ぐすに限るな……。

その方がボロも少なく、上手く立ち回れる事だらう。

「（他に対策事項は……無いな。ならば後は、異音について考察するべらいか？）」「

尤も、これについては大体考察し終えており、後は前例を探すだけとなるのだが、おそらくこの身体には、『神秘を異音として、聴覚で感じ取る能力』があるのだろう。疑問なのはその能力が何時覚醒したのかだが、図書館の時か、またはそれ以前には覚醒していたと思われる。

「（ま、不便でなければ、特に問題は無いな）」

そう。常時発動しつぱなしの魔眼や、煌々と光る刻印。背中に生える一対の翼や、高密度の魔力を貯蔵する為の尻尾や角と比べれば、この程度の能力はまだマシと言えよう。

ガチャガチャ…

「理貴くーん。何で鍵なんか掛けているの〜？」

「まずはノックしろ。話はそれからだ」

「こーん、こーん」

と言いながら、ドアをノックする駄目姉。本当に、内鍵を掛ける様にして良かつたと思う。こうして駄目姉による、突然の来訪（不正侵入）を物理的に防げるのだから。

「 で、何の用だ？」

「お姉さんうしく、勉強でも教えてあげようかな～？ って思つて
来たの」

「ああ、それなら間に合つている。帰つて良いぞ？」

「えー、だつて2ヶ月分だよ？ それに期末テストまであと僅かだ
し……。本当に大丈夫なの？」

「そう言えば、やつこいつイベントも近々あつたな……。

「これでも山勘は結構当たる方でな。心配は要らん。むしろ、自分の学力の方を心配したら如何だ？」

「大丈夫だから心配出来るんだよ。……本当に大丈夫なの理貴くん
？」

「ぐどい。何なら、主要5教科の総合点数を競つても良いぞ？」

ちなみに此処で言う主要5教科とは、国語・数学・共通語・理科・
社会である。どうもこの世界には、国際統一された言語が存在する
らしく、それを第一母国語として学習するのだそうだ。

「ふ～ん…………。じゃあ、私が勝つたら、理貴くんの時間を1日
分もらうね？」

此処でフラグか……。まあ、立ておいても問題無いだろう。こ
ちらが勝てば、1日中静かに過ごせるだけだしな。

「なら、じゅりも同じじへ、そちらの時間を1日分も借りとしよう。それで良いな？」

「うん。それで良いよ。でも、やるからには負けないんだからねー。」

「ふん、元よりこちらもそのつもりだ。2ヶ月分の空白など、有つて無きに等しい」と思え」

いつもして互いに宣戦布告し、期末テストの総合点数を競う事になつた。とは言え、テストまであと4週間もあるんだが……。ま、今日はから取り組んでも早くは無いだろう。

「（今後、学習する暇が有るか如何かも不明だしな……）」

“有り得ない”といつ言葉が“有り得ない”世界故に。

第9話（後書き）

今回、前書きでも書いた様な有様ですので、急いで投稿した分、推敲不足の部分が有る可能性も有ります。まあ、暇を見つけては「**推敲 再投稿**」と何時もの作業をしますが、それ程変わらないので気にしなくて結構です。

ちなみに気付かれた人もいるでしょうが、訂正しまくった例の話で述べていた未公開設定が、今回明かされております。戦闘場面が無いので地味に思えるかもしませんが、チートです。チートな主人公です。これだけは覚えておいて下さい。

……さて、次の投稿予定日ですが、余裕も欲しいので12月の第4週辺りになると思います。それまでは、他の作品でもお楽しみ下さいませ。

以上。
オバ

第10話（前書き）

作者A「やつぱり予定は未定だつたんだーー！」
作者B・C・D『な、何だつて～～！？』

投稿予定期を一口ばかり超過してしまいました。済みません。では、以下の本編をどうぞ。

招かれざる客。それは敵や認められない相手であつたり、忌避する人物や憎悪を抱く対象であつたりする。気に食わない。むかつく。許せない。迷惑。劣等感から来る妬み。優越感から来る嫌悪。理由は実に様々だが、要するに、特定の場所や行事に来て欲しくないモノが来る事を意味しており、排除意識の婉曲的表現と捉えても問題無いだらう。

「理貴～、ちょっと来てちょうだいな～」

「何用だ母さん？」

「窓際に居る蜘蛛を追い出して欲しいのよ。頼めるかしら？」

「まあ、構わないが…。やはり、虫は苦手な方なのか？」

「ええ。例え益虫でもあまり近付きたくないわね～…」

「なるほど。……ところで、害虫が出た場合は如何対処するんだ？」

「勿論、全力で駆除するに決まっているじゃないの」

（）

「早朝の来訪者／歓迎する者、される者」

翌朝、6時に目覚めてからある事に気が付いた。思えば今日は、臨時休校であったと。

「……取り敢えず、身支度でもするか」

寝間着から適當な私服に着替え、顔を洗い、髪を整え、牛乳をレンジで温めた後に市販のココアパウダーを溶かし混ぜ、目覚まし用のココアを作る。

人によってはココアパウダーを御湯で溶かし、少量の牛乳を入れたりして飲むそうだが、私的に濃厚さが足りなくなる為、自分は前者の方で飲む様にしている。尤も、単に濃厚さが欲しい時は、豆乳を牛乳の代わりに入れたりもするが…。

そんなことはともかく
閑話休題。

そしてココアを飲みつつ、報道番組を見たり新聞を読んだりした後、カップを洗って乾燥機の中に置き、自室へと戻った。勿論、内鍵は掛けている。

「（さて、今何をする？）」

ほんの4日前に行つた市立図書館に、再び足を向けるのも良し。未知を求めて市内を散策するのも良し。敢えて家に籠つて、情報端末機で情報を収集するのも良いだらう。

「（それに、この世界のゲームをするのもまた一興）」

「この世界は科学技術が非常に発達しており、オンラインゲームや格闘ゲームの一部では、脳波を精確に読み取り、仮想体^{アバター}に動きを反映させるといった事が可能らしい。それ以外にも普通のゲームもあれば、将棋やチェスなどの古典的ゲームもあるので、飽きる事はまず無いだろう。

「（昨日の図書館の時もそうだったが、こういった何気無い選択肢が案外重要だつたりするからな…）」

そういふ思案している内に、家中に有線電話装置の呼び鈴^{チャイム}の音が、電子的に鳴り響いた。我が家^{インターホン}の有線電話装置は、玄関脇と居間にあら1対だけなので、誰かが来訪したといふ事なのだろう。

居間へと向かい、有線電話装置^{インターホン}の受話器を取つて、通話状態にする。

「早朝から何用だ刀佳？」

玄関脇の有線電話装置に付いているカメラからの映像を見つつ、そう切り出す。

「ほう、私の姿が見えるのか？」

「……呼び鈴の横に、カメラが付いているのは分かるか？」

「……なるほど。最近のはそういう作りなのだな」

「うんうん。と妙に感心している刀佳が落ち着く頃合を見計らい、再び切り出す。

「それで、早朝から何用だ?」

「うむ。実は昨日の件について、色々と個人的に礼やら話をしたのでな。そちらが良ければ、私が仮住まいしている屋敷にまで来てくれないだろ?」

……どうやら先程の選択肢は、制限時間付きの選択肢であつたらしい。特に予定も無いので不都合では無いのだが、刀佳が組織としての『破魔』の関係者である事と、『屋敷』という単語が妙に引っ掛かり、素直に頷けないでいた。

と言づか、『刀佳と共に行動する=面倒事に巻き込まれる』という公式は、既に自分の中に確立されており、ほぼ確実に何かしら起じるだらうと予測していたからでもあった。

「今からか?」

「出来れば、な。用事があるなら、また後日に日を改めるが如何に?」

如何やら、どのみち強制イベントであるらしい。それに態々(わざわざ)出向いて来た刀佳を追い返すというのも、酷(ひどい)ものだ。

「そこで40秒待て」

「？　ああ、別に構わないが……」

返事を聞き終える前に自室に戻り、鍵と財布と携帯電話をポケットに入れ、上着を羽織り、靴下をはき、自室を出て靴を履いて玄関先へと出る。それから鍵を掛け、刀佳へと向き直る。

「待たせたな。それでは案内を頼む」

「ああ、頼まれた」

そして住宅街を抜け、国道を横切り、近道だと思われる路地を通り、墓場を通過し、山道へと入り、鳥居をくぐり抜け、険しい石段を登り続け、ようやく刀佳の言う“屋敷”らしき建物が見えた。所要時間にして、1時間と少し。学校までの距離も然程変わらないとの事なので、刀佳は学校を往復する度に、約2時間分歩いている計算となる。

如何^{どう}やら、学校の行き来ですら修行の一環であるらしい。流石に、雨や雪の日はバスを利用しているらしいが……。

ちなみに、道中でコンビニに寄つて朝食代わりのおにぎりでも買おうとしたところ、刀佳がお礼の一環で朝食を振舞ってくれるらしい、買ひ必要は無いと言われた。道理で、早朝から訪問して来た訳だ。

「しかし……、空腹状態で1時間歩くのは如何かと思つた……」

一時期、食事を取らずに済む身体で過ごした経験もあり、空腹にならない状態は慣れているが、空腹の状態は我慢出来ても慣れてはない。やはり、三大欲求の飢えは生物的に死活問題なのだろう。そう考えると、人間の身体はよく出来ていると思える。

「私もそう思ったのだがな…。師範が如何してもと言つので、こうして迎えに来た訳だ。確かに屋敷の料理は上手いが、何も付き合わす必要は」

「いや、そうじゃなくてだな…。何故、交通機関を使わずに歩いたのか？ と婉曲的に問い合わせたつもりだつたんだが、これでは直接的に問い合わせた事になるな」

まあ、目的を達成したのだから良しとするが。

「そういう事か。なに、今の内に会話しておこうと思つてな。師範の事だからおそらく、藤魅に剣術を体験させる筈だ。となると必然、会話する時間も限られてしまう。だからこうして会話を先取りしているという訳だ。済まないな」

それから、「じつちだ」と刀佳に案内され、がつしりとした木の大門の脇にある小さな扉から、屋敷の敷地内へと入った。中はよくある武家屋敷の造りをしており、庭園はやはり日本庭園であった。時々、カコーンと聞こえて来ることから、鹿齋しきあいしも何処かに在るのだろう。もしかすると、枯山水も何処かに在るのかも知れない。

「良い場所だな」

雰囲気的にも、拠点的にも。

「当然だ。 そうなる様に、 そつである様に、 日々手入れを欠かしていないからな」

「そうか…」

辺りをさり気無く見渡す。 屋敷の周辺には、 結界が一重二重に張り巡らされ、 齒車が軋む様な音が絶えず響いていた。 地面には何かしらの陣が等間隔に敷き詰められ、 監視用と思われる式が至るところで鳥などの動物に擬態し、 周囲を見渡していた。 この厳重さはまさに、 『要塞』と言つても過言ではないだろう。

それ程、 守らなくてはいけないのか、 はたまたは警戒しなくてはならない理由が存在するのか…。 どちらにせよ、 現在の自分とは無縁でしかなく、 今のところ“見える”事による、 自身の挙動不審に注意しなくてならない程度の害でしかない。

「（しかしやはり、 日本では東洋魔術が基礎となつてゐるようだな。 まあ、 当然と言えば当然の事だが…）」

そんな事を考えながら歩いていふと、 やや前方を歩いていた刀佳が横に並び、 神妙な顔付きで話しかけてきた。

「さて…、そろそろ師範の居る道場に着くのだが、1つだけ注意しておこう。今まで私は、人を招待した事が無くてな。それ故に、師範はお前に興味を持つたらしい。だから何かしら反応を探る様な行動をしてきても、何時も通り冷静に対処して欲しい。何故か師範は、新顔には悪振る癖があるからな……」

「留意しておこう。（早速、面倒事に巻き込まれそうだ……）」

段々道場に近付くにつれて、竹刀の激しく打ち合う音が道場内で反響し合い、籠つた様な音として道場の外にまで聞えてきた。音量と音が切れない事から、それなりの人数が打ち合っている事を悟らせた。

「失礼します」

刀佳は竹刀の音に搔き消されながらも、そう一言断つた後、静かに入室した。自分もそれに倣い、一言断り入室した。壁沿いを歩き、師範らしき人物の元にまで近寄る。

「師範、只今戻りました」

刀佳がそう報告すると

「ほう、そいつが例の小童か。御主、名は何と言つへ。」

60歳台の嚴つい男性が、自分を見定める様に視線を巡らしつつ、そう訊ねてきた。顔や腕の至るところに刀傷らしき傷が走つており、黒いスーツを着ればヤクザと見間違えられる程に、強面の漢おとこであった。

その上、身に纏う雰囲気が威圧感を放つており、初見の人では十中八九、気圧けおされてしまい、会話が成り立たないか、途切れ途切れになるのだろうと思えた。

それほど、威圧感のある人物なのである。「ならば貴君もまた気け圧おされるのか?」と問われれば、「無風に等しい」としか答えるしかない。

こちらとて伊達だてに転生はしておらず、殺氣で一般人（ヤンキー、チンピラ等）を急性心臓麻痺にして病院送りにした人物や、鬪氣で地盤沈下させる様な人物とも、殺り合つたり、死合死合（試合）したりしているのである。故に、刀佳の師範程度では圧おされるどころか、こちらから物理的に圧し潰す事も可能なのだ。

尤も、状況的にも人物的にもするに値しないので、圧し潰す“氣けすら湧かないのだが…。

「『藤魅 理貴』と申します」

「ふむ、なかなか肝が据わつてあるな…。刀佳、少し相手をしてやれ」

「承知。 と訳すで、少しばかり付き合つてくれないか藤魅？」

有無を言わせず、竹刀しないを手渡してくる刀佳。つまりこれもまた、強制イベントの一つなのだろう。如何も刀佳といふと、強制イベントが発生しやすい気がしてならない。 いや、実際にそうなのだろう。

正直なところ、彼女を攻略する側としては遣りやすい事この上無いが、攻略する気が無い自分にとっては、面倒この上無い展開である。……まあ、恋愛感情を友愛感情に誘導するぐらいは出来るので、実質問題は無い。

と思う。

そう考える合間に、上着や靴下を脱いだり、貴重品をポケットから出したりと、試合の準備は着々と進んで行つた。対する刀佳は既に準備万端な様で、軽く素振りをしつつ、規則ルールを説明し始めた。

それによると、今回は防具を着けない慣らし試合なので、突きは禁止。その他にも刀身部分を掴んだり、執拗な追い討ちや武器の投擲、罵倒するのも禁止らしい。それ以外なら“何でも有り”ルールで、有効打を先に3回入れた方を勝者とするそうだ。若干、剣道の規則とも似ている。

「他に、聞きたい事はあるか？」

「……仮にだが、殴り蹴り、投げが決まった場合、それは有効打と判定されるのか？」

「いや、あくまで竹刀による一撃が有効打だ。私達がするのは剣術の試合であつて、総合格闘技の試合ではないからな」

刀佳はそう言いつつ、両手で竹刀を正面に構え、剣先をこちらの

目線の高さに合わせ、半歩前に右足を出した。それに対し自分は、左手で竹刀を垂直に前に突き出し、半歩後ろに右足を引いた。互いに距離は5m前後。詰めよつと思えば、直ぐにでも詰められる距離である。

「ほう、随分と面白い構えをするのだな藤魅。質問はこれで終わりか？」

「ああ。何時始めても良いぞ？」

「では、こち尋常に……」

「勝負」

7時47分。静かに試合が、始まった。

第10話（後書き）

『後書きとか、作者の愚痴とか』

実はこの第10話。突貫で完成させたものです。最終投稿日以降、何をしていたのかって？ 二次創作物を書いてみたり、ラノベを読んだり、モンハン3rdで狩りをしたりしていました。当然、ストックは零。無計画つて怖いですね……。

よつて、次の投稿までかなり間が空きます。次回の予定日は、来年1月の中旬頃。早ければ上旬といったところです。

ところで、1日遅れですがメリクリ。作者はその日、知人からP-C版の『SNOW』を貰いました。何と500円以下だつたそうです。時代の流れは恐ろしい……。

オーバー。

第1-1話（前書き）

最近、プロット無しの一次創作の難しさが分かつて来た作者です。「なら、プロット書けば良いじゃん」と言われそうですが、展開が決まつていなが故の展開の自由をも捨て難く……。

ちなみに、今回は難産でした。戦闘シーンを書くのは好きなんですが、格闘シーンを書くのだけは苦手にして……。手足の動きとかよく分からぬんですよ。

それでは、以下の本編をどうぞ。

武術や武道における一対一の試合の場合、勝負は威圧と牽制から始まる。それが試合前の会話であったり、試合中の構えや発声、手足の急な動作であったりする。ただし、即決即断や単純思考をしがちな野性派の相手に対しては、そこまでの効果は見込めない。ならば如何するべきか？ その場合はパブロフの犬の如く、『攻めれば反撃される』という事を理解するまで反撃すれば良いのである。

「結局、実力差が有れば如何とでもなるのだがな」
「しかし勝負の世界において、それは先読みと並ぶくらいに重要ではでは？」

「威圧はそうだが、牽制はそつでも無い」
「何故そう思うので？」
「牽制より誘導が重要だからだ」
「それじゃ、牽制を擧げた理由について一言」
「牽制が比較的容易だからだ」

（）

第11話・因果応報『切り札』編

静寂。そう、今道場は静寂に包まれていた。おそらく師範辺りが、要らない氣を利かせてくれたのだろう。……まあそのお陰で、こうして思考に浸れる訳だが。

「（さて、どの様な試合内容にすべきか……？）」

正直なところ、勝つだけなら簡単出来る。しかし、簡単に勝てばフラグが乱立しかねない為、当然却下。かと言って簡単に負けるのも癪なので、これも却下する。となると

「如何した藤魅？ 攻めぬならこちらから攻めるぞ？」

「別に構わないが……」

取り敢えず今は、目先のイベントに集中するとしよう。あまり上の空では、刀佳に対しても失礼というものだ。……尤も、決まりきった勝敗を如何にかしよつと模索すること自体が、刀佳に対して失礼か？

「こぞり、参る！」

見事な摺り足で踏み込んで来る刀佳に対し、自分はその動作を眺めながらも待ち構えていた。そして刀佳の攻撃圏内に、自分が突き出している竹刀の刀身が入つた瞬間、刀佳はそれを打ち払おうとするが、円を描く様に切つ先を回す事で払いをかわしつつ、踏み込みながら胴をなぞる様に竹刀を振り抜き、刀佳の背後へと出た。

これらの攻防を要約するのは簡単だ。単に見切つて、素早く反撃した。たったそれだけの事なのだが、鍛えてすらもいないこの身体

では、通常では見切るどころか回避すら出来ず、反撃する事も叶わないだろ。ならば何故、見切りと反撃が出来たのか？

その答えは、至極簡潔である。見切るには動体視力は勿論、ある程度の思考速度が必要である。そして人間の筋肉は、傷付くのを防ぐ為、最大の2～3割程度しか力を出せない様に制限が掛かっている。ならば、思考速度を引き上げ、制限の上限値を引き上げれば良いだけの事。

幸いこの世界の人間は、体内分泌物による身体能力の強化が容易だつたので、こうして鍛えずとも刀佳を相手に立ち回れるのである。

しかしその反面、筋肉や脳の酷使による代償として、筋肉痛・立ち眩み・頭痛・内出血・筋繊維断裂などの諸症状が起こり得るが、経歷上ズブの素人が経験者に勝つ方法としてはこの上無い方法なのもまた確かなので、代償については甘受せざるを得ない。

ちなみに、身体能力の任意の活性化については、事故による後遺症という設定で通すつもりだ。

閑話休題

「一本つ！」

これを有効打と判定した師範がそう宣言すると、途端に周囲がざわめき始める。「有り得ない」、「まさか」、「まぐれだろ」等々。取り敢えず外野、黙れ。元々無いやる気が加速度的に削がれて行く

上、居る事自体が目障りだ。

「やるな藤魅…。予想以上で驚いたぞ?」

「自分も、此処まで出来るとは思つてもみなかつたがな…」

基本能力の低い今の身体で、人間よりとはいへ亞人の『破魔』に反撃出来るのは“思つてもみなかつた”。もしかすると、『破魔』は力を出すのに何かしらの条件や制限が掛かっている種族なのかもしないが、どのみち本氣を“出さない”ないし“出せない”的ならば、このまま勝たせて貰うだけである。

「だが、もう油断はしない。次は本氣で行かせてもらひ

「……立つたな。敗北フラグ」

ただの験^{げんかつ}擔^{たか}ぎに過ぎないが、それでも先の刀佳の自^じ己^ご発言により、彼女の低い勝率が更に下がつた様な気がした。ちなみにこの場合、「やはり、心躍る戦いとはこうでなくてはな」や「では、2戦目と行こうか?」などの発言が適当だと思われる。

「ん、何か言つたか?」

「いや、何でも無い。今度はこちから攻めさせて貰つ

「来い」

低く跳躍する様に距離を詰め、左手で持つた竹刀で外から内へと

足払いをする。それを刀佳は足を入れ替えながら後退する事でかわし、中段辺りにある自分の頭へ竹刀を打ち下ろしてくるが、振り戻した竹刀で難無く防ぎ、腕が軋むのにも構わず勢い良く弾き上げる。それに続けて、隙だらけの刀佳の顔面へ躊躇い無く右拳を突き出す。

すると予想通り、反射行動で身を守ろうと竹刀を盾に拳を防ごうとしていたので、すぐさま拳を解いて刀佳の手ごと竹刀の柄を掴みつつ、逆手に持ち直した竹刀で刀佳の右脇腹を狙う。が、拘束されなかつた左手でこちらの腕の振りを止めた為、腹を蹴飛ばす事で刀佳の体勢を崩し、追撃を行つべく重心を前へと傾ける。

「くつ……！」

「がつ？！」

その際、体勢を崩しながらも牽制で振り払つてきた竹刀を潜くぐる事でかわし、瞬時の切り返しを竹刀で防ぎつつ、もう一度蹴飛ばす。

そして更に踏み込み、進路の妨げとなる竹刀を刀佳の手から弾き飛ばしたところで二度蹴飛ばす。

「痛つ……！　おいつ……！」

若干苛付いた問い掛けを聞き流し、本日四度目となる蹴りを空中

から繰り出す。

卷之二

その攻撃を防御する為に交差した刀佳の腕が、みしみしと嫌な悲鳴を上げ、殺せなかつた分の衝撃が、刀佳を外野へと押し飛ばす。かく言う自分の足もまた悲鳴を上げており、もう一度今の威力で蹴り出せば確実に折れる様な気がする程、不味い状態である。……正直、調子に乗り過ぎた様な気がする。

「…………なあ、藤魅…………」

「一応、私も女子なのでな……。あまり……、けほつ……、足蹟にされると、……地味にへこむのだが？」

そう言いつつ、ふらつきながらも立ち上がる刀佳。余程強かつたのか、胸をさすり、呼吸を整えている。蹴りの衝撃が

「反省はしている。が、後悔はしていない。戦術的には有効だったようだしな」

「確かに……。ところで、降参しても良いだろうか？ しばらく竹刀を握れそうにない

蹴りを直接受けた刀佳の右腕は、見事に腫れ上がつており、しば

らくすれば痣になるであろう事は一目瞭然であった。

正直な話、こちらも限界に近付いていたところなので、この提案は非常に有り難かった。先程から立ち眩む程の頭痛がし、竹刀を振り回していた左腕はかなり痛めており、激痛が絶えず走っている。当然、足も例に漏れず酷く痛む。

「良いから早く冷やして来い。痣が大きくなるぞ？」

「その前に、だ」

刀佳は静かに膝を折り、その場で正座した。如何やらそれが降参の合図のようで、外野がより一層騒ぎ出すも、師範が一喝することで事態は收拾した。その後、刀佳は医務室へと向かい、自分は食堂へと案内された。

食堂と言つても広い畳部屋に座布団を敷き、全員で囲む様に食事をする方式らしく、既に配膳は済んでおり、後は各自席に着くだけであった。

「（これで華やかだつたら、宴会の席に様変わりなんだがな……）」

如何見ても、現代版の士族の食事風景にしか見えない。とは言え、上座から位の高い順に座る様な本格的なモノでも無さそうだが、妙に張り詰めた空気がそれを連想させる。ちなみに、何故か自分の右隣が師範で、左隣が空席となつてている。おそらく其処に、刀佳が座るのだろう。……何だこの板挟みの布陣は？

「（単なる客人への配慮。と考えるのは浅慮か？）」

そういう思考を張り巡らせていると、両腕に包帯を巻いた刀佳が食堂へと入室し、予想通り自分の左隣の座布団へと腰を降ろした。しかし、両手ではなく片手に花か……。ああ、まだマシだと思つておひづ。

「合掌……。」

師範が突然そう叫ぶと、自分を除く46名分の「頂きます！！！」の声が食堂に響き渡り、それから皆一斉に朝食を食べ始めた。自分も遅ればせながら「頂きます」と手を合わせた後、箸を手に取る。

「といひで御主」

すると早速、師範から問い合わせられた。位置的に何かしら行動を起しきすとは思つていたが、いつも早い段階で仕掛けて来るのはな……。

「武術経験はあるか？」
「無いですね」

尤も、この世界に限つての話だが。

「ほひ……？ では、刀佳の攻撃を悉く見切つたのは偶然だと？」
「…………逆に聞きますが、見切るには武術経験が必須なのでしょうか？」

香りが良い鰹出汁の味噌汁を啜り、師範の問いに問いを返す。

「武道や喧嘩のでも構わぬが、間合いの測り方は一朝一夕で身に付くモノではない。例え、天賦の才を持っていたとしてもだ」
「…………ところで師範殿は、体感時間という言葉を知っていますか？」

体感時間とは、基本的に1分間当たりの心拍数に比例する。人間を基準にすると、人間は1分間で60拍なのだが、象は1分間で20拍。従つて、象から見た人間の動きは、3倍速に見えるのだそうだ。

「知つてはいるが、それが如何したというのだ？」
「思考速度を引き上げれば、体感時間は比例して伸びると思いませんか？」

此処で、『ゼノンの矢』について説明しようと思つ。『ゼノンの矢』とは、「飛んでいる矢のある区間を無限に区切つて観察すると、矢は進むだけの時間を得られず、その場で止まつていると見做せる。

従つて、飛んでいる矢は止まっている」といった内容のパラドックスである。

つまり、無限に区切つた1つ1つを観察出来るだけの思考速度情報処理能力 が有れば、体感時間的には、矢は止まつて見えると述べているのだ。勿論、実際に時間が止まる訳では無いので、現実時間的には、矢は物理法則以外の法則に止められる事は無い。

「まさか御主……」

先程の説明で理解出来たのか、それつきり黙り込む師範。その隙に、中断していた食事を再開する。それにしても、朝からアジの開きが出て来るのはな…。カルシウムで骨を強くしろという事なのだろうか？ まあ、焼き魚を出されるよりはマシなのかもしれない。そう思いつつパリパリ食べていると、ずっと静かだった刀佳が声を掛けってきた。

「ところで藤魅」

「何だ？」

左に視線を向けると、然程食事の進んでいない刀佳が真面目な顔をして、左手に持つ箸を不器用に動かして見せた。…………既に嫌な予感しかしない。

「実は、私は本来右利きでな」

しかし、今の刀佳の右腕は嚴重に包帯で巻かれており、左腕は軽く包帯が巻かれる程度の処置である。傍目でも、右手を使うのは困難そうであった。

「そうか。ちなみに、左手を使うと右脳が活性化するそうだ。神経神話の創造的な右脳を信じている訳では無いが、これを期に両利きを」

「……ひじで皿む無く左手を使つてはいるものの、やはり慣れなくてな……。このままでは折角の料理が冷めてしまつ」

「……それで？」

詰んだな。もつ色々と。

「そこで、だ。もし藤魅が良ければ、私の食事を介助して欲しいのだが？」

……本当に、刀佳と居ると強制イベントしか起きないな……。選択肢は何時になつたら出て来るんだろうか？

「お膳をひじひじに向ける。箸も貸せ」

身体を左90度回転させ、自分のお膳を刀佳のお膳に隣接させる。

そして右手に自分の箸を、左手に刀佳の箸を持ち、食事を再々開する。

「…………如何した？ 食わないのか？」

左手の箸で挟んだオカズを刀佳の口元へと運びつつ、右手の箸を駆使し、自分のお膳に乗っている料理を次々と食べていく。

「いや、あまりにも器用なのでな……。少々驚いていた
「それ程でもない」

「では、気を取り直して……」

擬似並列思考による介助と食事の同時作業など、政務と戦後処理を同時にこなした過去と比べれば、雑作も無い事である。

刀佳が口を開き、口内を外気へと晒す。整った白い歯と、鬼灯の様な赤い舌が唾液でてらてらと濡れており、とても扇情的な光景とは少しも思えない事に、安堵する。何故なら、三大欲求の1つである性欲を理性が制し切っているという事は、自らを律し切れているという事実に他ならないからだ。

決して、禁欲主義者でも完璧主義者でもないが、異性からの誠実さに対して、下心を秘めた誠実さを返すというのも失礼なのでは？

と考え、様々な精神修行に明け暮れた結果、今の様な極致に至つた訳である。尤もそのお陰で、『朴念仁』や『唐変木』といった、有り難くない称号を頂く様になつてしまつたが…。

「中に入れるぞ？」

「ん……」

こうして、意中の相手や恋人に料理を食べさせる定番イベント『はい、あ～ん』なるモノを、羞恥心や邪念を交える事無く、衆目の中で淡々と済ませるのであつた。

第1-1話（後書き）

思考加速やら身体能力活性化。後者はよく見かけても、前者は少ないんじゃないでしょうか？ ちなみに、本編中に出で來たパラドックスですが、『ゼノンの矢』という名前ではなく、『ゼノンのパラドックス』の一つである、飛んでいる矢に関するパラドックスに名前を付けただけですので、正式名称ではありません。

なお、活動報告にて報告が御座いますので、一度目を通しておいて下さい。次回の投稿日は3月くらいです。しばらくは月一投稿の予定。

オーバー。

【短章】 第2話（前書き）

予定日より3日程過ぎたけど、その分完成度は高い。……と思いたい作者です。何だかんだで遅れましたが投稿します。ちなみに、多分ホワイトマークは書きませんので、期待しないで下さい。

では、以下の本文をどうぞ。

【短章】 第2話

転生者の彼であつても、共感出来ない物事は多々有る。例えばそれが宗教であつたり、記念日であつたり、風習であつたりする。彼にとつて、宗教とは心の支え、記念日とは口実、風習とは過去の惰性に過ぎず、それらに一応の理解は示すものの、やはり共感し切れないものである。特に、宗教的な記念日が、風習として続いている場合は。

「2月14日か……。最早、名ばかり記念日を通り越して祭日だな」「良い事じやないか。特需が何であれ、経済的には好ましい現象だろ？」「

「それは認めるが、チョコだけが特需といつのもな……。諸外国では

カードや花束、ケーキやクッキーも対象なのだが……」

「つまり、君はチョコ以外も貰いたいと……。全く、贅沢な悩みだね～？」

（）
【短章】 第2話・奇襲後、奇襲

この世界における2月14日は、意中の異性や親しい人にチョコレートを贈る日でもあり、愛を告白する縁結びの日ともされていた。つまり、男女問わず、告白率が異様に高い日でもあった。

「疲れた……。こんな時にこそ糖分だな」

数々の呼び出し・待ち伏せ告白を話術により回避しつつ、3桁近くの貴い物のチョコと共に帰宅した転生者は、チョコを効率良く消費する為、早速大量のチョコを湯煎^{ゆせん}で溶かし始めた。所謂、チーズフォンデュならぬ、チョコフォンデュである。

「おや、良い匂い……。帰っていたのかい弟くん？」

熱せられたチョコが放つ甘い匂いに誘われたのか、姉貴が部屋から出て来ていた。つづく、本能に忠実な人だと思つ。

「先程な。姉貴も食べるか？」

ちなみに、互いに弟・姉と言つてはいるが、弟分・姉分として気軽に言い合つているだけで、本当の姉弟ではない。むしろ、姉貴の方が年齢的に若いのだが、大人っぽい容姿と言動の為、姉貴と呼ばせて貰つている。それにしても何故、近親関係に無い異性が同じ屋根の下に居るのかと言つと、それは互いの関係に理由があつた。

自分は姉貴の欲求を満たす代わりに、姉貴に要望を通して貰う。そして姉貴は自分の要望を通す代わりに、自分に欲求を満たして貰う。そんな変わった関係を続けるには、同居していた方が何かと都

合が良いのである。特に、秘匿性・内密性といつ点においては
。

「ふむ、戦利品のチョコを湯煎……。せしづめ、チョコフオントコ
と言つたところかな?」

「正解だ。 という訳で、果物やパンを準備して欲しいのだが?」
「了解。任された」

それから淀みなく準備が終わり、鍋を机の卓上電磁調理器に移し
て温度設定をした後、2人で鍋を囲み、食べ始めた。

「それにしても、慕われているねえ弟くんは。別に、羨ましくはな
いけれど」

未開封のチョコの山を見遣りつつ、雑穀バーをチョコの海に浸し
てはちろちろと舐る姉貴。相変わらず、行儀を気にしない人である。

「そう言う姉貴も、毎年幾つか貰つていいようだが?」

「残念ながら、それは全部本命のチョコでね。つまり未だに、義理
チョコなる親愛・友愛のチョコを貰つた覚えが無いのだよ。全く、
鬼才変人たる私の本質を見ずして、外見で寄つて来るのは何事かね
?」

と若干怒り気味で、チョコと唾液でふやけた雑穀バーを咀^{そし}
やく

嚼し終ると、今度は一本丸ごと串に刺したバナナをチョコの海へと沈めては、普通に食べていた。流石に姉貴でも、バナナに付いたチョコは舐めないようだ。

「時に弟くん。巷では、『チョコうどん』なる風^{ホヤセントロック}変わりな食べ物が流行っているそうだが、美味しいのだろうか?」

『チョコうどん』。糖分+炭水化物の糖尿病まつしげらな料理である。常人にとっては、あらゆる料理にマヨネーズを掛け、マヨネーズ万能説を掲げて止まないマヨネーズ信者こと、『マヨラー』の存在くらいに理解し難い料理だろう。

「…………御飯に砂糖を振り掛ける甘味至上主義者なら、おそらく美味しいと感じるのはずだ」

「なるほど、理解した。つまりは、味覚異常者に限るという訳だね?」

「まあ、そう言つ事だ」

なお、姉貴が言つ味覚異常者とは、酒を飲む人、ブラックコーヒーを飲む人、梅干を食べる人、カレーの辛口を食べる人、山葵を食べる人などを指す。これらの事から分かる様に、姉貴は子供舌である。しかしかと言つて、極端な子供舌でもない。砂糖がじやりじやりする程入っているアメリカ風ケーキが、一口田でゴミ箱送りになつたのが良い例だ。

「ああ、満たされた。偶には、甘味^{あまみ}へしあわせではない」

姉貴はやうやく、チヨコでべとべとなつた口周りを一舐めし、出来なかつた分はティッシュで拭き取り、奇麗にした。本当に、精神年齢が残念な人だと思つ。

「ところで弟くん。今日はチヨコ以外に何を貰つたかね？」
「メールアドレス及び電話番号。それと、ファーストキスを少々」

やうやく、姉貴はパンツと手を叩き、非常に良い笑顔を浮かべた。

「それは重複^{あやうじよ}。重複しなくて良かつた良かつた」

そして何故か、床下に有る貯蔵庫から花束を取り出し、自分に手渡して来た。確かに、そこは隠し場所としては絶好の場所だが、取り出す場所としては微妙過ぎる……。

「これは……、白薔薇と木香薔薇か？ 確か花言葉は？」
「白薔薇は『尊敬』、『私は貴方に相応しい』。そして木香薔薇は『純潔』と『初恋』だ。受け取ってくれて嬉しいよ弟くん」
「…………どういたしまして」

それにしても、一体何処で恋人フラグを立てたのやら……。まあ、姉貴程の人に告白されるのも満更では無いし、此処は男冥利に尽きると思つた方が良いのかも知れない。

「さへと……」

そう言つと、姉貴はおもむろに立ち上がり、服を脱ぎ始めた。白衣、ロングスカート、ハイソックスと、次々と脱ぎ捨てていく。

「…………待て。何故、服を脱ぐ?」

「なに、弟くんに『純潔』を奉げようと思つてね。より具体的に言い表すのなら、『快楽の為の性交』と言つたところか?」

「急展開だな、おい」

『据え膳食わねば男の恥』と言つたのは、一体何処の何奴だっただろうか? 珍しく赤面した下着姿の姉貴を抱き寄せつつ、ふとそう思うのであった。

【短章】 第2話（後書き）

「この後、転生者が美味しく頂きましたwww」というオチ。R18なシーンなんて書けないし出せない。ある意味、官能小説を書くのも才能なんでしょうね。グロなら幾らでも書けるんですが…。次回の投稿日は3月あたり。以前書いた様に、月一更新の予定です。

オーバー。

とある幻想の夢現世界（前書き）

にじファン行け。と言われそうですが、時間が無かつたのと連載予定では無い事から、実験作として置いておきます。本当は転生者（以下略）の本編を上げたかったのですが、推敲の時間が無かつた為、何故か此処4日間くらいで書いていた『とある魔術の禁書目録』の一次創作を上げておきます。

まあ、時間が無いのは大方コレの所為せいなのですが…。なお、作者はまた2～3ヶ月程執筆活動がままなりませんので、ご了承下さいませ。

「もしも～～」や「～～だつたら」とか「～～すれば」など、人は過去や現在、未来において分岐点を探そうとする生物である。しかも、自身に無関係な事においては、最善・最悪を問わず分岐点を探そうとする。しかしこの物語は、最善でも最悪でもない。作者が見出した分岐点から派生した都合の良い物語に過ぎず、従つて原作から乖離する事は至極当然の事であり、最早、名や設定だけを借りた別物となるだつ。

しかし、しかし二次創作とは、一次を元とする一次の創作である。独創性の無い二次創作はただの再構成に過ぎず、元となる『とある魔術の禁書目録』の海賊版でしかない。かと言つて、名だけを借りた独創性に溢れた二次創作は、原作ファンにとってはかなり受け入れ難い物である。例えばそう、『三国志』から派生した『三国志演義』の様に。

従つてこの作品は、巷に溢れている「原作沿いだが随所に独創性が見られる」様なある意味平凡な作品の1つとなるだつ。だが、敢えて問いたい。「奇をてらう必要はあるのか?」と。

設定や発想が斬新だ。なるほど、面白いかもしれない。

オリキャラが魅力的だ。なるほど、面白いかもしれない。

能力や魔術がチートだ。なるほど、面白いかもしれない。

ある意味、『都合主義』だ。なるほど、面白いかもしれない。

しかし、以上の事は原作で遺憾無く發揮されており、『マーヴラブ』や『ネギま!』、『魔法少女リリカルなのは』や『真・恋姫十夢想』といったアンチしやすい作品でもなく、オリ主人公を原作介入させても似た様な結果に落ち着くといった、独創性が發揮し辛い一次創作もある。

「オリ主人公と原作組を絡ませたい」。その気持ちは分かるが、居ても居なくとも事の結果が似たり寄つたりであつたり、展開や状況が改善ないし改悪されたりする程度なら、それは再構成物の延長線上にある二次創作であり、『STEINS;GATE（シユタインズ・ゲート）』風に言つのなら、それは「アトラクタファイールド内における世界線の収束でしかない」と作者は思うのである。

例えば、ある人の死期が決まつている場合、多少の時間的ズレはあるもののその人は他殺死・事故死を問わずに死ぬ。これと似た様な事が、二次創作でも起こつていて。例えば、『虚空全爆破事件』^{クラビトン}が起こる。例えば、『幻想御手事件』^{レベルアップ}が起こる。例えば、『樹形図の設計者』^{アグラム}が破壊される。例えば、『御使落し』^{エンドセルフォール}が起こる等々。過程は違えど結果がほぼ同じであるなら、それは世界線が収束していると言えるだろう。

ならば、如何にして収束を回避し、独創性を發揮するのか？ 答えは単純にして明快だ。分岐以降、収束不可能な程の分岐点において、別のルートへと分岐すれば良いのである。例えば、インデックスが出血多量で死ぬ。例えば、『一方通行』^{アクセラレータ}が御坂クローンを殺し尽くす。例えば、風斬冰華^{かざきりひょうか}が『幻想殺し』^{イマジンブレイカ}で消される等、収束不可能な程に分岐させてしまえば、後は作者の独創性次第となるのである。

とは言え、上記で述べた様な暗い展開は作者の望むところではなく、この一次創作物の構想からして、逆方向の明るい展開・状況が多くの事をご了承頂きたい。尤も、駄文で遅筆で、プロットもまともに書かない作者の当作品が読まれるか如何か、気に入られるか如何かは、甚だ疑問だが……。まあ、「目指せ完結……」といった低い目標を持つて頑張るので、適当に生温かい目で見守って下さいませ。

『Q&A方式の作品紹介』

Q・主人公は？ A・主觀による。 が、基本は我らが上条さん。

Q・性別変更は？ A・誰得過ぎる。 鈴科百合子？ 誰それ？

Q・性格改変は？ A・有り得る。 ちなみにインテックスさんは確定済み。

Q・独自路線？ A・当然至極。

Q・独自設定・解釈は？ A・用意している。

Q・オリキャラは？ A・多分出ない。 もし出てもサブかモブ程度かと。

Q・ジャンルは？ A・科学と魔術が交差する“学園系日常物”。 これ重要。

Q・戦闘シーンは？ A・「見せられないよ…」的なシーンは少ないとだけ明言しておく。

Q・恋愛は？ A・歳相応。カツプリングは気分次第といつ事で…。

Q・最後に一言。 A・『インテックス』ファンの方はブラウザバックの用意を。以上。

／＼以下本編

7月20日。夏休み初日であり、学生ならば遊ぶか宿題を終わらせようと努力する最初の日でもあるが、彼『上条』かみじょう『当麻』とうまにとつてその日は補習授業の初日であり、魔術という科学と相成す非現実側の人間と遭遇した不幸（？）な日でもあった。それも、自身が住む学生寮の7階ベランダといつピンポイントかつ妙な場所で。

「えつと……、どちら様でせう？」

ベランダの欄干に、干される様に引っ掛けている少女は銀髪碧眼で、見慣れない金糸の刺繡がされた白い修道服に、同じ様な意匠のフードを被つていて、肌は白くて顔は可愛くて、まるでお人形さんかどつかのお姫様の様で……と、冷静に観察している様で混乱している上条の言葉を無視するかの様に、目の前の少女から空腹を主張する音が聞えて来た。

そして数秒の沈黙が流れた後、少女が小さな口を開き、響く様な可愛らしい聲音で、上条に空腹を訴えかけるのであった。

「おなか、へつた……」

「は…………？」

「む、聞えなかつた？ お、な、か、へつ、た、の」

「あー…………、英語でおk」

「W e 1 1 . . . I , m v e r y h u n g r y .

完璧な発音だった。……まあ、そんないじょつ閑話休題。

「悪い、ちょっと混乱していた。 で、改めて聞くが、どちら様でしようか？」

先程のやり取りで少し冷静さを取り戻した上条は状況を把握する為、謎の少女と会話を試みる事にした。「なーんか、また不幸な事にでも巻き込まれるんだろうなー…………」と半ば投げ槍気味に。

「そんな事より、まず食べ物を恵んでくれると嬉しいかも」「食べ物ねえ…………」

如何やら、この謎の少女はかなり空腹らしい。会話を成立させたければ何か食わせと…。しかし真に残念な事に、昨夜雷でも落ちたらしく家電製品のほとんどがパーになつた為、冷蔵庫の中身も当然パー。しかも唯一の非常食であつたカツブヤキソバは、湯を切る際に誤つて流し台に麵をぶちまけてしまい、敢え無くゴミ箱へ。よつて、今すぐに食べれそうな物など当然残つてない筈もなく

「あつ、あの机の上に乗つているパン。あれで良いから食べさせて」

「…………マジか？」

謎の少女が言つたパン。それは、パーになつた冷蔵庫から取り出したヤキソバパンであつた。朝方、一縷の希望を賭けて冷蔵庫から取り出してみたものの、例に漏れずパーになつており、ラップ越し

でも酸っぱい臭いがする非常に拙いパンだった為、今の今まで机上に放置していたのであった。

「あの時、ゴミ箱に捨てていれば見つかる事も無かつただろうに……」と今更後悔したところで少女の空腹が収まる筈もなく、言われるがままヤキソバパンを手にし、少女の前へと戻った。

「ほらよ。味は保証しないぞ？」

色んな意味で。と断りつつ、少女の眼前へとヤキソバパンを突き出す。これにより、酸っぱい臭いに気付いて「やつぱり要らない」って言わねーかなと上条は僅かばかり期待するも、飢えた少女にそれを期待するのは、土台無理な話であった。

「ありがとうございます。そしていただきます」

挨拶もそこそこに、少女はパンに噛り付いた。それもラップ付きで。ついでに言つと、上条の右手付きで。

……
……
……
……

従来の世界線　流れなら、此処で上条は悲鳴を上げ、己の不幸を呪うだけで終わりなのだが、幸か不幸か、世界はこの状況を分岐点とし、全く新しい道へと分岐してしまった。私達のよく知る原作『とある魔術の禁書目録』から大きく乖離・逸脱し、収束する事のない未知の世界へと分岐したのである。

尤も、これ以前にも分岐点があつたりしたのだが、劇的に乖離・

逸脱した分岐点は観測至上これが初めてであり、最早、比較観測も意味を成さない程に分岐してしまった。これから先、彼らにどんな展開・状況が訪れるのかは全くもって不明だが、もし気になるのなら、この新たな派生先を見守つて行くと良いだらう。

噛まれた。と思った瞬間、上条の右手に痛みが走る。痛い。マジ痛い。まさか右手『ごとラップ』と食べるとか予想外にも程がある。つか痛い。マジで痛い。と悶絶しつつ思考し、そして絶叫する。

「痛ええええええー————！」

「ふあ、ふおめえん」

しかし、それでも咀嚼そしゃくを続ける少女に業を煮やした、もとい痛みに耐えかねた上条は、如何にか外そつともがいでいる、中指が少女の喉奥へと触れた。瞬間、

バギャッ

と人体から出る箸のない音と共に、勢いよく後ろへと弾き飛ばされた。如何にか受身を取つたものの、したたか冷蔵庫に身体をぶつけて咽んでいる、何時の間にか少女が室内へと入つて来ていた。

「けほけほつ…………。おいお前、ちゃんと靴は脱いだんだろうな

？」

「いいえ。ですが、そんな瑣末事より優先すべき確認事項がありま

す

先程までの可愛らしい声から一変し、全ての感情を排した様な無機質な声。その事にいぶかしみつつ顔を上げると、まるで別人かと思う程の無表情つぶりで、少女が幽鬼の如く佇んでいた。その瞳はもはや人間味を失い、カメラの様な機械的な冷たさしか感じ取れなかつた。

「貴方、一体何をしましたか？」

翡翠の双眸が、床に座り込んだ上条を映し出す。

「は……？」

「貴方が『首輪』に触れた瞬間、『首輪』とリンク状態にあつた『ヨハネのペン』自動書記はおろか、『偽りの聖女』及び、最終保護機能『転星』まで完全破壊されました。もう一度問います。貴方、一体何をしましたか？」

「何つて聞かれてもな……」

そう呟きつつ、上条は己の右手を見遣る。超能力が当たり前に様に存在するこの学園都市において、上条の能力はかなり異色だ。炎を生み出したり、風や水といった物を操つたり、透視や読心、空間転移といった超能力者っぽい能力とは違い、『異能を打ち消す能力』という能力らしく、対象が異能の力によるモノであり、かつ触れられるのなら、程度を問わず打ち消せるのである。

例え、核融合^{フュージョン}し尽くしそうな火炎の塊だろうが、戦略級の極太レーザーだろうが、触れれば打ち消せるのである。

目の前の少女が言った「破壊」という言葉を信じるのならば、自分は少女の異能で出来た何かを触り、打ち消してしまったのだろう。

しかし、『首輪』などといった異能なんて聞いた事も無ければ見た事も無いし、そもそもこの少女が学園の関係者か如何かもすんごく怪しい。

「……一応、確認しておくれどさ。お前、ＩＤカード持つているのか？」

「ＩＤカード。名前から察するに紙片状媒体の事なのでしょうが、私はそのＩＤカードなる物を持してありません。それよりも、先の質問の返答は如何に？」

小萌先生、頭痛が痛いとです。

「まあ、待て待て……そもそも『首輪』とか何なんだよ？ 能力の隠喩とか、そんなもんなのか？」

「『首輪』とは、私の所有する10万3千冊の魔道書を保護する為に取り付けられた魔術靈装 すなわち、安全装置を指します」

「『首輪』に10万3千冊の魔道書に、魔術靈装に安全装置。……

……それ何て一次元？」

つか10万3千冊の魔道書とか、90万666冊の幻書を保有する某ヒロインに到底及ばない件について。

「まさか、時間・金・知識を注ぎ込めば実現可能なのが魔術で、それ以外が魔法だなんて言い出さないだろうな？」

「概ね、その解釈で合っています」

なあ、それ何て『型月』？ つかコイツ、電波なオタクさんなのだろうか？ とすると、この見慣れない修道服と言い、謎の登場の仕方と言い、何となく説明は付く。付くのだが……。 だとしたら、この態度の豹変っぷりは、如何説明付けれ

ば良いのだろうか…？

…………ま、取り敢えずもう少し話してみるとしよう。

「ところで、さつきの質問の答えな。俺には『異能を打ち消す程度の能力』がある。以上、説明終わり」

「生糸の『魔術師殺し』ですか…。戦闘経験は？」

「猫男を相手に千日手なレベル　まあ、素人喧嘩ならまず負けないな」

「つまり、未経験なんですね？」

「てめーは高校生を相手に高望みし過ぎだ」

「ていうか、ぶっちゃけあの猫男相当な実力者だぞ？　様々な武術を組み込んだあの自称・殺人拳は、相手を効率良く潰す事に特化している上、無駄に洗練された無駄のない無駄な動き　様は牽制なのだが、それがかなり巧い。多分、大抵の相手なら初見殺し（一方的にボコれるという意味合いで）出来る程に。」

「それはともかく、私が貴方に求める役割は“矛盾”です。矛となりて魔術師を制圧し、盾となりて私への魔術攻撃を防ぐ。尤も、基本戦術的には貴方が盾で、私が矛を務めますが」

「え？　何この強制パーティ入り？　つか、お前戦えるの？」

「って言うか、そもそも何で上条さんも戦うのでせうか？」

まあ、これまでの設定（？）から察するに、こいつの所有する10万3千冊の魔道書を狙っているのだろうが…。…………何故、俺も？

「10万3千冊の魔道書の知識を元に、対象の魔術への特定魔術を組み上げ無力化。その後に、制圧。　といった流れが、私の基本

□カルウェポン

戦術となります。故に、貴方は時間を稼ぐ事を念頭に、私への脅威を排除ないし制圧して頂きたい。なお、貴方が共に戦う理由ですが、私に付けられた『首輪』及び、その他の安全装置を無意図的にとは言え破壊した為、最早私は歩く戦略兵器、戦争の火種でしかありません

せん

「はあ……」

「どうか、「10万3千冊の魔道書の知識」とな。もしかしなくても、自分は完全記憶能力者なのだと暗に示しているのだろうか？まあ、まだ電波容疑が完全に晴れていないので、判断は保留といったところだが。

「従つて、貴方には破壊した責任があり、それに伴う諸問題を解決する義務が付随します。尤も、貴方が責任感の強い善人である事が大前提ですが」

納得しましたか？ と、先程から感情の籠もつてない翡翠の瞳が俺に向けられる。つまり何だ。「自由を与えた責任を取つて下さいつて解釈すれば良いのだろうか？

「…………何このクーデレもといシンドカラ？」

「永久凍土融解しろ。もといデレる。折角の可愛いな」と言つべきか？ 顔が台無しになつてんぞ？

「ま、俺の力が何処まで通用するかは分からねーけどや…。行けるのなら、一緒に地獄の底にまで付いてつてやるよ」

「」の時の台詞は、自分なりの軽口・冗談のつもりだつたのだが……。

「その言葉、誓えますか？」

“どうやら向こうには、それを本気と受け取つたらしい。今更、「前言撤回します」なんて言い出せる様な雰囲気でもないし、発言の自由に責任が付き纏うのは法律的にも明らかである。それに、『漢に一言は無い』といつ決まり文句が、此処日本にはある訳でして

「おう。何なら、指切りしても良いぜ？」

結局、この様に啖呵を切る事になつたのであつた。

ちなみに、指切りの歌詞の内容は結構エグく、「指切りげんまん。嘘吐いたら針千本呑ます。指切つた」なのは「ご存知だろうが、『指切り』は遊女が意中の男性に思いを伝える為、小指を切り落として渡したという話が元になつており、『げんまん』はゲンコツ1万回など、約束を破る事を戒める内容となつていて。

尤も、現代つ子が指切りの由来や、『げんまん』の部分を理解してまでやつてているか如何かは疑問だが。

「では、小指を出して下さい」

「あれつ？ お前、指切り知つてんの？」

何時の間に、指切りは外人さんにまで知られる様なグローバルでメジャーなものになつたのだろうか？ まあ、世界的に日本の戦略物資（オタク文化）が知られている訳だし、案外折り紙なんかと一緒に知られているのかもしねり。

「はい。知り合いの日本人から、古式縁のある約束方法だと習いました」

「へえ。じゃあ、歌は覚えてるのか?」

「はい」

「だったら折角だし、会わせてやるひづへ。」

んで、互いの指を絡めて、お決まりの歌詞を歌つのであった。しかし、緊急事態でも事故でも戦闘中でもないのに、こうして女子に触れるのは初めての事かもしないな……。とか思つてゐる内に歌は終わり、あつさりと指を切られた。名残惜しいと云つた何と言つた。これが思春期か?

「どうで今更な話なんだけどさ。何で家のベランダに引っ掛けつていた訳?」

しかも、7階といつ落ちれば即死か重体間違い無しの壇をのベランダに。

「追手から逃げる途中で屋上に飛び移ろうとしたところ、背後から撃たれてバランスを崩し、落下。そして偶々ベランダへと引っ掛かり、今に至ります」

「…………あのさ、色々とソシコソシたいところがある訳なんだが、取り敢えず一つだけ聞かせてくれ。お前、今すぐ逃げなくても良いのか?」

「ひつして話している間に包囲されていました。なーんて、アホ過ぎるやい?」

「心配には及びません。『首輪』が外れ、魔力が使える今、存在の偽装は至極容易であり、かつ反撃も以下同様。従つて、こちらが逃げる道理など一切ありません」

訳「ここから先は、ずっと私のターン……」。敵対者の皆様、「ご愁傷様です。

「なるほどねい……。それで、お前はこれから如何するつもりなんだ？」

一応、「地獄の底まで付いてってやんよ（キリッ）」と宣言したからには、ある程度行動を合わせなければならぬ。 と思つた為、さり気なく訊ねてみる。尤も、学業を疎かにしない程度にしか合わせないつもりだが。

「当面は体力回復に努め、英氣を養う予定です」

そこで畠頭の「おなかへつた」へと回帰するんですね？ 分かります。

「んじゃ、ちやんとした朝飯でも食いに行きますか？」

「お誘いは大変嬉しいのですが、私は日本通貨を持ち合わせていません。故に」

「そんくらい奢つてやるから気にすんなって。ほら、早く行こうぜ？」

「…………ありがとう」「やあこまめ」

時間帯と費用の都合上、マックで朝マックといつ“ちやんと”か如何か怪しい朝飯になりそうだが、ま、そこはいじ愛嬌（？）って事で。

おまけ

「あのなあ……。いくらクーポンとサービスで半額とはいえ、5種類1セットずつの5セットって、上条さん的には結構手痛い出費なのですが？」

「そう言えばあのヤキソバパン。少し酸っぱかったですね……」

「……………どうぞ召し上がって」

「いただきま

とある幻想の夢現世界（後書き）

THEネタ放題。何時もの事ですので、気にしないで下さいませ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1814n/>

転生者の生き様と在り方

2011年5月7日06時14分発行